針　葉　樹

II



如水會山岳會　1926年報　商大山岳部

美津濃の冬-山の用品



神田小川町

大阪 神戸 美津濃 名古屋 京都

電話神田 3570—73

針　葉　樹



（第 二 號）

1926

「針葉樹」（第二號目次）

個中之趣……江口定條……一
山吟五首……（如水會員）…江中薰……二
守屋山小記……（顧問）…田村和四郎……三五
山を愛する人々の爲に……松木謙三……三三
只見川を中心として……高木英二……六
東北朝日岳……1. 野川遡行……澤一郎……四二
2. 尾根傳ひの記……尾金二……四四
3. 大鳥川より庄内へ……村瀬和四郎……四九
天神峠より三國峠まで……邊九郎……五五
八甲田山と鳥海山……十嵐數馬……六二
山岳の歌……（如水會員）…大塚金之助……六九
北鎌尾根の印象……島灝……七二
前穗高北尾根に就いて……吉澤一郎……七九

始めて山に登りて……(豫科教官歩兵少佐)…後藤十郎……八四
晩春の劒岳と針ノ木越え……一郎……八九
登山の意義に就いて……東吉……一〇六
野澤の事ども……榮司……一〇九
岳友へ……(詩)……英二……一一六
ありし日の秩父……(如水會員)…阿部恒雄……一二〇
秩父九句……近藤……一二四
秩父雜感……高木……一二五
秩父遡行……松倉……一三五
秩父雜記……
1. 秩父……金二……一三七
2. 西澤……瀞……一三九
3. 秩父事情……吉澤一郎……一四四
秩父
・日原より將監へ……村尾……一四四
・丹波より將監へ……中島……一四九
・將監より栃本へ至る徑……吉澤……一五一
・雁峠以東の新道路……一五二
・石塔尾根に就いて……一五四

・其の他

追憶——Gruppeになるまで……（如水會員）…奥野網重…一五

東俣谷の美林……（如水會員）…中川孫一…一六一

附錄……如水會山岳會と一橋山岳部との懇親會…一六九

山小屋欄……一〇

年報……一三

一橋山岳部々員の住所錄

寫眞

天神峠より谷川岳……渡邊九郎

鹹川の峽谷……五十嵐數馬

五月の八ケ岳……栗吉雄

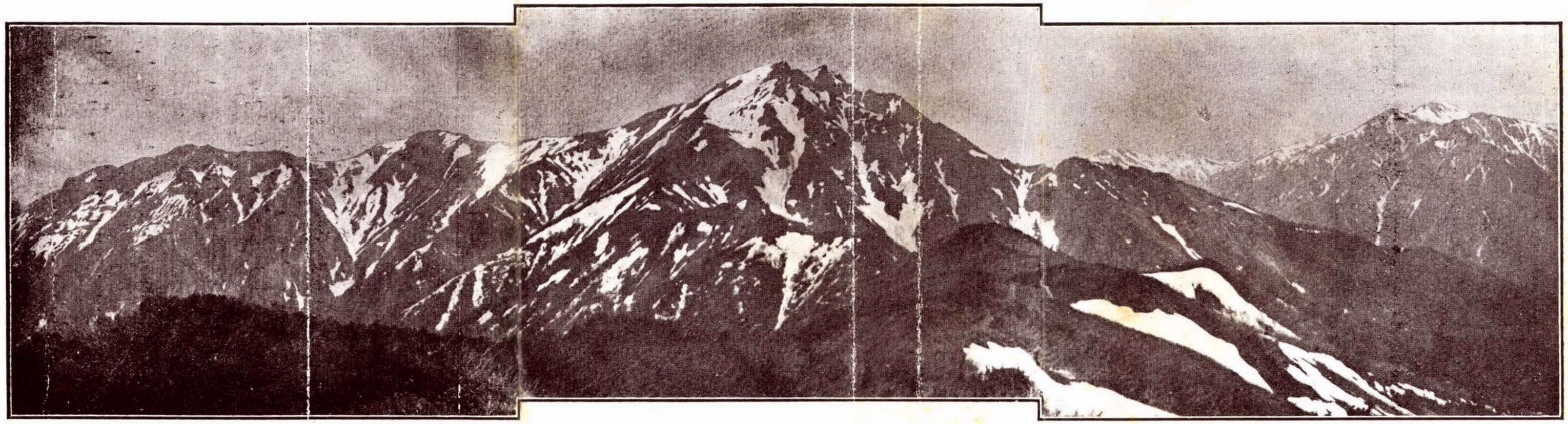
十文字峠より奥秩父の山々（冬）……渡邊九郎

オジケ澤の頭……小五十嵐數馬

北鎌平より北鎌第一峯及び二九〇七米突の峯……吉澤一郎

五月の室堂附近……吉澤一郎

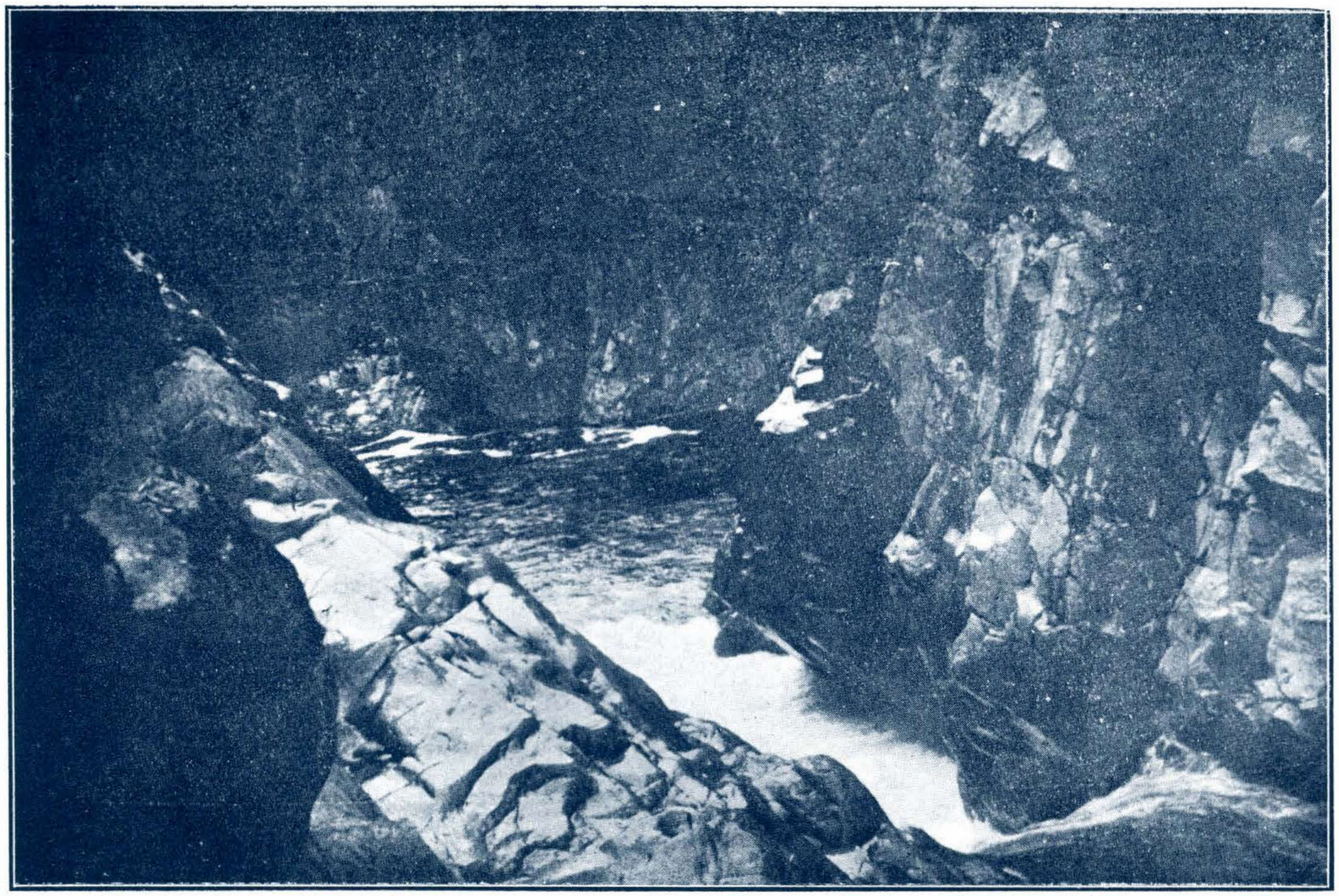
春の彌陀ケ原……吉澤一郎
地圖……吉澤一郎
野川上流水脈圖……吉澤一郎
將監峠附近の林道……吉澤一郎
西澤と東澤……中島濱郎
スケツチ
以東岳より南望……村尾金一郎
龍門山より以東岳……吉澤九一郎
オジケ澤の頭より西望……渡邊二郎
牛首附近より北鎌尾根……吉澤一郎
前穗高北尾根……吉澤一郎



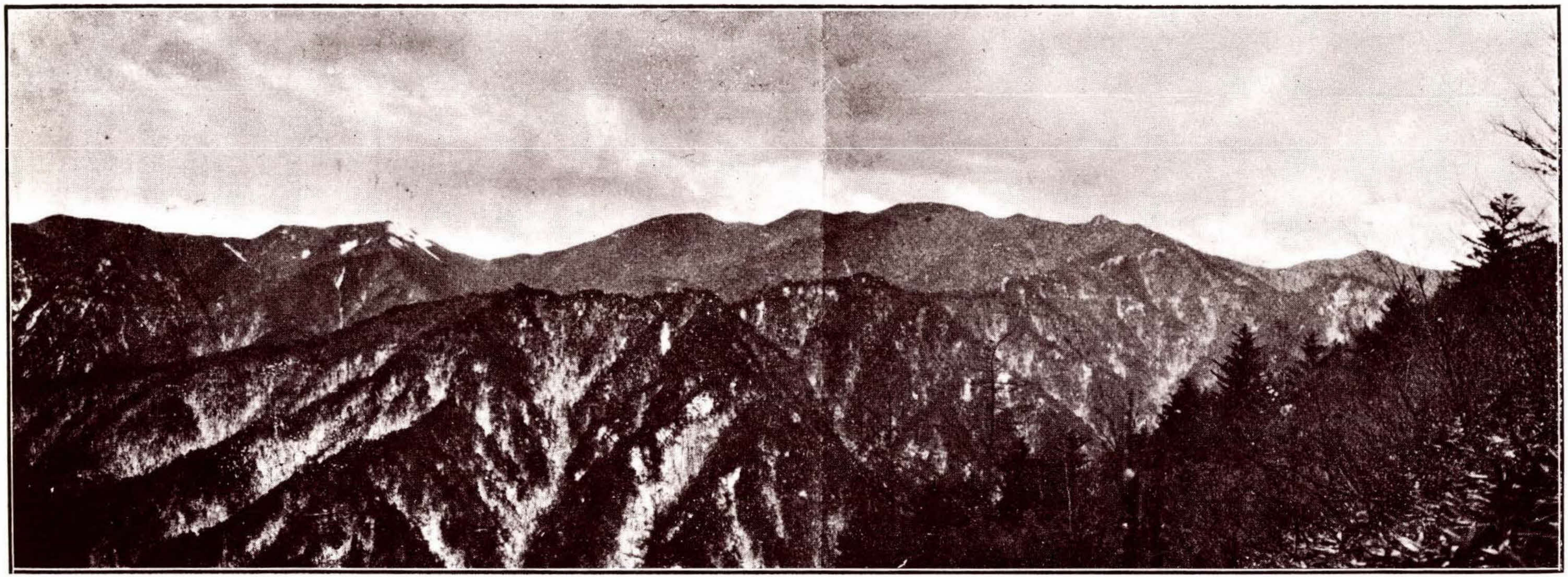
天神峠ヨリ谷川岳　　（渡邊九郎）



五月の八ヶ岳　　（小栗吉雄）



鰄川の峡谷　（五十嵐數馬）



十文字峠より奥秩父の山々（冬）　　（渡　邊　九　郎）

個中之趣

江香村

近日發行する山岳に關する本年の年報に、何か寄書せよと編輯諸君より督促矢の如く、響に安受合せし爲、質草までさられ、書かればこれを出すぞと威嚇され、最近殆んど靜かに筆とる餘間餘暇無き身も約束として、平生愛吟しつゝある詩句杯なる詩林を題材に、僅かばかりの感想を付加へて責を塞ぐ事とせり。

○深山に入り高嶺を攀づ、若い者ならば兎に角、モーエー加減にしてはどうかと親切なる注告を受ける度毎に、余は唯々諾々、笑ふて不答、人去つて後、「別有二天地非二人間一」と空嘯ぶけど扨も世の中の事は了解六ケ敷ものにて、山登り杯、餘計な物好きと見られ、實際に登山の體驗なき人に個中の趣を解し得しめんこそ容易ならず。寒山子謠ふて曰く「人問二寒山道一、寒山路不レ通、夏天氷未レ釋、日出霧朦朧、似レ我何由届、與レ君心不レ同、君心若レ似レ我、還得レ到二其中一」と善い哉此語、移して之を嚮きの注告者に呈せん哉。

○「一歩又一歩、天風吹二鬢毛一、下二視群山小一、當レ知二立所高一」此の一絶、如何にも平々凡々、何の奇もなく、すら〳〵と詠じたる如きも、よく〳〵玩味すれば之れはこれアルピニストにとつての萬丈の氣焰也。否大丈夫の世に處する、須らく常に此の心境に立ち、此襟懐なかるべからざる也。諸君乞ふ、高山の頂に於いて試みに此詩を朗吟一番せよ、自恃自愛の情、油然として胸裡に湧くべし、個中の趣はアルピニストにして始めて味ひ得べし。

○「登レ高使二人心曠一、臨レ流使二人意遠一、讀二書於雨雪之夜一、使二人神清一、舒嘯於近阜之巓使二人興邁一、」

菜根譚中人口に膾炙せる名句也、咀嚼すれば咀嚼する程味ひあるを覺ゆべし。「讀書於雨雪之夜」の一句を、中間に挟みたる所、何等の功手ぞ、此の語を山中人なきの處に於いて誦すれば眞に心曠しく、意遠く、神清くて、而して興遄くを覺えしむ。

○「今日望ㇾ之天邊寸碧者、明日踐ㇾ之脚下千巖也」

洪川禪師「禪海一瀾」中之句也、屢々諸君に此の語を推稱せし事なるが、これも亦登山の實驗あるものにして、始めて其の眞意に透徹するを得べし。一步一步を踏みしめて、漸く頂上にたどりつき、遙かに今曉出發せし所の邊を、雲煙漂渺の間に望みし時、誰しも吾一步一步の脚力に、今更の驚嘆と滿足の意を表せざるものあらざるべし。此の語はこれ又處世の要訓也、蓋し登山と處世は一にして二ならず。登山は處世也、處世は登山也、吾人の三省を要す。

●はてもなき彌陀の雪野にゆきくれて月夜にたゝく弘法の茶屋

○ジョン●ラスキン云ふ、「山を畫かんとせば山の外形にとらはれるな、山の精神に入れ、天と地の楔子（リンク）とも見るべき、淡くして聖なる山の心を見よ」と豪踞、雄偉、秀麗、佳絶、神韻、漂渺は山の外なるものにあらず、山の内なるもの也、山の精也、靈也、個中の趣は身自ら深く山中に分け入りて吾となりたる刹那に於いて初めて味ひ得べし、憐むべし、黄塵萬丈の裡に、營々役々酔生夢死する者如此の徒輩には、這般の消息、永却無關係也。

首　五　吟　山

——條　定　口　江——

天と地の楔（くさび）とやせん高山の清き聖なる山の姿を

信濃なる燕山の岩蔭にわびしくも匂ふ駒草の花

雪解けにもゆる高根の岩鏡己が心の鏡とやせん

家土産に唯一もとなく手折るを許せ駒草の花

秋あさき德本峠のもみぢ葉を宿のたをやめ折りてくれける

守屋山小記

田中薫

一

今年も秋の休みを樂しみにしてゐたが汎太平洋學術會議を其の準備に奪はれてしまつた。併し決して其は遺憾でなかつた。今まで論文を通して知つてゐた海外の知名の學者達が果して想像通りの風貌の人達だらうかと思ひ廻らした興味や、其の中の或者と覺束ない英語の歡談を交すことの出來た喜び等此の會議は形の無い數々の土産を僕にまで殘して行つた。僕にとつて今年の秋の生活はそれだけで充分滿足さる可きであつたのに尙ほ秋空の快を忘れ得ずして一日の山行を其の間に試みてゐた。本誌の編者は僕に南アルプスに關する小論文を求められてゐるが今は大いに記す暇がない。恰も餘暇の殆んど全部々々が南アルプスの家子郎黨であるを幸、之を小記して責を薇はんとするのである。

二

飯田町驛を午後十一時卅分發の汽車で行くと翌日の午前七時卅分に茅野驛に着く、諏訪湖に注ぐ二つの川を渡ると南の山麓に安國寺と云ふ寺がある。此の寺を右に見て桑畑の間を稍急に登つて行く。暫くは落葉松と赤松と

の混交林で秋色は未だ遺憾なく保存されてゐる。山陰には霜柱が今朝の溫氣でカサリ〳〵と崩れてゐる。此の徑を登り詰めると杖突峠の本道で爪先上りにダラ〳〵と間もなく峠の頂上に出る。

此の邊一帶の山々は赤石山脈兩側の山地が北に向つて張り出した高殿（テラス）で其の最前線は諏訪湖をこしらへた大斷層線に依つて略中央線の走路に平行して切り落されてゐる。緩かな草山ではあるけれど對側に展開する八ケ嶽の裾野とは著しい對照をなしてゐて一歩一歩登る身の高まるにつれて、其の斷層崖の切口の鋭い事が氣付かれるのである。杖突峠を中心とする一續きの長い尾根は諏訪、上伊那兩郡の境界に沿つて兩翼を張つてゐる。杖突峠以西は安山岩の丘陵地で諏訪湖の南岸を成し、以東は次第に曲りつゝ、金澤峠（一三一五米）、入笠山（一九五五米）、釜無山（二一一六米）を連ぬる秩父古成層地をなしてゐる。此の地質は言ふまでもなく赤石山系の胴體を成すもので駒ケ嶽、鳳凰山の孤立した花崗岩塊を除けば北嶽、仙丈嶽の主脈は鋸嶽の砂岩地を經て直に釜無、入笠に移つてゐるのである。

入笠山と釜無山との附近は地圖で見ても判る様に一七〇〇米自至二〇〇〇米の高所でありながら著しく平滑な山頂をなしてゐる。此が火山岩地であれば粘着力の強い熔岩がダラ〳〵と噴出して其處に固まりついたものと云へるが岩石は水成岩で而も非常に古いのである。其處で近代の地形學者は此に疑惑の眼を向け、準平原面の既存を示す證據物として採用しやうとするのである。卽ち赤石山系は水成岩の激しい撓曲に依つて歐洲アルプス其の儘に高まつたのであるが其後長年月の間に風化作用が働いた結果は一時此を平滑な準平原にしたのである。其の後更に隆起作用が幾度も起り、最高部は新なる風化作用を被つて鋭いアルプス型の峯に刻まれて今日に及んでゐ

るのであるが準平原面の俤が何處か一二ケ所には殘つてゐて良い筈である。其處で此の邊りの平頂峯をその一例と見やうとするのである。

三

さういふ平滑な山は悠々たる感を與へる。而も其の奥に新雪に粧はれた北嶽、仙丈嶽等を重ねてゐる時、一種奥の知れぬ南アルプス特有の味を出してゐる樣に思はれるのである。杖突峠から西に向いてダラ〳〵と草山の薄を分けて一高所に立つと落葉松の秋酣なる山室川の溪谷を隔て、此の大觀に打たれる事が出來るのである。

杖突峠は未だに重要な交通線である。薪や炭をつけた駄馬が風呂敷包を背負つた老婆と共に緩い歩みを續けてゐる。守屋山に行く道は地圖にないけれども明瞭である。峠から守屋山は一六五〇米で此の附近の最高峰であるから展望の良からうと云ふのが當て込みであつた。正午少し前位に其の頂の一角に達した。其處は東西に屋根形をなす山頂の東端で守屋樣と稱する小祠がある。丁度此山の南麓藤澤村の青年が二十人ばかり辨當を開いてゐたが一服やらぬかと云ふから腰を卸して一緒に四方の景色に目をやつた。何しに來たと云ふから山遊びが道樂だと答へる。それなら寫眞を持つてゐるだらうと惡い處に氣のついた者があつたので僕は、一同を守屋樣の前に並べて記念撮影をせねばならぬ事になつた。一枚宛實費で燒いて送るといふ事に話が定まると一同は大喜びで蜜柑を食べないか敷島はいらぬかといふ樣な譯。蜜柑を一つ貰つて一同と別れ一人三角點のある西端の峰に去る。玆に約一時間を費して山々の脈を獨り樂むことが出來た。南アルプスは駒ケ嶽、北岳、仙丈岳、農鳥岳、それから南は荒

川岳位まで數々重つて見える。木曾山脈の完全な眺めのことは勿論だが北アルプスは南御岳、乘鞍から北白馬に至るまで實に白線を走らせな様な眺めである。諏訪湖は白馬山の終る邊りから東にかけて展開し、對岸には霧ケ峰火山の一嵎。これが次第に東に移つて富士を小さくした様な蓼科山、屏風の様な八ケ岳となり蓼科の左方に淺間山が煙を微かに上げてゐるのが見える。隨分豐富な眺めである。其の廣さに於て東京より日歸りの山として名高い甲斐の三ツ峠山を凌ぐものがあらう。

空は次第に暗雲に蔽はれて西の山は秋らしい淋しい寒空を愈々深めて行かうとする。ち上つたが其の淋しい西の方へと尾根を降るのは心細かつた。身長を越す程のホ、けたてゐる。後ろの部落の入口で澤底に出る地圖にない道を教へられ五時少し前に辰野驛に出た。ほんの一足で四時五十九分の上りを捕へ、上諏訪に下車。幾年振りかで諏訪の湯に足を延し、一睡して深更の東京行に乘つた。(一九二六、一一、一五)

山を愛する人々の爲に

高木英二

山の好きな人達は多い。けれども、私達が山から同一なものを得、感じ、期待してゐるとは考へられない或る人に取つては、それは道樂であり、又ある人にとつては單なる享樂であり、又ある人にとつては職業ですらあつた。然もある人にとつては靈の安息所であり、或は修養所でありぎなかつた。更に又、同一の人達によつても、種々の異なつた氣分の下に山へ行く事はあり得るであらう。私達はその何れを取り、そのいづれを捨てるべきかに就て論ずべき實に理解すべく努めねばならない。只私達は第一にまづ夫等のすべてを眞べきではなからうか？一定の論據を見出す事すらなく、徒らにその一を取り他を非難する事は笑ふ

そうして、もし、私達に向つて、何故に山に登るかと問ふ人があるならば、山でなければられてと、こう答へて置きたい。更にその要求とは何であるかと問はれるならば、あらゆる山の魅惑が渦きあふる〻私達の胸を、開いて見せればいいのだ。只夫は私達の胸を理解してくれる人達のみが、あるが故に。山が私達を魅惑すると云ふ事は、少くとも何等かの意味に於て夫れが私達にとつて價値あるものであると云ふ事でなければならない。我々にとつて意義あるもの即ち私に取つて價値あるものなりと云ふ意味に於

て量るべからざる價値を、私達は山に見出す。雲煙巻き溢る中空高く聳え立つアルプスの高峰に、體的なる意味に於て具體的な崇高なるものを其處に見た。

或は狂嵐、砂を巻いて満山をゆるがす時厳然と峻り立つ雪眞晝に夜半に、雲は雲を追ふて走り、霧は晴れるともなく訪れて、或は純白、日覺むるばかりの白雪に、瞬時として止まる事を知らない美しさに、初夏の山に、眞の綠の美しさを私達は味ふ事が出來、或は秋の紅葉に、眞の紅さを見、冬の白雪に、白の美しさを限りもなく稱へた。而も今猶、神秘其物を湛えて、未知なるものとして私達の前に現存する世界の最高峰は、何んと云ふ意味深い存在だらう。

かくて、私達は限りもなく山を憧れ、更に若き心の翼を果てしもなく山の彼方遠く縱に擴げる事が許されるであらう。そうして、限りもない美しい夢が、限りもなく私達を捉へて、永遠の彼方にまで導いて呉れるのではあるまいか。山を憧れる事は限りもなく美しい、そうしてそれを夢見る事は、更に又美しい。

縱まゝなる夢を、夢見る事を止めて、私は夢でないといふ意味の現實に還らねばならない。

私達のリュックサックは重い。そうして道は十分の嶮峻さを以て私達を拒むかの様に見える。額の汗は玉となつて流れ、脚は最早歩くに全く堪へられない。心臟は破れんばかりに高鳴つて、僅かの微動ですらが、あまりにも大きな苦痛である事がある。——そうした苦痛に襲はれた時、私達は其處に、あらゆる意味の疲勞なるものを味はねばならない。然しその苦痛を通じても、より高く進むもの、喜びを感ずる事も出來はした。けれども又、

日の光すら淡く、何等の眺望、何等の慰めもなく、陰慘そのもの、様に私達を被ひかぶさる密林中の苦惱の道を困憊し切つた身體を持して、私達は默々として歩かねばならなかつた。執拗なハイマツや、背丈より高い籔の中を泳ぐ様にして蹌きながら蹌踉として歩む足跡の力なさよ！　苦惱多き人生の行路にも似て、如何にその困難が私達を打ち碎いた事であらう。或は又當てどもなく道を失して、其の夜の夢を結ぶべき、露營の地すら見出されず渴を癒すべき一滴の水すら與へられる事なく、只徒らなる困惑と恐怖が如何に私達の心を突いた事であらう炎熱燃ゆるが如く、或は寒風、生命を危くせしめる様な危機にまで私達は出會はさねばならなかつた。又突兀たる岩壁にクライミングを試みる時、底知れぬ深淵が瞬時に私達を呑まんとするの危機に戰慄しなければならなかつた。それも誰れかの様に The dangers of mountaineering fade into insignificance before its joys and pleasures, just as the fleecy sun-bathed mist disappears at dawn from the snow-capped summit of the Matterhorn. と云つて澄して居られるかも知れない。けれども夫は、冷たい現實として、私達の胸を凍らせる。まして、私達の敬する愛する人達の幾人かは、その寒氣にその飢に、その深淵に、あえなくも逝いて、うたてくも悲しい思ひ出を、私達に燒付けて行つたのではなかつたか？　かくても猶更に、私達は山谷の漂浪者としての私達の行路を歩き續けねばならないのであらうか。生命を賭しても私達は更に山に求むべき何物かを持つて居ると信ずる事が出來るであらうか。あの山の美さ故に、あの山の深刻さ故に、生命を捨てゝ陶醉する事が敢えて可能であらうか。

そうだ、私達は登らんが爲に登つたのであつた。然もそれは至上を意味するものではなく、只純なるものゝみが純なるものを感ずる事が出來ると云ふ意味に於てであつた。それはスポーツであるとは云へ、私達の優れた體

力や技術を誇示せんが爲めでもなく、その目的と結果とを混同する偏見に捉はれたのでもなく、し得さる事をなす事の奇異な興奮のみが私達を驅つたのでもなかつた。只山谷のまにまに漂浪ふ事の嬉しさが私達を捉へたのだ。しかし此處に、山の生活と全人生との交渉、そうした必然的な問題が起らなければならない。眞理に生きるものが、眞理に滅するが様に。山を生命とする者に取つて、山での死は必然であり、否むしろ喜ぶべき歸結であるかも知れない。でも果して、私達は山での不幸に死ぬべく、そして又その死によつて、あらゆる意味の滿足を得る事の出來る人として生れて來て居るであらうか。考へは、其處まで延びねばならない。しかし直ちにそこに至るべく、それは考へるべく餘せられた人達にとつても、あまりに遠い彼方の様な氣がする。しかにも、現實的に、具體的に、この最終の、しかし極めてオブスキウアなこの問題に對する解決が、しばしば、突然に與へられつゝある事を、私達は體驗した。少くとも、但し只次の事だけは明かに云ひ得るであらう。生活のため、否人生のための單なる手段としての山ではなく、山も又私達の人生そのものだ。しかもそれは全人生に對してその内に内含される獨立的な部分として全體に對立する。

現實と云ふ假名の下に、私はあまりにも暗い灰色な山の陰影をのみ見て來た。けれども、更に又、人のなみ出す所以の明るい日影を見なければならない。

内に滿ちあふれる力を湛へて、躍然と立つ時、踏み出す歩足の、さてもその輕さよ。その一歩一歩にも、より新なる感激が、私達を滿してくれる。かくてこそ、雲を摩す高峰を足下にして、煙り行く遠山を眺め、熱血胸にあふれては、千仞の狹谷に、こだまする私達の歡喜の歌を聞く事が出來るのだ。此處に於てこそ、陰慘の小徑畔

風の如き岩壁、ハイマツの呵責が、更に意義あるものとなるのでもあらうか。夜半を泣き明かした人のみが、暁の妙なる光りを、限りもなく愛する事が出來るが様に。そうして更に、その悲しみ、その苦悩自身が、量るべからざる尊さを秘めて居るかの様に。

避け難い内的苦悩をのがれんがために、否、より強き力に依つて之を蹂躙せんがために、私は山に入つた事を覺えて居る。より深刻に我が内なるものを眺めんが爲めに山へ行つた自分を知つて居る。けれども山はあまりに平和な世界であつた。それは、私の小さな心の波紋の一々に迄影響すべく餘りに大き過ぎる存在だつた。自分の惱みをより深い反省によつて解かんがために思索の道を山に求めて行つた私が、山から得たものは無だつた。そうした事を求めて行つた私に、山は何ものをも與へてはくれなかつた。只ほんの時々最も本然的な人性の問題を暗示してくれたにすぎなかつた。山は虚無だ。そうだ。私達の意識を離れた山は無だ。私達が只我が内なるものとは二つではなかつた。心は空行く雲と共に飛び、美しい氣高い山姿、深い谷、澄んだ水、すべてが私のものとなつた。虚無な白紙の心が、眞の自然の靜寂の中にある時、その時こそ、莊美なるもの、崇高なるもの、永遠なるものを見たのではなかつたか。あの夕の雲を、あの朝の日の光りを、あの山姿を、私達は澄み切つた心で見たのだ。如何なる名畫もそれは、より偉大なる平靜と透徹さを以て、私の心を滿たしてはくれなかつた。而もそれは、あくまでも、他の如何なる表象よりもより具體的に、より力強く私達の心を貫いたのではなかつたか。人爲的ならざる意味のあらう自然は、大海も森林も原野も、こうした、あるものを私達

に與へては呉れた。けれども、夫等は、山の様な崇高さを、平和さを、或は、激しさと、力強さを持つて私達に迫つて來る事は出來なかつた。山！　それは又、何んと偉大な人性の内的現象の名畫であらう其處に於て、私達は無限な内的經驗の最も具體的なる表象に接する事が出來た。哲學をアルプスの山道に例へたショペンハウェルの言葉が深い感銘を以て、此處に理解する事が出來る。

そうだ。山男は藝術家だ。そうして哲人だ。然も彼は肩も萎ほるゝばかりの重荷を背にして、天にも續く様な骨の折れる山徑を、力強く踏みしめるその一歩一歩に、生けるもの、力あるもの、喜びを感じ、實現する事が出來 the joy in breathing nearer heaven を胸奥深く味ひしめる事の出來る行の人だ。最も人間的な意味に於て、選ばれたる幸福者。彼の名は山男だ。然も「山男」、その私達の呼び名は、山で生れ、山に死に、畢生を山のために暮らす人達の謂ではなく。各々、各自の最高の理想と目的を山以外に、否山以上に置き、その一生の大部分を山で過ごす事もなく、然も猶、時々折々の山行に、山を喜び、山を思ひ、山を感ずる事の出來る人の謂でなければならない。

見よ！　暗黒の迷路を、首を垂れて、默々として歩む彼の彈力ある足付きを。或は又、鋭き岩壁の頂きに坐しては、谷の彼方、白き高峰に、將に暮れなんとする夕の色に、輝くその清澄な瞳を。私達は其處に最も深いあるものを見出す事が出來るのではあるまいか。最も痛烈なる苦痛の中に、最も力強き喜びを。或る意味に於て、尤も單純なる自然の中に、最も深き感銘を。變々極りなき中に永遠を、動ぜざる永遠の中に流轉の相を。山に於て而も單なる外界としてではなく。私達の精神に與へては、我が内なるものとして然も勇躍する高き感情に於てのみではなく。私達の精神

生活の最も深い根底に於て、私達のものとする事が出來た。
山の彼方の幸ひ住むと人の云ふ。猶遠く。
私達はその幸福を味ひ得る私達の靈故に感謝しなければならない。

只見川を中心として

松木謙三

七月二十三日　雨後晴

雨の中を銀山平へと大湯の宿を出る、今日は明神峠を超えればよいのだから晴れてゐたるが濡れてゐては休む氣にもならぬので路が捗る。一時晴れた雨は頂上近くから一層強くの御堂で中食をし乍ら待つ。石拘橋に下りきると雨は晴れ上つたので呑氣に歩む。銀山平がよい、これで周圍に登る山が多いと上高地に負けないのだがと思はれる。清水の部落を過ぎると傳之助爺さんの家で快く私共を迎へてくれた。

重太郎が投網を持つて岩魚(いはな)獲りに出かけたのでそれを見に神蜂岩(かんばちいは)の近くまで行つたが岩魚は餘り獲れなかつた爺さんが又出かけて十疋餘り獲ツて來たので皆で充分に食べられた。

七月二十四日　晴

× × × ×

× × ×

鷹ノ巣へ

須原口の開拓會社の事務所に大鳥澤へ行く時用ふる食糧を預けて開墾地の奥へ只見川に沿つて進む。須原口から奥に住む人達は會津の檜枝岐其他越後の各地から開墾のために移住して來たので須原口に極く僅水田が有るばかりなので粟、稗、蕎麥が主食とのことである。浪拜の平な川岸から溫泉が湧いてゐて其の湯を平に引いて浴場を建てる計畫だつたそうだが湧出量が少なくなつたので中止せられた様だ。小湯ノ又澤(地圖に戀ノ岐澤と誌す)から流れ出る澤で水量も少ないから平ケ岳への夏の登路として適當であらうと肯づかれた。

草叢の中に墓石が數多く見出されると銀山の遺跡に來たと云ふ感じが強くなつて舊幕時代の殷賑さが想像される。精錬所跡の草の中に鑛屑が處々堆積されてゐる。小さな建札に『右傾城澤、左寺院跡』と記してある。傾城澤には奇異な傳說が傳へられてゐる。古文書に散見する狀況から考へて坐ろに往時が偲ばれるのであつた。只見川と北ノ俣川の流域を銀山平と稱するのも此の銀山が在つたから起つたのである。

天氣は良し、路も良し散歩の様な氣分で進む。會津への分岐點を過ぎて少し行くと鮶ノ瀧である。地圖には灰ノ瀧とある。里人は鮶の止りとも稱して居て只見川の水の大部分が會津川に巾五間高さ二間位の瀧になつて落ちる、此處の鱒獲りの老人が泊つてゐる。瀧の傍に小屋を建てゝ鱒獲りの一部分が越後側に强い瀬になつてゐる。瀧の傍に小屋を建てゝ鱒獲りの老人が泊つてゐる、此處の鱒獲りの工合は非常に面白いものである。遡つて來た鱒は瀧壺に集つて時々首を白くたぎる水泡の中から出して瀧を眺めては跳び上るのであるが到底瀧は跳び越へ得ないので越後側の强い瀬の處を跳び上つて來る。工合よく其の瀬の上は水が澱んで居るので其の上に網を張つて置くと鱒は澱にうかいついてゐるので朝と夕の二回瀬の處に網を當てゝ上から網の中に追ひ込んで獲るのである。前日などは一日に三十本餘り獲れた由。私達は暫く瀧を眺めてゐたが瀧

に向つて跳び上るのを四五本見た。山の人の話では畫家はよく鯉の瀧登りを描くがあれは鱒の間違ひだとのことだが一理ある様にも思へた。

老人から夕餉の馳走にと焼いた切身と笹の葉に包んだ筋子を求めて出かけた。

畳場（ひろば）の開墾地に來た時色の黒い頑強らしい若い男が重太郎に丁寧な挨拶をして是非家に寄つて御茶を飲んで行けと勧めるので後についてゆく、それで湯を沸してくれるのであらうと思はれた。彼は路傍に落ちてゐる枯枝を拾つてゆく。彼の家は三間四方位の一と間に竈所が少し附いてゐて此の附近の開墾地には珍らしく屋敷の掃除もゆきとゞいてゐて水田も少しつくられてゐる。入口に熊の皮を敷いて茶を進められたので返禮に持參のビスケットを出した。

一と間の中には銀山平唯一の簞笥が一本置かれてゐて其の上には古佛らしい觀音の座像が安置してある。前には大きな木魚と御鐘があつて壁には印刷の佛畫と古びた法衣が下げてある。重太郎の話では開墾地中に死亡者のある時には僧侶の役を勤めするのだそうで彼の名は星庄平と云つて湯之谷村出身の由。以前妻帶したが直ぐに離婚して以來は獨身で開墾に從事して居るので最も優れた結果を耕作物の上に現してゐる由。彼は別れの挨拶を濟ますと直ぐ裸足で外に出て草採りを始めた。

少し進むと銀山平最南の開墾場鷹の巢平で家が三間程飛び〳〵に建つてゐる。手前の家は二階建の立派なもので星清四郎氏の宅である。入ると老母が病に臥してゐて多分泊めてやるだらうと思ふが今誰も居らぬので不明だとの話に畠へ清四郎老を捜し出して賴むと直ぐ承知してくれた。

山の家には珍らしい長押（ナゲシ）附きの疊を敷いた座敷に通された。

野天の風呂を浴びてゐると只見川の向ふの山の端から滿月が登つて來る、星が輝いてゐる。

配なささうに思へた。

清四郎爺さんから只見川上流の様子を聞いて床に入る。

七月二十五日　快晴

× × ×

只見川を遡る

三時半に清四郎爺さんに呼び起された。出かける時再び親切な注意を聞いて感謝した。此行が少ないので徑も草に埋れがちで『トロの林』と通稱する撫林を進むで川端に出ると橋が緣についてゐるのを右岸に渡る。又暫く林中を進むと右へ方向を示す鉈目があつて愈々少し上に流木を利用して橋にしてあるのを書いてある）に出ると小さな岩魚釣小屋林道に離れる。德澤（地圖に深澤と書いてある）に出ると小さな岩魚釣小屋を只見川の緣に

此の澤から尾瀬までの間に地圖で水の記號のある右岸の澤は高石澤と白ツキ澤の二本であケ瀧の邊にも小さな瀧の様な瀬の處もあつたがあれは全然誤りであつた。

時々足を水に浸しながら右岸の岩の上を進む。歩るき易いのでだいぶ行程がはかどる。高暫くすると圖上三丈ケ瀧附近に小さな瀧があつたので上を廻つて越えた。澤が追々に狹くなつて來て八時半近く

× × ×

白ツキ澤の出合に到着して第一回の中食をした。

白ツキ澤は餘り廣い澤ではなかつたが澤の岩には白い粉が附いてゐて水の中を攪き廻すと取つてみても水は別に濁つてもゐない。清四郎爺さんの話ではこの澤の奥へ行くと落葉や木石になつてゐる處があるとの事であるから石灰分でも溶解して流れてくるのではあるまいかとも思はれた。

澤の上で只見川は急に右へ曲り又左へ曲ると前面に大きな岩壁が見られる、鎧倉と稱する狀節理をなした岩壁である。兩岸は增々迫つて來て遡行が困難になつて來て再び小さな瀧に見えるのにも三十分位づつかゝるので時間の工合を考へて川を離れて林の中を進むことにしてにかゝつた。

幾筋かの稜線が只見川へ向つて落ち込んでゐる。其の稜線だけは針葉樹がはえてゐてその他は濶葉樹の密林であつて傾斜面の藪漕ぎは眞直の登降よりも苦しい。十一時半に二回目の中食をして苦闘を續ける。午後二時一つの稜線に出ると遠く前方に自分と同高度に川の水が見え中途は幾筋かの稜線に遮えぎられて斜足下にその下流が見えたので瀧の近くなつたことを知つた。

それから小さな澤を一つ横切つて、二ツ目の小澤を越えて稜線に出ると瀬の音がするので約六時間の藪漕ぎの苦闘をして來たのに瀬は平滑の瀧である。期待に期待して約下ると目の下に銀光に輝く廣大な瀬は平滑の瀧である。せめて下れるだけと思つて約四十分右岸の水際を傳つて下ると平滑の瀧の下で川は右に直角に曲り又左に直曲してゐたが三丈ケ瀧は大凡の位置さへも分らなかつた。

平滑の瀧！　それは自分らの豫想より以上美しかつた。通常より水量の多かつた關係もあらう巾一町位長さ數町の間平らかな緩い傾斜の大岩面の　上に只見川の全水量が擴がつて流る、壯觀は筆紙の　表示し得ない處である。

三度目の食事をして輕い失望の心を抱いて急いで出かけた。暫くすると左から赤い湯垢の樣なものが附いた岩の多い小澤が出てゐる。小澤の水は何となし生溫い感じがして奥に溫泉でも湧いてゐるのではないかとも思はれた。後で長藏さんの話に依ると赤出し澤と呼ぶ澤で奥に微溫湯が湧いてゐるので其附近を借地してゐるとの事であつた。

右に少し登ると前に急にひらけた尾瀨原の北端に出た。至佛山の全姿が見える。

低い葭の中にあやめが混つて唉盛つてゐる。黄色い百合の樣な花も唉いてゐる。若い白樺の若林が劃然と草生をくぎつてゐる。よい心地で原の東端にある岩魚釣小屋に來て夕暮が近いて來て原が一層美しく見渡された。

咽喉を潤ほすと急いで薄明りのうちに峠の頂上まで行くために濶葉樹林の中の小徑を急いで登る、闇が迫つて來て歩るき難い沼尻川の流れの音が右下に遠く聞える、峠の頂上にもう一と登りと云ふ處で角點を點すために休むと月が登つて來た。針葉樹林を洩れて來る月の光は凄味を帶びてゐた。

峠を下ると月光に照り出された尾瀨沼が見え始めて廣々とした氣も輕くなるのを感じて沼に沿ふジメ〳〵した足跡に從つて行くと急に慌しい羽音を立てゝ鴨が五六羽飛び上つて驚かした。九時半長藏小屋に辿り着いた時に

はもう長藏さん夫婦は床に入つてゐたが起きて自分達のために飯を煮てくれた。

風呂を浴び岩魚の燒物と味噌汁で腹を滿して床に疲れた脚を伸した時には時計が十一時を打つた。

× × ×

三丈ケ瀧は遂に見脫してしまつた。午後二時瀧の見當が附いた時距離を遠く見過ぎて餘りに小澤に下つた時だいぶ考へてみたのだつたが多分瀧の下流に落ち込んでしまつた。後でその澤は瀧の直ぐ上に出てゐるのだと云ふ事を聞いたがその澤まで約一時間進んだのだつたから藪の中とは云へ澤へ下りてみればよかつたのだつた。それにしても地圖の川よりも實際はもう少し細かく屈曲してゐる樣だ。平滑の瀧の下流の屈折など圖で居るものと思ひ込んだ三丈ケ瀧見物は遂に失敗に終つてしまつた。

何と云つても地圖で只見川と書いてある只の字の直ぐ北の澤である樣に今から考へると思はれる。瀧の見當が附いてからこの澤まで約一時間進んだのだつたから藪の中とは云へ澤へ下りてみればよかつたのだつた。それにしても地圖の川よりも實際はもう少し細かく屈曲してゐる樣だ。平滑の瀧の下流の屈折など圖で居るものと思ひ込んだ三丈ケ瀧見物は遂に失敗に終つてしまつた。

× × ×

七月二十六日　小雨後曇

燧　嶽

× × ×

薄曇りに沼は靜まりかへつてゐる沼の朝は淸々しく遠くが沼のかなたに望れたが燧岳も至佛山も姿を現さなるのを見合せて午睡を貪る。午近く晴れて燧の頂も見える樣になつたので中食して何も持たず身輕に出かける。

昨晩とは又別な氣分で沼緣を歩るいて沼尻から道は別れて燧にと向ふ。道は良く刈られてゐる。

水のない澤を上へ〳〵と登るに從つて傾斜は度を增して來て沼が目の下に展開されると白根、男體、太郎其他の奥日光の山々が重疊して見られる。殘雪が一と處あつて道は右に折れて三角點のある峰に向ふ處に山櫻が一本咲いてゐた。其處から上は甸松と石楠花が茂つてゐて頂て登り切ると頂の峰と峰との中間に出て眺望が皆無である。暫く腰を下ろして待つてゐたが遂に會津駒ケ岳方面も雲霧がたち込めてゐて眺望が皆無であつた。

少し下ると霧は無くて又奥日光方面だけが眺められた。夜は尾瀨沼山

その夕方には上州の方から夫婦を頭として五六人と學生の五六人組とが來たので小屋は賑つた。水利權の話、登山路の話……白鬚の中人と自稱する長藏さんと爐端で語つた。水利權の話、漁業權の話、登山路の話……白鬚の中傾聽してゐると敢て駄法螺のみではない。景鶴山から上は甸松と石楠花が茂つてゐて頂希望は多くの登山者の希望してゐる處であらう。山人に對して世間では多少批難してゐる人多少理のあることで山人が自己の利を考へ過ぎるからでもあらう。小屋に掛けられてゐる『人共同養魚場』の札や尾瀨沼文庫圖書寄附者の書き連ねられた札などは少し目障りの樣でもある尾沼沼照介者大下藤次郎氏の石碑なども山人にとつては有意義なものであらう。

× × ×

× × ×

七月二十七日　晴、夕立

檜枝岐へ

起ると霧雨が靜かに沼の面に煙つてゐた。晴れたので出かける。沼山峠は沼の方からは一寸した少しの登りで頂上から沼を眺めた様子は暢びりした氣分である。今日は燧岳も全貌を現してゐる。少し下ると大津岐峠から會津駒に渉る一體が平らかに見られて大木に登つて其の姿を寫したりして時間を費し乍ら七入澤の虎藏爺さんの家で中食をした。

爺さんは明日駒ケ岳にゆく豫定だと聞いて煤けた小さな行李から曆の本を出して、

『明日は八せんのま日だから大丈夫御天氣だらう』との豫報であつた。事實は其豫言は見事に的中せずに大雨となつたのであつたが……

七入を離れると急に四方は人里らしい溫かい感じがしさうである。道は右岸を暫く行き麒麟手の上手で左岸に移るとめつきり好くなり繭買ひは自轉車に乘つて通つて居る位である。二ツ三ツ出つ鼻を廻ると大津岐峠から會津駒に直きに檜枝岐に入る早速丸屋に上り込む。蠶が上つた所で乾かすのに大變忙しさうである。未だ時間も早いし村の見物に出かける。此の村に似合ぬ墓の數の多いのに驚かされた。村はづれまで行くと急に夕立がやつて來た。小學校に飛び込んで居ると、荷を小學校に置いて川原に遊びに出かけて居た喜多方中學登山隊がびしよ濡れになつて歸つて來る。直きに夕立だ、此の分なら明日は期待して居つた駒ケ岳から又すつきりした空模樣になる。あゝいゝ夕立だ。

袖澤へ下りられると思つて丸屋に歸つて行く。川は段々濁りを增して來る、面白い事には川が濁つて來ると小供も大人も皆手に小さい網を持つて川に入るのである。捕れるものは山目岩魚もあるが「かじか」とかと云つて鯰の極く小さいもの〻様な魚である。此れが此の邊の青年の一つの娯樂かも知れない。

七月廿八日　雨

× × ×

空は一杯に星で飾られてゐたが、何となく思はしからぬ雲が出始めて來たが大丈夫の積りで出かける。村を離れて駒ケ岳に登り始めると凄い雨になつて來た。楢の林の中で直きにやむかも知れないと思つて三十分も休んで居たが止みそうにもないので思を殘して丸屋に引歸して了つた。雨は二時過となつたら止んだ。又昨日と同じく川は魚捕りで一杯である。夜になると又星空に變つて來たが何となく靜中動を含んだ様な空模様である。

七月廿九日　雨、小雨、時々曇

七月三十日　小雨、滯在

× × ×

× × ×

銀山平へ

今日も亦雨である。三日も四日も降られては駒ケ岳へは登れても到底袖澤の徒涉は不可能の事は解りきつて居るので殘念ながら斷念して道を大津岐峠に取り須原口で水の引くを待つて只見川を下る事にして出かける。麒麟手で實川に別れて峠にかゝる。暫く小澤の水音を聞きながら行くと道は急に坂になる。此の前坂を上りきつてし

まへば、後は尾根通し樂な針葉樹の中を行く事となる。峠の上には未だ雪が少し殘つて居る。峠とは云ひ高いから南も北も眺望が可成きくとは思ふが今日は何にも見えない。ぢつとして居ると寒い位である。此處から下は山毛欅の大深林で又銀山平に戻つたなと輕い懷しみを感じた。左から出て來てゐる澤を左岸に渉り、ピチョ〳〵してゐる草の中を分けながら行くと道は右岸に移つて直ぐ又左岸に歸つて來る。再び右岸に移ると急に河原は廣くなつて來る。此處は此の地方では大ヘツピ須原（須原とは川原の森林の平地の意）と呼んで居る平らな森林地帶である。やがて此處にも移住民が移つて來るであらうと云ふ話である。大ヘツピ須原の終り即ち瀧澤（奥に大瀧のある澤）の上手で左岸に移ると直きに大須原に出る。此處には新しい移住民の家が二戸ある。未だ開拓も淺いので大して廣い畠もなく畠の中にも肥料の變りに大木が腐つたまゝごろ〳〵して居る。大分良く開墾された豐橋須原に出る。此處には一家しかない。小屋では盛に「こすき」（雪をかく道具）を造つて居るので只見川の樣子を聞くと、連日の豪雨で只見川は此處十數年ない增水で銀山平の橋と云ふ橋は全部流されたと云ふので到底只見川は渡られないと云ふ話である。失望の中にも兎に角河原まで出て見ようと思つて豐橋に來ると、橋どころか。一丈餘も出たのであらう可成高い所まで木や草が倒れて居る。

豐橋の架かるのを待つとしても今日明日おいそれと架けられる樣な所ではない。未だ三時過ぎたばかりである

から右岸の藪を漕ぎ分けて行つても七時頃には須原口に着けるだらうと、思ひ切つて元氣をつけて藪の中に埋り迄む。豐橋須原から川下に桑摘みに行つた事があるものと見えて草が幾分道形にはなつて居るが豐橋さへ流れなければ鼻歌でも歌つて對岸を歩いて居られるんだらうにと思ふと馬鹿らしくなつてならない。丁度銀山の鑛山跡の向ひ岸まで來ると、下手は浪拜の岩壁で水が出て居るので下は通れぬので戻るのも殘念であるし、地圖を見ると片貝山の東の鞍部を越すのも大して困難ではなさそうである。重太郎も雪の上の事ではあるがこの鞍部は越した事があるとの事であるから越す事にして澤の中をどん〳〵登つて行く。一寸日の光を投げた空も又雨に變つて來る、澤の水が無くなつて來るのみが苦しい中の樂みである。鞍部に出た時はそろ〳〵薄暗くなつて來たが、此處まで來れば後は下るばかりだと思ふとほつとした。下りも瀧らしいものもなく案外樂に滑り下る事が出來たがそれでも片貝澤に出た時は七時であるから眞暗である。處々からむ道もあるのであらうが、暗くて一寸も解らぬので水の中をどん〳〵下つて行く。小一時間もして只見川の音の聞える所に來たので右岸に注意をして行くと道らしいものが見當つたので行つて見ると直ぐ其處に燈が見えるので泊めて貰ふ事にした。親切な老夫婦はびつくりしたものゝ、久し振りで見知らぬ人に會つたと云ふ物珍らしい喜びの中に歡待して呉れた。おやぢさんは檜枝岐の人であるが、お愛想のよいお主婦さんは湯之谷の者であるから重太郎とは良く話が合う。早速取つて來た「きくらげ」は味噌であいて呉れるし、香の良い銀山蕗を汁の味にして呉れるので一日の疲れも直る位であつた。

七月三十一日　晴

× × ×

× × ×

只見川を下る

今日はすつきり晴れ渡つて居る。白板岩の下流には只見川唯一の籠渡しがあるので若し徒渉不可能の場合は下る事として河原を下つて行くと、助淵の直ぐ下手にも二家ばかり開墾の家がある。此の邊が川幅が最も廣く一丁餘もあるし、川底は岩板であるので徒渉する事にして重太郎を先きに二人が續いて入る。一枚岩の様である々に溝が澤山入つて居て、其の深い所を旨く抜けて上手に向つてはすに徒渉する。須原口で前に糧を持つて北俣川の増水は又一層凄い位である。徒渉などは思ひも寄らぬ事である。籠渡しと出て見る。只見川に比して北の俣川と言つても平のものゝ様に上等のものではないのでつらい事〳〵。籠渡しはある様になつて居て、此處から一家鱸を養ふ新しい家があつた。曲淵の口にも一家ばかり開墾の家がある。仕入澤の口にも一家ばかり開墾の家がある。仕入澤の口にも一家ばかり開墾の家がある。仕入澤

らしい。此處から下流は水際を歩く事になる。瀧澤の下手水際に下りる。二所ばかり絶壁で下を通れね所があつたばの字の邊まで出ると下流は歩き易い。此の邊は河原が割に廣いのにには昔つらい向赤川の赤と云ふ一箇所岩をやつとへつつた所が歩き易い河原である。地圖の誤の様に思はれる。瀧澤からが來て見ると、一箇所岩をやつとへつつた所が案外樂な所である。併し只見川の雄大の景色は此處で充分味ふ事が出來た。

大鳥澤の落合には昔は銅が出たものださうで、飯場が二て居るもので、此の小屋は今ではツ殘つて居る。此の小屋へは紫蕨を乾す道具やけてあつた。此處から下流は只見川も地圖に見る程でなく比較的平凡なものだとの事であるあるから大鳥澤で岩魚を釣らうと思つて出かけて見たが、一時間もかゝつてやつと一匹しか途中で蝮蛇を一匹いけどつて來たので早速皮を剝いて白燒にして三人で分けて食べた。始めと思つて食つたのであるが、なか〳〵油が强くつて旨いものである。黑く煤けた壁には誰が次の様な詩が物してあつた。

登々山路何時盡　決々溪泉到處聞　風動葉聲山犬吠　一家松火隔秋雲　山佳人

× × × × ×

八月一日　風雨林はざあ〳〵と言つて居るが今日は大湯へ

雨と風で河原の林はざあ〳〵と言つて居るが今日は直ぐ小屋の裏から未丈ケ岳の尾根に取つついて居るのである。前に此の小屋に紫蕨取りに來る點線を通つて大鳥澤出合から半里も下手に下りたものであるが餘り廻り道になるので新しと後は樂になつて尾根の澤山の瘤を右ある。隨分急な濶葉樹の中を一一七九米の所まで登る行くと八時半には大鳥池（未丈ケ岳頂上と一一七九米の峰との間にある池）に出る事が出來に見られた。此處から未丈ケ岳の間はお天氣なら大變ない。未丈ケ岳は西側をからんで三ツ又口へと下りて行く。途中一寸小高くなつて居る所に松の荷つぎ場と云ふので湯之谷から紫蕨を取りに入るで往復するのであるから重時は此處に米を置いて歸る。そして後る。三ツ又口には炭燒きの小屋があ太郎等も毎日此處まで炭燒きに來るのである。西から落ちる澤を細澤、未丈ケ岳から落ちて居るのを水頭澤と云ひ南から合するものを眞の澤と云ふのである。細澤を暫く登つて萬吉澤の紫蕨取りの小屋で中食を食べて、湯之谷乘越を越して湯之谷を見下した時は何とも言へぬ氣持ちであつた。今日は大湯で一泊ゆつくり延びて歸る積りで居つたのであるが、新聞を見ると中越地方は大變な雨だと云ふので一風呂浴びて早速終列車に間に合ふ樣にと小出に向つた。

未だ此方の方へは三回位しか入つて居らないで只見川を圍んでゐる山々を話すのも無理かと思ひますが、多少此方の山へ來たい方の參考になるかも知れないと思つて書きます。

此方に入つて來るには越後の方から入るものとしたら大湯を根據とされるのが最便利の樣である。又案內人には下折立の重太郎が一番よい樣です。

越後駒ケ岳

駒ケ岳は八海山と共に此の方面に見る唯一の岩山であると共に最も立派な山である。頂上に達する道は三つあると言へよう。最も普通の道は大湯から佐梨川を遡つて昔の鑛山に出で頂上に達するもので一日で往復出來るものである。今一つ八海山又は平ケ嶽から尾根傳ひに中ノ嶽に出で頂上に達する道である。八海山から中ノ嶽中ノ嶽から駒ケ嶽の尾根は比較的痩せたもので又藪も相當凄いが近年刈つたとの事ですから八海山の九合目女人堂の小屋に一泊したら翌日は駒まで行けると思はれる。(前年八海山から銀山平に出た時には途中二泊せねばならなかつたが)中ノ岳と平ケ岳の間は未だ通つて見ないが、非常に歩るきにくいさうである。春雪の上なら大湯を出て駒をかけて中ノ岳に一泊すれば翌日は劍ケ倉まで行けるとの事であるが、夏なら二泊はかゝると思はれる。最後に駒への道は枝折峠から行くものである。地圖に點線があるので四五年前に通つて大變苦しめられた事があつた。此れは駒ケ岳の三角點を建てるに材木を運んだものださうである。が今夏湯之谷村の青年會が藪を切り拂つたから峠から頂上まで三時間餘で行けると思はれる。尾瀨から銀山平へ下つ

た人は清水で泊つて駒をかけて大湯に是非下つた方が良いと思はれる。駒から荒澤岳を見た處など素敵な景色である。

平ケ岳

×　×　×

平ケ岳はその名の通り何方から見ても頂上の平らなどつしりした大牛ののたばりかへつて居る様な山である。

平ケ岳へ行く道は中ノ岳から兎岳に出で大水上を東南の尾根を傳ひ藤原山劍ケ倉山を通つて達せられる。

なら劍ケ倉の頂上附近が一寸尾根が狹くつて時間がかゝるだけで樂に達せられるとの事である。山岳には高頭氏が大白澤から白澤山と平ケ岳の鞍部に出て頂上に達して居られる。又二ノ岐川を遡つて平ケ嶽崎三角點（一八八六・八）に出て平ケ嶽に登るなら途中一日で頂上に達せられる。此の道は兄が今春通つたのであるが途中まで道があつて大變樂だとの話である。又雪の上なら鷹巢平からその眞西を走つてゐる尾根の臺倉の三角點（一六二三・四）に出て尾根通しも行けるとの事である。又戀ノ俣澤を登つても行ける。尾瀬ケ原の關東水電の小屋からは雪の上なら頂上まで約六時間で達せられる。スキーの利用される時分なら非常に面白さうなスロープが多い。

尾瀬

×　×　×

尾瀬沼に就ては色々な傳說もある様であるが、兎に角行つて氣持ちの良い所である。特に夏雨に襲はれて一入綠色の增した時が氣持ち良い様である。尾瀬原の良い時はあの廣い平地が菖蒲（あやめ）と黃色い百合の様な花で埋められ

てゐる七月の始めから中旬が良い様である。

尾瀬沼には長藏の小屋があるし、尾瀬ケ原の方にも三つばかり泊れる處がある。地圖のヨッピ川のピの字の邊に關東水電の小屋があるし、山ノ鼻には前には岩魚取りの小屋ばかりであつたが、今年はその對岸に新しい小屋が出來た。至仏山へは此處からムジナ澤を上つて頂上に往復するものであるが雪のある時なら頂上から鳩待峠に下りる事が出來る。又今年は尾瀬ケ原から湯ノ小屋の方へ林道が開けて大變都合良くなつて來た。今一つの小屋は燧嶽の西の裾の沼尻からの道が林から草地に出る所にある。

此れはほんの小さい二三人しか泊れぬものである。此處で宿つてぶら〳〵近所を歩き廻るのも氣持ちの良い事である。燧ケ岳へ行くには沼尻から登る道一本しかない様であるが、鬼怒川林道を一日で川俣に出るには長藏小屋から四五丁沼山峠の方に來ると右に分れる道がある。此れを傳つて出るのである。

× × × × × ×

會津駒ケ岳

會津駒ケ嶽へは普通半日位で檜枝岐から往復されて居る様であるが、此の外に通り得る所は二つある。一つは大津岐峠の頂上から駒ケ嶽に出るものである。此れは道もない。道もない所を藪くゞりをやるのであるが三四時間で通れるさうである。他の一つは今度自分達が通らうと思つて居つた袖澤である。袖澤へ下りるには中門嶽から中門澤（此の地方では奥の南澤又は高地の南澤と言つて居る）を下るのであるが、點線のある所まではそこに昔は銅鑛があつた爲に微かながら道跡がある由である。又今でも其の邊までは檜枝岐の義八と云ふ爺がわさびを作

りに一年に一二回は往復してゐるさうである。越後の南澤（地圖に南澤とあるもの）と袖澤の落合まで行つて此處には紫蕨取りの小屋があるの動澤あたりまで紫蕨を取りに行くのださうである。重太郎の話では自分も不動澤までは二三度行つたが上の方は通つて見ないが昔鑛山のあつた時には上から下つて來た者に會つた事もあつたから通れぬ事はなからうと云ふ事であつた。又鷹ノ巢の清四郎お爺も二十年も前に岩魚釣りに檜枝岐から來た事もあるが通れるとの事であつた。併し袖澤の割に水量の豐富な事腹位の渡渉は覺悟せねばならぬと言つて居た。不動瀧は三本ださうである。一番深い徒渉は不動瀧の下を右岸に移る所ださうである。其の中に行つて來たら詳しく書く事にします。少しでも此方に行き度いと思ふ方の參考になればよいがと思つて居ります。

此の方面で使ふ山の言葉を紹介して置きます。

× × ×

ツルネ＝尾根
ソネ＝稜線
ダオミ＝鞍部
ダオ＝鞍部
サゴヘ＝比較的長いところをへつる。例へば袖澤の大サゴヘ小サゴヘの如し。
ヘタクル＝比較的短い所をへつる事。

× × ×

スバリ＝澤が狭くなつて小さい瀧などとなつてゐる所。

高地＝澤の頭の事。

須原＝河原の平地の廣い所。例へば大須原、ヨッビ須原の如し。

ゾウ＝澤のまつたもので例へば不動岩小澤（こぞう）の如し。

ヤチ＝びち〳〵した草地尾瀬ケ原の様な處。

田代＝ヤチに同じ。

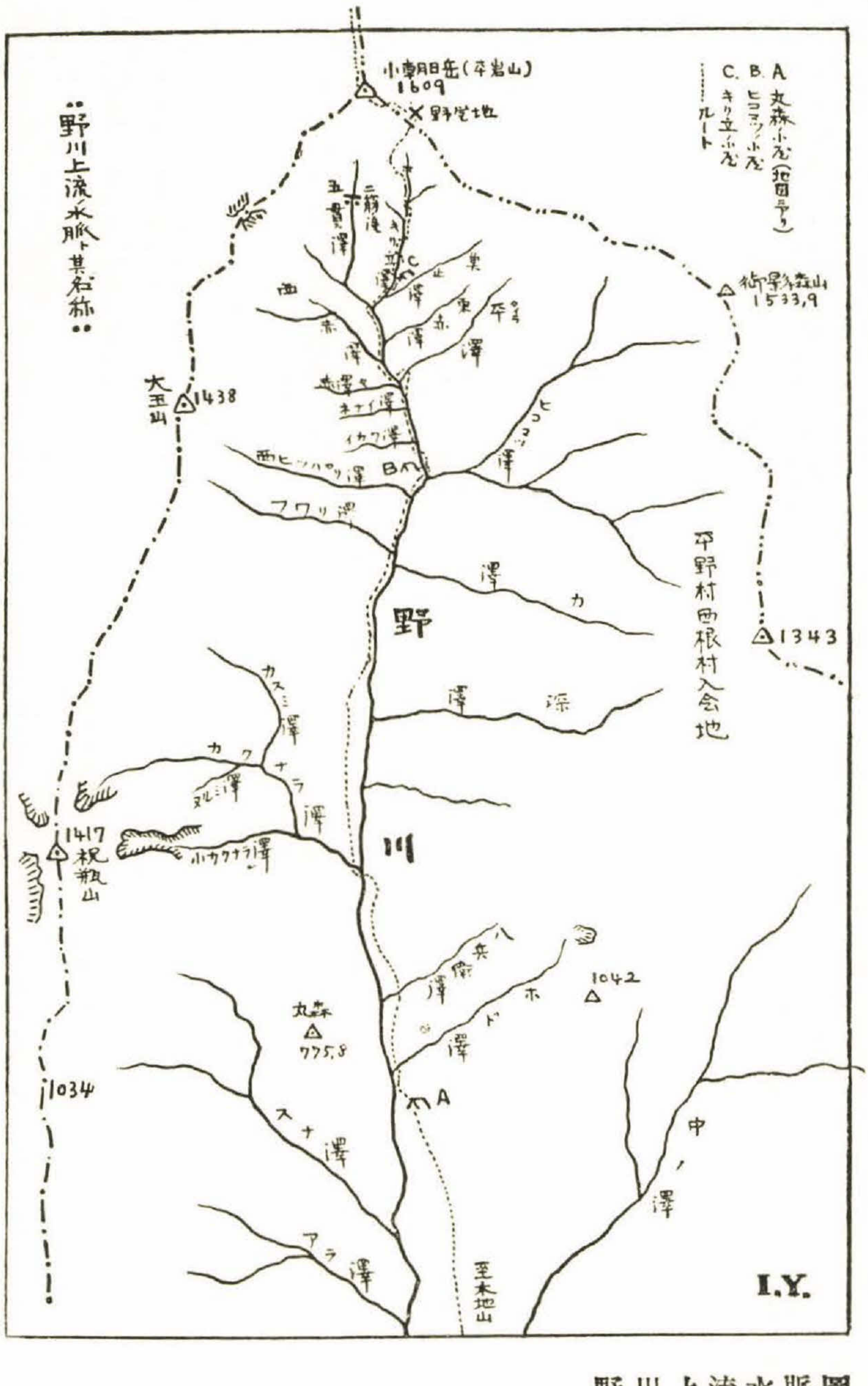
吹ク＝澤が吹き上げてると云ふ風に用ふ。例へば此の澤は燧の三角點に吹いてゐると云ふ風に使ふ。

×　×　×　×

×

東北大朝日岳

3　川瀬和四郎　行
2　村尾金二　村根傳ひの記
1　野鳥川より庄内へ　吉澤一郎


A 丸森小屋(北回り)
B. ヒコヅル小屋
C. キリ立小屋
ルート
小朝日岳(平岩山)
1609
野営地
野川上流水脈ト其名称
五葉沢
三筋滝
キリ立C
東止沢
東平沢
西沢
大玉山
1438
ヒコヅル沢
西ヒツバリ沢
フワリ沢
御影森山
1533.9
平野村西根村入会地
1343
野
川
カスミ沢
カクナラ沢
ヌルミ沢
小カクナラ沢
1417
祝瓶山
丸森
775.8
1034
1042
八兵衛沢
ドホ沢
A
スナ沢
アラ沢
中ノ沢
至末地山
I.Y.

野川上流水脈圖

1 野川遡行

村瀬和四郎

「おい祝瓶が見え出したぜ」

マドロスを咽えてうまさうに煙を出して居たYが斯う叫んだ。足下の地面を凝然と見詰めてゐる明神平峠へ來る迄は空は一面に薄雲に蔽はれて時々小雨あへ降つた程で少しも行手に崛起する山々の片影だに認めることが出來なかつた。只美しい流と僕等の足跡の印せられる桂谷への路のみである。其れが久し振りに背負つたリュックサックの重みと暑氣の爲めにうんざりして此處へ投出す樣に座つて疲勞と睡氣を癒して好い氣持でウツ〳〵してゐる間に何時の間にか山は其灰色のヴェールを取り去つて薄陽をうけてゐた。Yの指す方を見ると祝瓶が屹然として雲間に浮んでゐる。其右に連る丸味を負びたのが大玉山である。フツクラした處女の肌を思はしめる樣な感じの好い山だ。平岩山を蔽つていた雲が北へ走つて舞臺の幕を開けた時に立役者の朝日嶽が嬉しさうに觀衆の僕等に挨拶して呉れた。

「オーイ、オーイ」

僕は近頃是程大きな聲を出した事はない。僕の胸は嬉しさに鼓動してゐる。芝居なれば音羽屋と云ふべき所だがまさか朝日嶽も角力じみて面白くない。只「オーイ」で充分だ。私は瞬きもせず視詰めてゐる。矢張り山は微

笑んでゐる。――――

僕等三人――吉澤、村尾、村瀬――は此日未知の東北の山朝日岳を探らんと時庭驛に降り立つた。昨夜九時十分の汽車で上野を出發したが未だ梅雨があけきらぬ爲めか蒸す樣ないやな暑さの爲に寢苦しい一夜を明かして八時十分に赤湯の驛に著いた。それから長井線で時庭に來て時庭から今迄歩いたのである。休んでゐると無性に睡氣が催して來る。其れに腹も大分北山時雨だ。峠の驛で舌の切れさうな冷たい水で名物力餅を食つたが、甘黨ならざる僕には少ししか食えなかつた。赤湯で長井線に乘換へた時荒砥行の列車の發車迄に大分時間があつたので驛前の飮食店でウドンを食つたが素的滅法まづかつたので二杯と食ふ氣がしなかつた。

「腹が空いたね」

「早く桂谷へ行つて暖たかい飯をおあがりなさい」と云ふのは途中で道連れになつた前野村の青年である。

來る途中に通つて來た坂が一杯の七曲りである事や其れを登りきつた所に湧き出てゐる清水を飮ませて呉れたのは此の青年である。

一時間以上も休息した後四時一寸過ぎに明神平峠に別れを告げ再び重い足をひき乍ら桂谷を指して進んだ。前野と桂谷との追分で青年と袂を分ち其れから約半時間位して桂谷に辿り著いた。桂谷には農家は四軒ある限りであつたから其内の渡邊某の宅で一夜の宿を乞ふた。今明日は曾我の雨日には雨が降るとの事で今日は丁度曾我の雨日である。大磯の虎が愛人十郎との袂別を惜んで流した泣きの涙が凝固つて雨となり幾百年の後迄も降ると云ふのが曾我の雨の謂れである。幾百年の後の世に遠く離なれた東北の山家に其名を謳

はる〻虎は又以つて冥す可しだ。虎の涙は随分出たとみへて其夜は物凄い風を伴つて豪雨が車軸を流す勢で降り續いた。

雲の往來激しく一寸霽れる見込はなかつたのを幸ひに午前八時頃渡邊の家人に見送られて著蓙に雨を避けて木地山に向つた。草をわけつ〻小徑を進み行く內に雨は殆んど止んだ。野川の流は前夜來の豪雨に水量を增して濤々として流れてゐる。時々の鶯の可愛らしい聲に慰しつ〻三人は默々として歩を運ぶ。桂谷を出發してから一時間程してオイコに著いた。おいこの一枚岩の上から水中を覗くと雜魚が無數に泳いでいるのが見えると教はつていたが水が濁つていて何も見えなかつた。十時過ぎに木地山に著きとある獵家に雨宿を乞ひ折柄又降り出して來た雨を外に爐邊で煖をとりつ〻談笑の花を咲かせる、先刻から柱に吊つてある兎の皮を物欲しさうにYが眺めてゐたが遂に宿の主人に交涉して半圓で取引をした。此の毛皮は其後大鳥川を下つて里へ出る迄毎日彼の尻の所にぶらさげられて尻當の用に供せられてゐたがYは朝日嶽登山記念として今でもこれを保存してゐるか知ら。

野川を左にして雨露に濡れた草を掻き分けて進むに約一時間半程で丸森の小屋に著いた。二時をりではあつたが大事をとつて其晩は丸森に泊る事に決めた。木地師の小屋であるが丁度其時は誰も居なかつたので無斷で侵入した樣な譯である。

「山はい〻な、此れが里であつて御覽、刑法第何條かに照らされて家宅侵入罪を構成する所だ」等と云ふ僕等の眼に十五六匹の岩魚が串にさしてあるのが映じた。これも無斷で腹中に收めた。

多數の蚤の抱擁を丸森の小屋の思出として三人の子が折柄仕事にやつて來た小屋の人々に別れを告げて小屋を後に出發したのは翌朝の九時の事であつた。最初の豫定では丸森の小屋は素通りにしてカスミ澤の小屋（矢張り木地師の小屋）に昨夜は一泊し今日は祝瓶山に登り朝日岳に登る筈であつたが、天候が險惡であるから萬一を慮り小屋の木地師の忠告を容れ豫定を變更して野川を遡り平岩と御影森山の鞍部に出て尾根傳ひに朝日嶽へ出る事にした。小屋の前で一同の記念撮影をして案内に賴んだ庄司某といふ青年を先頭にしてキリ立の小屋へ向つたものである。

徑らしい徑はなく野川の流の內を進むのであるから腰から下はづぶ濡れで「プリンス」は形を止めぬ程に萎縮してゐる。時々蒼空が顏を出してお陽樣がニッコリと微笑んでキツスを投げて呉れるが其れも束の間意地惡の雲や强力をのみ案內者と思つてゐる自分にはこの案內者は案內のカテゴリーに入れることは出來ない。況して此の案內者は所謂登山の何ものたるかを知らず又僕等の登山の目的をも充分理解し得ないらしい。

其れにつけても先日長井驛の汽車の內で會つた一老婆の事が思ひ出される。登山者の姿を嘗つて見かけた事のないらしい彼の地方の人々は僕等の所謂登山者たる事を知らない。彼等に云はせると僕達は山師又は鑛山師であるの共老婆はMと盛んに語つてゐたが其要點を云へば斯うである。

「お前達は東京から此地へ稼ぎに來たゞか。此地から東京へ仕事に行く者は多いが東京から來る人は無いぞ。

金山へ行つたとて最早金は出んから悪いことは云はんに次の汽車で東京へ歸つて東京で働けよ」

老婆の親切は深く感謝しつゝも餘りの可笑しさに噴き出してしまつた。

其んな事を思出して獨りで微笑んでゐる内に何時かホド澤、八兵衛澤、カクナラ澤、深澤、カッ澤を渡り十時五十分頃丸木橋を渡つて本流の右岸の樵夫小屋へ入つた。

小屋で晝食を濟ませて後又行を續ける。赤澤、平澤、西赤澤、東赤澤も過ぎゴカン澤と魚留澤とキリ立澤との落合に出た頃には又小雨が降り出し全身惡寒に襲はれて火を戀ふ情が熾烈で自然に足も機械的に速められ卅分程して十二時半キリ立の小屋へ辿り著いた。案内の青年を犒つて歸宅せしめた。若い友の間には盛んに話がはづむ午後は降り込められて駄辯つて過したが其話題は讀者の想像に委せよう。

人間が毎日心を遣ふ事は非常に多いが對人關係程煩はしいものは他にない人間が社會を構成している以上其一員たる個人は必然的に對人關係を免るゝ事は出來ない。若しこれを免れんとすれば其前には死の外は何物もないされば人間生活は主に對人關係から成つてゐる。對人關係から生ずるAffairsによつて常に煩はされる人の子は例へ一時的にせよ避難地を求めて斯くは東北の山に入り込んだのである。又大自然に接して或物を得んとして來たのである。然し心は矢張り都會を慕ひ對人關係の煩はしさをなつかしんでゐる。

照る照る坊主を作つてお祈りしたので御利益があつたため翌七日の朝は霽れた大空を以つて明け初めた。虎の涙も收まつたので十郎ならざる一郎を先頭に三人は八時半に小屋を後にした。

今日はキリ立澤を落合迄引返し其れから五貫澤を遡つて平岩山に取付く豫定であつたが折角昨日冷い思ひをし

て遡つたキリ立澤を落合迄引返すのも剛腹であるし少々傾斜は急ではあるがキリ立澤を登つたら何處かへ出れると思つたのでキリ立澤を登り詰める事にした。五貫澤には一布瀧のかゝれるものあつて瀧と呼んでいる。其あたりには金（多分砂金だらうと思ふ）が相當出るので採取者が五貫目の庄司佐平が教へて呉れた。話の眞偽は兎に角金が五貫目も採れたらいゝなと一同マンモニズムを發揮する。昨夜は採りもしない五貫目の金の分配方法に付いて眞面目腐つて論議したものである。

閑話休題一同は慈まれたる心地にて爽々しい朝の山氣を一杯に吸つてキリ立澤を登つた。一の堰があつた。樵夫が木材を流す水を調節する爲めに設けたものである。九時半頃又堰があつたが其堰からは愈々雪渓である。雪渓が所々切れてゐて其都度ザイルを使つてゐたので案外手間どつてキリ立澤を登りきらぬ内に晝になつてしまつた。前面には御影森山と平岩山との鞍部が直ぐ間近に迫つてゐる。どうせ夕方迄に平岩山の露營地に著けばよいと思つてゆつくり飯を食つて十一時半頃から又歩き出した。直ぐ澤は盡きて其れから藪潜りが初まつた。傾斜が可成りひどい。笹や紅葉や松や其他名も知らない灌木の密生してゐる間を潜つて身體は上へ上へと上つて行く。木の枝を握つて手に滿身の力を籠めて身體を引上げる時足を奮張つてスベリ落ちんとする身體を持ちこたへる時自分の心には名譽も地位、學問、財産も何ものもない。只あるのは自然と同化した山靈に純化せられた本來の魂あるのみ。或はこんな心の境地が神人合一の狀態ではなからうか。然し藪の經驗の内でもこんなひどい藪に出會した事は未だ嘗つてない。神人合一の何のと後からは勝手な熱

を吹くが其時は實際情けなかつた。手や足には擦傷が出來るしともすれば枯枝が眼を危く突かんとした事も度々あつた。其内に濃霧が襲つて來て何も見えぬ樣になつて終つたり、惡戰苦闘の五時間も過ぎて四時半頃這松地帶へ這入つた。空中滑走を暫く續けたが濃霧の中の前進は危險であるから五時十分頃尾根に天幕を張ることにした。今迄はそんなにも感じなかつたが尾根に出たら冷い風が猛烈な勢で吹いてゐる。風を避けて尾根の反對側の成可木の少い傾斜の緩かな地を選んで天幕を張り何だか不吉な豫感に襲はれて飯も食はないで早速寢てしまつた。神よ三人の身體を無事に護らせ給へ。

尾根傳ひの記

村尾金二

八　日(晴)

石楠木や笹の間に張られたテントが白んで夜明も近い。場所は平岩山から御影森山へと續く尾根の平岩寄りの鞍部。

すがすがしい朝の空氣が充ち渡る。飛び出せば大朝日、小朝日岳がま近く、今昇らうとする陽を受けて赤く輝く。朝日俣澤が東に向つて走る。

御飯もたかないから六時少し過ぎにはもうテントを疊んで出發した。

朝の雲は快よく飛ぶ。郡界の尾根とは云ふものゝ、僅かに古い切明けの跡も微かに殘したまゝである。相變ら

ず丈なす偃松の枝をわたり、つゝじを分け、石楠木を潜らねばならぬ。笹に滑る身體を支ホツと息を入れる。もう夏の日ら一時間ばかりして尾根の東側に雪のある地點へ出て、に照りつける。雪渓の頭は短く終つて笹の急斜面が前に高い。これが終れば平岩山かも知起る。喘ぎ喘ぎ急傾斜を攀ぢた。疲勞は度々足を滑らしれぬ。安易な氣が胸に藪の中だつた。登り盡したと思つた地點は矢張り見通しのきかない

空腹は襲ふ。疲れは増す。たゞ恵まれたのは天候である。樺や笹や名も知らぬ樹々に阻まれて行く足下にも、枝の間を洩れて、苦しみの中にも快よい陽の光がとどく。一時間、また一時間。矢張り前の見えぬ藪の中である。上からは枝が壓へる。左右から引張る。下からは足を拂ふ。つゝじの小枝が頬を突く。石楠木が彈いて、乘つた身體の平衡を奪ふ。いやが上にも神經は尖る。二三間前に行く友の姿がもう見えなくなる。時々飯盒が枝に當つて、カーンと意外の方向に金屬的の音を響かす。呼びかはしながら進んで行く。足の早いYは餘程先に行つたらしい。

笹の急傾斜を限りにして、ヤツと次の雪渓の上へ出たのが十時。救はれた様な氣になつて、暖い陽の下に身體を投げ出す。平岩までにはもう二つ三つ突起を越さねばならぬらしい。御飯を焚こうと地面の濕潤なのと、まだ雪から出たばかりの若々しい生木ばかりでは火の起し様もない。ソーセージと鑵詰とで間に合はして、十一時にはまた出かける。

藪くぐりは續く。身の丈餘る樺からつゝぢの下生えまで完全な鹿砦を形づくる。汗ばんだ襟首には木の屑、樹

皮、朽葉が氣持悪く落ちて來る。疲れては、眞青な空と、紗の様な雲を仰いで、地上の苦しみを天に忘れる憩ひの間が嬉しい。

午後一時、苦しみの藪が終る。赤味がかつた小石の間にツガザクラの毛氈。腰位の偃松と較べればまだ行手が見えるだけ好い。兩側にせまる朝日川と野川の谷が見える。昨日も、前の身體をかくす尾根を上つたらしい。眺望を禁じられてゐた半日の苦しみを、とりかへしでもする様に四邊を見廻す。

疲勞は足の歩みを遲くし、空腹は身體の働きを鈍くする。平岩山についたのは三時を過ぎてゐた。暮るるにはまだ早いが少し冷たくなつてきた風に頰をなぶらせて休む。

平岩で尾根が三つに分れる。北の方に大朝日が聳えて、赤い小石の膚に所々綠の斑を入れる。それを左へたどつてなだらかな傾斜を續けて中岳（一八〇〇米の圈）の丸い突起を起し、一段落して西朝日へ走る西朝日は右の肩高く盛り上る様に雪を負つて、左に一六六三米の袖朝日を連ねて、その向ふに傳說の國條かの雪溪がその胸高く急に懸る。

平岩から西南に大玉、祝瓶の尾根が續く。德網から針生平を通つて來る道が此處に出る。祝瓶山は下から見た嚴の險しさはなく、樹に包まれた柔かい輪廓を見せる。

東南には今日歩いて來た尾根の先に御影森山がうねつて行く。西の方、雲の下に光るのは海らしい。

朝日まではまだ三百米の登り。あの岩邊りで百米、それからあの偃松で百米、もう百米で頂上、と目分量で區切りをつけて三時十五分平岩出發。

力のない足取。呼吸の逼迫。

大朝日の頂上で二等三角點の標石を撫でて微笑んだのが六時十五分。丁度今朝出かけてから十二時間。地圖の距離では一里もなからう。夕暮がせまる。朝日嶽の尖つた角錐の影が東方の谷に落ちる。中嶽との鞍部の野營地はもうすぐだ。其處には二三人の人の動きさへ見える。

立派な切明が小朝日へと續くのを途中で捨てゝ、北へ偃松の上を鞍部へ下る。七時。水も充分ある。狼吠える帝大山岳部のテントには二人の人が居られた。

夕闇がやつて來る。

テント張り。焚木集め、焚火、炊爨。

あはたゞしい夜の仕度をすましてやつと夕餉をとる。昨日以來丁度一日口にしなかつた米の飯の味はひ。御飯がすむ。十時も過ぎた。さあ寢よう、火も消えかゝつた。

九　日(晴)

グッスリ寢こんでしまつた。陽はもう高い。大鳥池へと帝大の人は出發されてしまつた。昨日と一昨日の苦行に、軟化しかけて、小朝日から鏡泉へ下りようかと云つてゐたのが、この好い天氣にまた尾根をたどることにする。

這ひ上つてゐる。藪を避けてはこの雪渓の上を行く。中嶽から北に根子川へと注ぐの草地を中嶽に上る。これから以東嶽まで雪渓は大てい東側にがヨコマツ澤。西朝日と龍八時四十分、陽の光も暑くなる頃出發。東寄りの



を懐深く包んで太古の眠りを物語る。

門山（一六五七）の間に東に走つて是と合ふ二本の澤は南からアカクラ澤、石ヤラ澤。何れも尾根筋近く上つた所に雪を残してゐて、快よい雪の上の歩みを樂しませてくれる。十時、西朝日の肩の草地へ腰を下す。三角點の頂上はま近だ。大朝日から小朝日へかけて深い樹の波。所々に雪が白くつく。月山の穏やかな姿が近く、鳥海は眼路はるかに霞んで淡い。

相變らずの藪と雪渓を交互に繰かへしながら十二時四十分龍門山の頂上を過ぎる。此處で尾根は二つに分れる右は北東に走つて清太岩を抱いて末永く大井澤の中崎山までと行く。左は寒江から以東嶽へと連る。左の尾根の東側を鞍部近くへと下りて行けば、右の尾根を大井澤へと通ずる青年會の道標が人待顔に建ててある。百畝、畠のイハカヾミの敷物に身を投げ出すこと。處々水溜りもあるが餘り綺麗ではなかつた。今日の行手は狐穴に、足取りも輕くなる。

三、上りも下りも草の短い寒江山を過ぎ切明けとときめて氣も伸びやかと、西には三面川がその水境へ來れば今日の野營地もすぐ下だ。

三時四十五分狐穴に着く。尾根から東へ四五十米許り下りた所、湧き出る水は草地を深く穿つて流れる。

陽が沈むまでにはユックリ時間がある。

月山は愈々近く、ゆるやかな斜面に豐かな雪が湛へられて殘る。なだらかな起伏を越えて以東嶽が巖を立てて聳える。スケツチもすます、思ふともなく明日の行程を思ふ。藪に裂かれた洋袴の膝をあやしげな手付で縫ひ繕つてる友の姿も面白い。眞赤な太陽が山かげに入るのも、沈みきるまであかず眺めてゐた。

日が暮れてテントに入つてから、ハタハタと打つ風の音に氣がかゝつて出て見る空にはいつも變らぬ星が輝いてゐた。

3 狐穴野營地より庄内へ

吉澤一郎

狐穴より冷水澤まで

何かの音にフト眼が覺めた。友の二人は未だ幸福さうな夢路を辿つてゐるらしい。靜かにテントの扉の紐を解いて東の空に眼入つた。さても祝福された我等の山旅であるか、眞紅の太陽は今將に黄金の波を投げ出した所であつた。遠く一直線に大地と大空を限る雲海の上の日の出、以東嶽東山稜の右に悠々と北邊の雄を以て任ずる島海山が雪白き幾條かのひだを浮ばせてゐる。いつか三人の山男の眼は云ひ知れぬ憧れの光に充されてゐた。

愉快な朝飯を終えてテントは再びペンちやんのリュックに詰め込み清々しい朝の氣分にイゼンつけた足も輕く一夜を心よく過させて呉れた野營地を後にした。以東嶽は何と云つてもこの朝日山塊に於いては最も落着いた山である。根張りの力強さは北アルプスの槍師嶽に彷彿たるものあり。笹の山稜を急ぐともなく傳はつて行く。笹原山への尾根の分岐點の岩峰に立つて、昨日とそして其の前の日、歩いて來た峰や山稜を泌々と振返つて見た。



ビラミッド型の大朝日岳を中心として西方に延びた山脈は西朝日、鳥原山への山稜が日と成つて低下し、東方へは小朝日の通つて來た尾根筋てゐる。藪這松に惱まされた自分等は此處から見ればまるで平和なカアペットを被せた様なものにし分派され下にはつきりと指か思はれない。野營地はと見れば三方境のすぐ下にはつきりと指點する事が出來た。一般に此の邊は西側より東側の方が雪量が多い様である。

以東嶽一等三角點に腰を下ろしたのは正九時であつた。冷い風が心持ちよく顔をなで、過ぎる。殘り少なくなつた煙草の煙は限りなき青空に物質不滅の原則を破づて消えて行く。的として來た大鳥川の水源大鳥池は評さの如く幽邃その

もの〻四圍の有様などす勘き湖面を縮型にして大鳥池は其の池畔に立つた感じは何と云つてい〻か少くとも美的觀念を生ずる様な事はなくもなぐられ相な薄氣味の惡い所である。大鳥川の惡場は少しもそんな様子を見せず只鬱蒼たる樹林に被はれてゐる。三角池が僅かに光つてゐた様に覺えてゐる。

一縷の小徑が西へ向つて踏まれてゐる。自分等は大朝日や西朝日や懷しき野營地に別れを告げて大鳥池指して馳せ降つた。以東嶽より西北に派出された等高線數字の記入ある尾根の一、四〇〇米附近には小さな沼二つ三つあつてこ〻までは短い笹の急傾斜であつた。尚も尾根を降ると段々藪が大きくなる。ペンちやんは最初に出遇つた急雪渓に辿りつき、そこからグリセードをやつて滑つて行つた。自分と村瀬氏は尚降つて次の急雪渓の頭に出て、こ〻から面白いグリセードを支へ乍らこの雪渓の最上部に辿りつく味ひつ〻東ノ澤の雪渓に合して大鳥池は緣から少し離れると急に深くなつてゐる様である。池畔に着いたのは十一時であつた。この小舟でもあればあつさりと對岸へ達せられるのであらうが、それが無い以上自分等には西ノ澤以北の藪くゞりが殘されてゐるのだ。豪遊に晝飯を終つて後、岸邊に沿つてピシヤピシヤと中ノ澤へ向ふ。ヤモリが泳いで居るのを見るとあまり氣持のいゝものではない。西ノ澤へも同じ調子だつた。さて之からが問題なのだ。岸沿ひには絶對に行く事は不可能なので前人の記錄通り藪を分けてまつすぐ登る事五十米突ばかりで横に池畔に降つたが矢張り絶壁の爲斷念して登りかへし、もりもりがさがさやつてる內に踏跡を發見した。最初登る時百米突以登上つて居れば容易に此の踏跡を發見する事が出來たのだらうと思ふ。踏跡の不明瞭になつた頃池の

方を見ると岸邊が平らしいので藪を滑り降る。そして渚沿ひに三角池と一、〇〇二米突の鞍部の南にある小屋跡に達する事が出來た。大鳥池の落口は何の奇もないのであるがあのすぐ下に七ツ瀧の險があるとは思はれない。小屋は殆ど使ひものにはならない程度である。おまけにこの邊は毒蛇が居るらしいので尚の事野營する氣にはなれない。小屋跡から鞍部まで雪の爲か踏跡がはつきりしなかつた。急な小澤を約廿分も降ると、やがて七ツ瀧の音らしいものが聞える大鳥川本流の河原に着く。

一度對岸（右岸）へ渡つて見たが徑らしいものがないので再び左岸に移り探してゐる内に明瞭な徑を見出した。

これは何の苦もなく化穴山から北流するゲンダン澤の落合まで自分等を導いて呉れた。ゲンダン澤を徒渉して尚も徑を求めたが得られず止むを得ず左岸を傳つて降つて行く。この邊ではもう水量は可なりなものでオイソレとは徒渉不可能である。歩きい〻所をよつて岸邊を傳はり五時半頃五六七米突測點の對岸へ辿り着いた。もう野營をしてもい〻時間ではあるが左岸に適當の場所を見出せない。尚降ればこつち側は壁でヘツリも不可能、と云つて對岸への徒渉も容易でないとは思はれてたが、外に良策も浮んで來ないので此處でザイルを出して萬一の爲に各自をしばりつけ意を決し對岸に移つた。相當の急流でしかも腰部まで入つてしまつた。十五米突のザイルが一杯であつたのは何より嬉しかつた。たとへ流されても濡れるだけで確保が完全だから命の心配はない。可なりひどい徒渉だなと思つたが、翌日のそれに較べれば實に屁の河童である。遂に冷水澤合流點に幕營する事にして一まづ落ちつき、ペンちやんと二人で明日の道調べをやつたが鉈の入つてるのを多少見出したゞけで何の手懸りをも得られなかつた。テントを張つたすぐ傍の楢らしい大木に大正十五年四月、工藤某と彫刻してあるのを發見

したが、これは後に聞いた所によると四月雪の豐富な頃測量に來た人達の泊つた所であつたのだ。八時頃焚火にあたり乍ら無駄話をたゝいてゐると何か自分の後の暗闇でガサガサリとやつて來たので頃合ツと照してやつたら何か知らぬが逸散に藪の中を逃げて行つた。此の邊は白狐が横行する相長から聞いた話。

冷水澤より西俣澤出合へ

此の日は大鳥川降りで一番嫌な所ばかりの多かつた日である。何處かの學校の記錄に冷水澤から西俣澤まで僅かに一時間と少しで行つた様に書いてあつたが水が全然無ければともかく多少とも流れてゐるであらうこの惡場に於いて人間業ではとても出來ない仕事と思へる。印刷の間違ひかも知れないが兎に角大したものだ。自分等の記錄によれば朝八時三十五分から夕方の五時までゞ都合八時間半位は要してる事になる。十二回の徒渉の間一つとして容易なものは無かつたのであつた。

野營地を後にして直ちに冷水澤を渡り、半町も歩いてすぐ左岸へ徒渉した。此の時も少しで對岸の岩に達しやうとした折にピツケルを突きはづして身體を流す所であつたが兩方の手を岩にかける事によつて辛うじてお陀佛は免れたが、大切なピツケルは遂に身代りとなり、渦捲く瀬の中へ流れ込んでしまつた。永なりテントの柱ともなつて呉れた我が愛するピツケルを僅かの不注意で殺してしまつたのは實に申譯けの無い事であつた。然し愛するピツケルよ！自分等は汝のお影で何事もなくこの旅行を終る事が出來たのだから安心して

成佛して呉れ！　第四回目の徒渉を終え、常願寺山の一部と覺しき邊りを見る事の出來た。今は煙草もない。間食物もない。實に淋しい晝飯ではあつた。二時頃左岸をヘッて可なり上の方まで登つて再び河原に出た。そして對岸に渡るべく徒渉をはじめて最後と向ふを見ると魚釣りらしい人が二人長い竿をもつて登つて來る。帝大の人に大朝日で間である。老人と若者、見れば二人は自分等の徒渉するのを見ながら煙管をスパリスパリやつてゐる。占めたと思はずも叫んでそこへ馳せつけむさぼる樣に煙を吐いた。老人は何も云はず無理もない樣な顏をしてニヽニヽ笑つてゐた。煙草では可なり苦しめられた經驗もあるがあんなに旨かつた事はない樣に思ふ。二人は噛んで含める如くこれからの徒渉點を教えて呉れたり、又自分等の無鐵砲に驚いたりしてゐた。厚き御禮の言葉を殘して再び出かける。右岸から左岸へ、そして又右岸へ渉る時にあふ。今度は二人とも血氣盛んの人達ばかりの渡渉をしなければならぬと云はれ、全くあきれてしまつた。泡龍（あはだ）はもう近い筈なのにまだ五回

左岸へ、それから右岸へ、そこに大鳥川に架け渡されたスノーブリッヂを發見した。

はれる樣だ。渡るには充分の厚味があるが對岸のヘツリが不可能の爲も少し降り對岸へ回である。右岸傳ひに少し降るとやがて川は左に曲つてそこに泡瀧は絶對に駄目となつたが徒渉となると尚更不可能だ。思はず三人は顏見合せた、第一の渉り來た。右岸のヘツリらしい滔々の聲が聞えて場といふのは此處だらうか？と云つて今まで來た所には適當な所はなし、此の先は行かれぬし、こうなると決心

せざるを得なくなるが、下を見ると分厚な流れが色も藍に近くグーとも云はずに動いてらしい。まづ皮切りとして村尾、村瀬の兩氏にザイルの一端をジッヘルしてもらひ自分は思ひ切つて此の流れに飛び込んだと云ひ度いが靜々と入り込んだ。臍は完全に濡れて了つた。何囘かの徒渉でるらしい。だん〳〵と流れの中央に出て來た。殆ど流され相ではあるがザイルがあるといふ安心もあるので落着く事が出來る。少し身を上流に屈しなければならないのでもう全身川の中に居る樣なものだ。遂に足許が高くなると思ふとやがて身體は水中から出て來て無事對岸へ達する事を得た。ペンちやんはるを水にしたして居た樣だつた。村瀬氏は危く流され相になつたがザイルによつて事無きがら再び振返へると二度とやる氣の起らない徒渉地點である。

あゝ、それでも到々嫌な惡場は終つたのだ。これからは呑氣に繁岡へ出て、上田澤から鶴岡と、そして汽車でなぞと考へて來ると自分の前途には忽ち明るい陽がさして來た樣に感じられた。この時はもう四時に近かつたが湧然と出て來た元氣にまかせ、日茶苦茶に藪くゞりをやつて泡瀧下に出で半町ばかり左岸を歩いて遂に西俣澤の合流點に達する事が出來た。泡瀧は高さこそ大したものではないが、あれだけの水量を一度に落すのであるからその音もすごいが立派なものであると思ふ。西俣澤を一寸登つて徒渉すると小徑を見出したので少し登ると平地があつて野營の跡を發見した。五時五分此處に最後の幕營をする事に決めた。

思へば大鳥川は凄い所だつた。

聞く所に依れば來年までには次に述べるサラブチ澤を登つて茶畑山に出で、戸立山の北面を大鳥池へと徑が出

來る相であるが徒渉の嫌ひな人には吉報であらう。かく申す自分もあんな徒渉は眞平といひ度い位であるのだ。

上田澤への日

天氣は何時まで續くのか今日も亦一點の雲もなさ相だ。朝飯は二合の米を焚いて其の中へ鰹ぶしを鉋で削て入れ粥にして三人で食つた。外には全く何もない。たゞ紅茶が少しばかり殘つてゐるが砂糖がない。紅茶の本質を味ふ事は出來たがこんな本質は有難くない樣だ。粥腹で出發したのが七時廿分、小徑をたどるとやがて河原の廣い大鳥川本流に出で流れのゆるい淺い徒渉をして對岸に渡り、ゴウラ澤を經て二三の徒渉の後右岸に小徑を見出して出た所は嚴重な小屋のあるサラブチ澤に出た。これは熊取りの小屋で冬使ふだけあつて丈夫に出來てゐる。もう三人は腹の虫が不平を云ふのを感じてか血眼になつて小屋中を探し求めた。味噌の入物も漬物の樽も中味はないつぽを一箇發見したに過ぎなかつた。それもいつ持つて來たものかも解らない程古びては居たが今は棄てる勇氣もなく、焚火を起してこれをあぶり山には黴菌はないとばかりにあの小さなものを骨まで三人して平らげてしまつた。食べた後で考へても何を口に入れたか解らなかつた。もう三人ともフラ〳〵だ、何しろ山へ入つて九日目、心から疲れてゐる上に朝飯が三人で二合のお粥と來てゐるのだから文句のいひ樣もない。

ふらりと左岸へ徒渉し、又ふらりと戻る。何か食ふものが落ちて居相なものだがいくら探しても地圖の大鳥川とある川の字の下の所で破れた橋の

下を最後の徒渉として大きな道にぶつかる事を得た。チヨイ〳〵村人に遇ひながら到々繁岡に着いたのは三時過ぎであつた。晝飯は勿論腹にはなかつた。ペンちやんは到々おこり出してしまつた。そして道の傍へ腰をどつかり落して動かない。區長の家をたゝいたが閉つてゐるので駄目、仕方なしに鶴岡營林區支部とある家に頼んで飯をたいてもらふ事にした。田舍には稀な美しい奥さんらしい人が親切にやつてくださつた。

少しあはてゝ焚いたものと見え固いやつを大盛り三杯流し込んだ爲かとても氣分が悪くなつてしまつた。リユツクを擔ぐ事はもう嫌なので後になつて來た區長工藤氏に頼み、上田澤まで自轉車で持つて來てもらふ事にし自分等は輕身で事務所の奥さんにお禮を無理に置き二里の道を上田澤の宿へ辿つた。十歩行つては休み、五歩歩いては腰をおろし、やつとの事上田澤に着いた時はもう電氣がついてしまつてゐた。惡い時は惡いもので泊るべき宿は最も北端れにあるのだつた。おまけに宿では今日は湯をわかさないといふので身體を洗ふ事も出來ず何處までたゝるのか全くわからなくなつてしまつた。

翌日は自動車を落合から呼んでもらひ、鶴岡まで七里の道を突走つて汽車で夕方福島につき、友人平川氏の勉強してゐる飯坂溫泉に落ち着く事が出來た。

之を以て本文を終るが一言附加へて置かふ。

大鳥川圖幅の東田川とある田と川の間から西流するのは大カツラギ澤、その北のが小カツラギ澤、大鳥川の鳥の字の左手へ南から來るのがネコブチ澤、川の字へ西流するのが千代澤、大の字の北へ入るのがヤブキ澤、蘇岡の對岸のがユガキ澤、猿倉山三角點から西流するのがトヤン澤、繁岡の手前のがニゲン澤

でめる。

要之するに朝日の縦走は雪の多い時に限ると思ふ。四五六月以外に行つては苦しいばかりだらう。尤も冬季は別問題であるが。

×

×

×

×

×

天神峠より三國峠まで

渡邊九郎

沼田――谷川溫泉――天神峠――谷川嶽――萬太郎――仙ノ倉――三國峠――法師ノ湯

六月八日 晴

雨かと怪しんだが僕等を起したのは傍近く流れる谷川のさゝやきで、宿の障子に初夏の朝日が一杯に當る頃には强力の彦さんの來るのを待つばかりになつてゐた。

七時出發、村の上の社の横から綠の細道は眞直ぐに登る。急なだけにぐん〳〵高くなつて雪で詰つた保戸ノ澤を渡つて十時にはもう天神峠へ着いた、

リュックを下すと正面に谷川嶽（一、九六三米）が突立つてゐる。鹿島鎗に似て二峰を持つた谷川嶽は清水越の道に面した東側を思ひ切つて切り落し、峠から頂上への尾根の西側は茶色のふつくらした肩に多量の雪をかけ、かけた雪は集つて眼下のオヂガ澤を嚴かに鎖す。谷川嶽の右奥湯會會川の深い谷を距てゝ寶川の笠ケ嶽、頂上の笠形は白銀に光る。東は氣持よく霞んで巨鯨の如き武尊は白雪を山腹に閃かし、堂々たる至佛と平ケ嶽の鈍峰はその左に淡い。

飯を少し食べて出發。小突起を幾つか越えると灌木の茂みも消えて一面の笹、十二時には頂上に續く大殘雪の



オジヶ澤の頭　　（馬數嵐十五）



直下に着いた。頂上の西側百米下を捲いてオヂガ澤の頭（一、八七八米）へ續く尾根へ出る。

尾根は可成り痩せて、右萬太郎谷へも左オヂガ澤にも急斜面をなしてゐる。尾根の上は淺い笹でオヂガ澤の頭は正面に、たるんだ尾根で左につながるマツカケ岩（オヂガ澤の頭の南一、八四五米の峰への尾根）の斷崖に雪をかけた雄渾な姿は僕等の足を止めずには置かない。一度降つた後百三十米許り登つてオヂガ澤の頭へ着いた。丁度二時。

マツカケ岩の姿に驚いた僕等は正面に横たはる萬太郎（越後富士一、九五四米）一帶に眼を見張らずにはゐられなかつた。黒くてまるい萬太郎の大頭は長く尾根を引いて、東マタの頭、ヒカゲコマタグラの突起を起し、オヂガ澤の頭から頂上へ續く大ショージの頭（一、八〇〇）の尾根と直角に交り、マツカケの岩尾根は左手から出て、三つの尾根の間は摺鉢の底の様な緩傾斜の一大溪谷を作つてゐる。谷は峰の雪を集めて目の覺むるばかり、この谷に源するアミダ川はヒカゲコマタグラの裾を廻つて銀の帶を白日の下にゆるやかにうねらせる。目を上げれば仙ノ倉（二、〇二六米）の金字形は萬太郎の左上に高く、エビス大黒の頭（仙ノ倉の東

一、八六〇米）の尖頭と大源太（一、七六四米）の鈍峰はその左に霞む。

二度目の飯を濟まして、左手の谷一面の雪に越えて百二十米の登りで大ショージの頭となる。この間は一面の淺い笹で歩きよかつたがスキーを思ひ、右万太郎の深谷にその幽を忍び、初夏の陽に照されてぶら〳〵來たので、くともう四時にいくらもない。頭に立つて振りかへると、谷川岳はオジガ澤の頭の上に既ノ倉、茂倉の二峰は雪を帶びた岩壁に夕日を受けて美しく、万太郎谷の水源をなす澤々は てゐる。

万太郎はもう目の上になつた。笹の外に石楠、米栂が出て來て歩きにくゝなつた。頂上頂上と東マタの頭とを南に搦んで五時には前は毛度澤の深谷で仙ノ倉はその向ふに立つてゐる。エビス大黒の頭とシツゲイの頭（仙ノ倉の北尾根一、七二〇米）を左右に控えて、金字形の頭は一般と高く、シツゲイ澤にもその左のにも雪を一杯に詰めて、上越の覇者仙ノ倉は刻一刻夕闇の中に消えて行く。

地圖で見ると東マタの頭とエビス大黒の頭との鞍部が尾根も廣くなつて、水も近さうなので野營地と定めてゐたが、今見ると尾根は可成り痩せてゐる様子だし、行くにしても一時間近くかゝりさうなので、雪を求めてこゝに野營する事にした。

天幕は柔かい笹の上に張られた。水は直ぐ下の雪で取れた。彦さんの集めた焚木で焔は高く、飯は終る。仙ノ

もマツカケ岩ももう見えなくなつて、山上の夜は靜かに更けて行く。

六月九日　晴

何だか知らないけものが天幕にぶつかつて一度目の覺めた外は、身をすくめる樣な峰を掠める風も、骨をさす寒さもなく、安らかな眠りは朝まで續いた。

天幕を出ると僕等を圍む山々はもう目を覺まして、谷から万太郎の頂上まで續く。振り上にだけ朝日を受けて夕に增して一段と美しく、眞白な苗場、神樂はその右遙かに、佐武流朝日はアミダ川水源の谷にさし込んで來る。谷を埋めた外は、身をすくめる

笹の尾根を四十米降つて、いよ〳〵仙ノ倉の登りになつた。偃松、米栂、石楠、熊笹の急斜面二百米を登り切つて、十一時三十五分遂に仙ノ倉の三角測量の櫓跡にリュックをおろす事が出來た。

頂上は比較的平らで、苔桃、米栂、石楠等で掩はれ、西に頂上と略同等のなだらかな一峰がある。而も今日の眺めは又何たる美しさだらう。

先づ東を見るに、今登つて來た尾根はエビス大黒の頭で一轉し、一度たるんで万太郎の肩に這ひあがる。黒い頭の万太郎は東マタの頭の西側斜面に多量の雪をたゝへて、谷川嶽の双峰はその上に、マツカケの岩尾根はその右に、國境連嶺は北に走つて一ノ倉の魁偉と茂倉の突兀はその左に連る。茂倉の右奥寶川笠ケ嶽と朝日嶽の參差たる起伏は更に柄澤、巻機、牛、割引の雄渾な山塊を引いて、その豊かな雪渓は正午の日光の下に白い焔を吐く更に尾瀬の至佛と燧ケ嶽は堂々たる覇者の風を一ノ倉の上に浮べて、白銀の平ケ嶽は寶川笠ケ嶽の上に光る。又南東には巨鯨の如き武尊の彼方に奥白根の尖頭一段と高く、日光群山蜒々として連亘して、末は赤城のなつかしき裾野にその姿を没してゐる。

西は目の前の平俵山（二、九八四米）の上に、苗場は雪の殿堂を浮べ、南へ引く緩斜面の上に鳥甲（二、〇三八米）は銀の頂を戴せ、北、神樂峰より雁ケ峯へかけても多量の雪を殘して白日の下に聳かせてゐる。苗場の南、佐武流の大嶽峙つあつて、鹿子斑の岩背はその後に、溫容の横手山と草津白根はその左に並ぶ。

紺碧の天穹の下、万象はその光彩を競つてゐる。山に來る者の幸福を今更の如く感じる。

仙ノ倉の西峯から平俵山までは夢の様なだらかな斜面で米栂、石楠、偃松の若木は何處までも續く。十二時二

十分平俵山の直下に着いて昼飯にする。平俵山で北に轉ずる綠の尾根は大源太を起して蜒々の陽は背中に暖い。

飯を濟まして一時出發、尾根を行かず笹穴の源流の雪溪を一氣に滑つて大源太の尾根に取つた大源太に近付くにつれ雪も笹も消えて段々藪が苦しくなつて來る。頂上を西に捲いて三國山に連り、初夏に合し、小突起をいくつも越えて四時四十五分三國山に着いた。

振りかへれば仙ノ倉は大源太の上に依然として高く、平俵との間、滑つて降つた雪溪は細ノ頭は仙ノ倉の右に岩壁に雪を帶びて立ち、万太郎はその右に黒く、谷川岳はうすい。樂〈終りに近附いた。惠まれた四人が滿された氣持で三國の峠に降り着いたのは五時だつた。夕日は漸く西の空を染めて、苗場の雪がそれに映る。

三國の峠道と別れた僕等はこんもり繁つた綠の谷を法師の湯指して降りて行く。

スケッチ說明（オジガ澤の頭より西望）

●正面の三峯右より左へ

万太郎（一九五四米突）

東マタの頭（一九〇〇米突）

ヒカゲコマタグラ（一八〇〇米突）

●後方万太郎の左は

仙之倉（二〇二六米突）

エビス大黒の頭（一九〇〇米突）

大源太（一七六四米突）

八甲田山と鳥海山

1 八甲田山

五十嵐數馬

好きな山へも行かれずに夏中休暇の一月餘を蔦溫泉で過した私は歸京の途中八甲田山へ登ることにして八月廿四日の朝七時頃宿を出た。連日の雨も今日は名殘りなく霽れて朝の氣は爽やかに足の運びも何となく輕い。道は蔦沼から流れ出す小川を渡り山毛欅の密生林を拔けて芝生へかゝる。宿の人は此處を蔦公園と呼んでゐるが實に氣持のよい所だ。左手に赤倉岳の赤薙を見ながら道は山毛欅林の間を蔦沼に沿うて登つて行く。間もなく道は降りになつて蔦川に出るが橋が落ちてゐるので徒渉をする。水量は極く少い。場所によつては踵を沒する程度である。水量の減ずることるが一度大雨すれば忽ち腰を沒するに至り到底越せないそうである。從がつて雨が止めば忽ち水量の減ずることも首肯されるであらう。故大町桂月氏が此の附近を特に愛され晴れた日など終日を此處で暮されたことが度々あるとは宿の人の話であるが確かに其の價値は有ると思ふ。登り僅かで一道に合する。淵澤へ出る道で綺麗な芝生の中を行く。實に氣持のよい道だ木々の容姿配置の妙自然の風致も玆に至つて極ると云ふべきで、正面には高田大岳が其の秀麗な姿を見せてゐる。フラフラ歩いてゐる中に左から右へ流れる小さな流れを渡つた。美しい着物を着た女の子が其の連らしい若者と魚取りに興じてゐる。變だなと思ひながら尙ほ行くと、堀立小屋の樣な建物

が數軒表はれた。何んだか映畫で見る植民地の部落へ來たような氣がする。地圖を見ると谷地いてゐる中に何時か分れ道に氣付かず通り過ぎて了つたらしい。戻つて見ると道はあつた。行谷を渡ると、間もなく左手に小徑が踏み分けられてゐる。繁みをくぐり椴松の痩尾根を傳つて原へ出た。振り返つて見ると八甲田の諸山が温容を以て迫つて來る。道は急に下る。濕地を通り小徑を渡ると硫黄の香が鼻を衝いて來るが、四圍には秋草が茫々と繁つてゐるのみだ。尚行くと小川がある。の様な沈澱がある。石は灼けて黒ずんでゐる。之が地圖にある猿ケ倉の温泉なのである。湯槽く取り殘されてゐる。湯の量も豐富だ。場所もよい。交通の便さへよければ立派な温泉場となつた。そから道は針葉樹の間を行くのだが、其の惡いことまるで田甫の中を行く様なものだ。風當りの強い故か木は皆裏枯れてゐる。此の嫌な道を抜け出ると周圍は急に明るくなる。南を見れば赤倉岳、乗鞍岳、駒ケ峯等、北を向けば石倉岳、硫黄岳、小岳、高田大岳等の全容が一眸に集る。八甲田大岳は鍋を伏せたやうな格好をして硫黄岳と小岳の間から覗いてゐる。峠へ來た。然し峠とは思はれない。諸所に水溜りがある。水蓮が咲いてゐる。「赤もの」「白もの」の實が綠の高原を見事な紅白に染め抜いてゐる。驚いたことには、未だ雪が消え殘つてゐる。如何に北とは云ひながら標高僅かに千米、而も八月の末に雪があるとは一寸想像も出來ない。腰を下したら動くのが嫌やになつた。一月餘の温泉生活に身體はすつかり緩んで日は輝いてゐるが汗も出ない。陶然醉うた如く果ては眠氣さへ催して來たが、さりとて何時まず、晝飯を濟まして酸ケ湯に向つた。峠から先は何等の感興も湧かない寧ろ退屈な道である。

客の散歩するのに出遇つた。宿に着いたのは午後一時半。其のまゝ八甲田山に向つた。今來の山道の案内標が目につく。道は朗々たるものであるだ枕木が邪魔になつて歩きにくい。燒石の積み重ねてある賽の河原を通り過ぎると、道は熊笹の間を行き暫らくして谷に面する。更に進むと谷を渡る。谷を渡り正面の谷を梯子登りに登つて行く。まるで穴倉の梯子を登つて行くやうな感じがする。灌木を脫け出ると這ひ松地帶で眺望は豁然として開ける。之から上は何の雜作もない。頂上近くに小池があるが水は腐つてゐた。頂上の大觀は實に雄大だ。東は太平洋、西は日本海北は津輕海峽を隔てゝ北海道が見える。南は十和田の湖山がかすかに見えた此處で見る高田大岳は群を拔いて高い。井戸岳と同標高とは思はれぬばかりか八甲田大岳より大岳・小岳・硫黄岳の鞍部にある平には池が二つ三つ。雪も殘つてゐる。天幕生活をしたらさぞかしと思はれた。澄み渡る空に水際立つた岩木山の姿、青森灣に浮ぶ船の煙。さては海上遙か名も知れぬ小島など、何時までゐても興はつきない。日も傾いた風も冷めたい。霧に追はれて山を下つた。宿についたのは五時半。自炊のみで旅籠はないと云ふ。賴んで賄つて貰ふことゝしたが、通された室、食事、寢具實にひどかつた。蚤にせめられて一夜を明し翌朝は早くから逃げ出した。暫らくは無味單調な道が續く。然し裾野を行く時、青森灣を目の下に見ながら行く時その氣分は又格別である。

一ケ月餘の温泉生活で身體はすつかり鈍つてしまつた。歩くのがとてもつらい。二三里歩いて了ふ。八甲田以來の經驗で、暫らくの間山登りは駄目だと思つたもゝ目の前に山を見ると、どうしても誘惑を感ぜぬ譯には行かぬ。まして此の時期を逸しては何時來られるか分らない。登らないで歸京すれば後で後悔するのは火を見るより明かなことだ。空身で行けば何のこともあるまい。どんなに頑張つてもしけ込んで、ゆつくり疲れを抜くべからず、と思つたのは男鹿半島から海を隔てゝ秀麗な鳥海山の姿を望んだでもしけ込んで、ゆつくり疲れを抜くべからず、と思つたのは男鹿半島から海を隔てゝ秀麗な鳥海山の姿を望んだ佐町に宿を取つた。時に八月三十日。

×　×　×

目が醒めた。夜は既に明け離れてゐる。時計を見ると五時丁度其の時だ宿の主婦が飯が出來たからとて起しに來た。仕方がない。此の邊の人は朝二時頃出かけて夕方五時頃歸へるそうな。往復十二里而も六時までには歸へらねばならぬ。少し無理だが急いだなら何んとかならぬ事もあるまい。若し間に合はねばそれまでのものと決めはした。空は晴れてゐる。吹く風も心地よい。仰ぎ見る鳥海山の頂きのみ雲に隱れてゐる朝日橋を渡り、中吉出を通り、上吉出を過ぎると道は少しく登りになる。白井新田に着いたのは七時、釜山案内の標木が立つてゐる。濶葉樹の矮木ばかりにかゝる譯だが、喬木は殆んどない。日が照りつけて熱いこと熱いこと無性に咽喉が渇く。何處かで水をと思つたが耳をすませばとて水の音は聞こえない。地圖の

上で探しても水のありそうな所は見當らない。只一ケ所、等高線六百米附近で道は谷を越してゐる。此處で得られれば得られるのだが、之とても別に川の記號は書いてないのだから、確定的のものとは云ひ得ない。而も其處まで行くには未だ一時間以上も登らぬばならぬ、足もそろそろ參つて來た。未だ漸く登りかけたばかりで此の醜態、自分ながらほとほと愛想が盡きた。こんな筈ではなかつたがとは思ふものの、事實は如何とも致し方がない。さりとて此處から引き返へす樣な事では男の意地が立たぬと空元氣は出して見たものの、苦しいことは依然として苦しい。咽喉はひりつきそうだ。唾も出ない、兎角する中登りは些さか急になつた。道は堀れて谷を作してゐる。雨の時には盛んに水が溜つてゐるらしい。小さな窪みに水が溜つてゐる。占めたとばかり早速腹這ひになつて口づけに飲まうとしたが場所は狹い。水溜りは小さい、額がつかえたり、鼻が水についたり、なか〳〵思ふ樣に飲めない。それでもどうにかこうにか咽喉は潤ほすことが出來た。九時期待の谷を登る。案外に大きな谷だ。水音をきいた時の嬉しさ、思ふ存分水を飲む。乾き切つた咽喉に冷たい谷水。之の味は登山者のみ知る快樂だ。尙登ると道は尾根を右にかこうにか巻いて行く樣に思はれる。地圖では尾根を眞ぐに登つて行く筈だがと思ひながら尙も進んで行くと、到々谷へ出て了つた。仕方がないから後へ戻る。尾根へ出て道を探して見ればどうやらそれらしいものが見付かつたが、行くとそれなくなつてしまつた。然し道は尾根を登つてゐる事は間違ひない。而も此の邊で藤井新田からの登路と出遇ふ筈だ。もう少し登れば目鼻がつくであらうと葭を押し分け押し分け登つたが其の辛いこと、小半時たつと身體はへとへとになつて了つた。ふと見ると左手に立派な道がついてゐる。何んだか狐にでもつまれたやうだ。

笙ケ岳の南面、殘雪の傍で第一回の晝飯を取る時に十一時半、風が霧を吹き拂ふと月山森の頭が見える。頂上はなかなか見えそうもない。風が寒いのでそこそこに出發する。笙ケ岳へ登れば後は樂らしい。氣持のよい草原、所々に壺沼がある。雲霧去來する神社を過ぎて扇子森へかゝる。吹浦、象潟よりの登山路を合して朗々たる道だ、霧が盛んに飛ぶ。霧が薄れて新山が見えた。赭黑色の灼岩相重つて中天に峭立し、鬼神の荒れ狂ふが如く壯絶快絶、神とは恐らくこんな氣持を云ふのであらう。扇子森を下りきるまで千蛇谷を渡る。初めて雪渓を横つ切た。嵯々たる岩石を登つて大物忌神社に參拜する。時は暖かに山頂の眺めは些の憾もなかつたは十五分。雲晴れて日も恍惚とも云ふべき言を知らぬ。左に故高山樗牛氏の言を藉りよう。

此日空降二碧、千峯霽を開き風氣秋の如し。彼の東方に當つて蒼黛畫くが如く蜿蜒として有無の中に隱見し或は長人の巨馬に跨りて馳驅するが如く、或は青蛇の雲に乘じて飛騰するが如きものは、陸前岩代の諸山なるか、連山綿々海に沿うで走り、遙かに西海の煙波に溶去するものは、越後の諸山なるか。雲耶山耶吳耶吳、海天髣髴雲水依稀の間に見ゆるものは佐渡島なり。碧上相連り恰も長鯨の漂ふが如きもの内三郡の平原を望めば宛然掌上の物を數ふるが如し。最上川逶迤として白虹草を排して走るが如く、豆阜寸落は飛島なり。俯して庄影長し、屑岳峰湖風煙一抹山川相映帶す。海岸一帶の地、白砂青松縹渺としに連綿十其の間に點綴し、翠光海を掠めて餘の如く脚下に朝し、雲間より俯して最上の原野を指摘すべし。其春遼遠微茫、筆端の模捉し

得べきに非ず。予心神恍惚として岩角にし、沈々嘘嘯するもの之を久うす。長風衣を吹いて胸襟嚴然たり。——吾弟畫を善くす。予顧みて笑ひて曰く卿何ぞ此絶景に對して一筆を揮はざるや。答へて曰く崇高の念吾心を呑む。畫施す所なきなりと。豫聞いて蕪然たり。

愈々下山の途につく。流石は表登山道だけあつて堂々たる道だが、石疊の階段で降りには餘り樂ではない。所々磐越以上の高山の標高標が立てゝある。此の様な山には面白い企だと思つた。雪渓へ出た。走り下る。滑るには少しく傾斜が緩い。雪渓の終りで第二の晝飯を取つた。目の下に河原宿の笹小屋が見えて、白衣の登山姿が十數人見える。歩き出したのは二時半また雪渓がある。斜めに横切つて河原宿へ登る。「高山植物園」を通り抜け、河原宿の笹小屋も素通りして道を急いだ。八丁坂へかゝる。急な降りだ。白衣の登山者を追ひ越し細尾根を下つて一木戸に達した。寶來山のある處だ。時計は四時に近い。前に笹小屋がある。道は小屋の中を通り抜けてゐる小屋の主が呼び止める聲を後に尚も道を急いだ。駒止を過ぎ、杉澤に着いたのは五時半である。遊佐まではあと一時間半はかゝる。熊野川に沿うて行けば一時間で行けると聞いて、川沿ひに暫らく行つては見たが度々徒渉せねばならない。靴の徒渉は考へものだ。而も下手すると間に合はぬかも知れぬ。思ひ返へして道を蕨岡に取つた宿に着いたのは七時半、何かあるらしい。町は何んとなく賑やかだ。

山岳の歌

大塚金之助

（一）山岳への憧憬（一九二四年）

ま夏日に　白ほこりする　ふもと道　はろばろしもよ
ひもじさは　いらだたしけれ　山蟻を　煙草くゆらし
わが息の　やすまりければ　行きにけり　這ひ松青き
ひそけさに　をりつゝ　山の頂（いただき）に　煙草吸はんと　思ひけるかな
振りあふぐ　空の青さに　おぼつかな　まなこに滲みる　つめたさはあり
岩の根に　身をすりよせて　をりしかば　顔をかすむる　霧のつめたさ

（二）山岳の寂寥（一九二五年）

山道は　霧のむかうに　見えしかば　こゝろのうちに　さびしみにけり

山の背の　巖（いはほ）のあさき　くぼみにも　かつ群れて咲く　千島桔梗の花

夕ぐれの　山のはざまに　身をかゞめ　見れば青しも　青だいしやうは

鉤橋を　わたりてひとり　たどり行く　すゝきの原は　暮れそめにけり

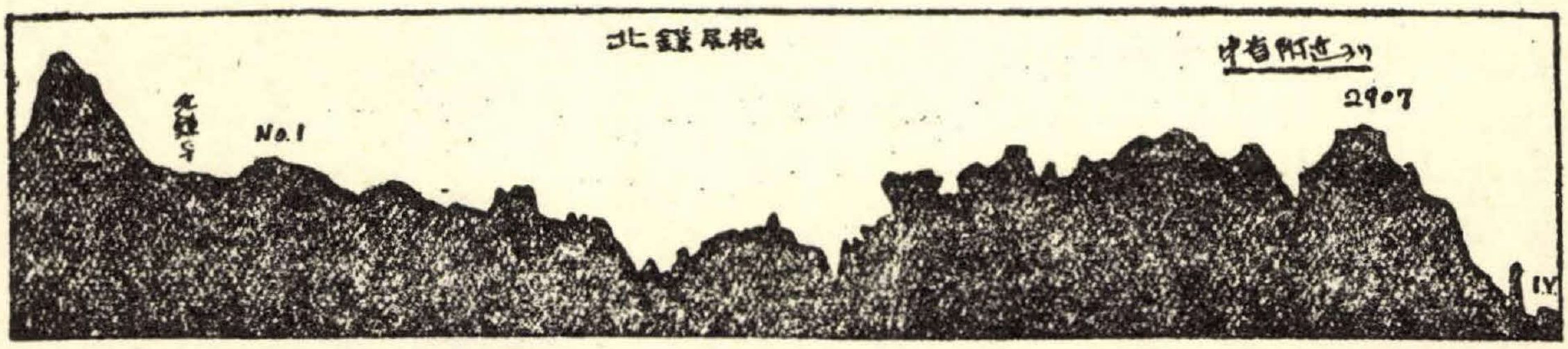
（三）山岳への道走（一九二六年）――試作

這ひ松の　なかに坐りて　戀めきし　さびしきことを　胸に問ひたる

這ひ松の　かをりひそやかに　こめてゐる　そこにひそみて　空を見てをり

足もとを　見れば駒草は　咲いてをり　うすくれなゐの　砂のなかにあはれ

懸崖（けんがい）を　くづれて落つる　砂のなかに　さびしき花を
駒草の　一輪を見いだしにけり
人間は　かくも淋しさを思ふものかな
毒澤（さくざわ）を　吹き上げてくる　雲に　かなしきまなこ　落しねる
うつむきて　考へをれば　山霧は　土に滲みつゝ　流れ寄るなり



北鎌尾根の印象

中島熙

吉澤一郎、S、T氏、N、T氏、中島熙

San guide の我々が、重いリュックを背にして大槍小屋のH氏の許に着いたのは、山へ入つてからもう四日目であつた。徳本を越すのは誰も嫌だつたので常念を乗越して槍澤に入つたが、安曇野の暑さにすつかり當てられて大助小屋に、ブヨにたかられながら一夜を明さねばならなかつた。常念では一日降り込められた。けれどもその御蔭でY氏から心からの歓待を受けた。あの晩、雲を拂ふんだとか言つて人夫衆の踊つた木曾踊りの巧さは何時までも脳裡にある。こんな序曲を先にして北鎌尾根への試みの日が來たのである。

七月二十一日

起きた時分には未だ濃紫の空に星が輝いて東の空はほの白く、今日の槍の北壁の Felsen Klimmung や北鎌への Promenade に心良い豫感を與へてゐた。その良い天氣が小屋の前からずつと槍の肩を目掛けて這上る宏大な雪田の上に躍り始めた頃、今日のザイルの友である四人は小屋を後にした。

何しろ馬鹿にいゝ天氣で新しく出來上つた肩の小屋に入つて穂高の方を見渡すと、陽も、山も、氣もすがすがしさに躍つてゐた。末は紫の一色に溶込んでゐる山々の色と、さわやかな西の風を胸一杯に吸込んで、さて靴を草鞋に取換へた。槍の北壁はそんなに凄いワントでもなし、殊に北鎌のザラ場に行つてからは靴の方がよさそうだと思はるゝ。雪氷が無いからピツケルも邪魔だと思つて持つて行かない事として、不要のものと一緒に、出來上らうとしてゐる小屋の床の下に投込んで、リュツクは各自、ザイルは三十米と十五米と各一本を持つて、無言のまゝ、小屋を出る。槍のシュピツツエは最初一般登路に依つてゆき、針金の處から眞直に上へ上つてみた四五米登ると、緩斜の一枚岩があつて頂上に向つてゐるが、餘り時間がかゝりさうなので、右手へちよいと惡い岩角についてトラバースして針金の上に出で、登路に依りて頂上へ出た。

始めからの豫定の通り神社の祠の裏側から小槍よりに千丈澤目がけて派出するちよつとしたリッヂに依りてローテを探しつゝ下る。約五米折り重なつた岩を降ると、岩角の下に四五人の坐れる程の Anchorage につく。リッヂは之より Concave を爲して千丈へ落込んでゐるから、第二のピッチは北鎌を目がけて、主峰を搦み氣味に下る。ローテは誰が見ても之と決定する。第二のアンカレーヂまで十米程であるが、終りにちよいと惡い岩があつたので手を足場として下つた。このプンクトは宏いもので次のピツチへの Belaying pin もいゝのがある。岩は堅く緊つて氣持がいゝ。第三のピツチは最初搦み氣味に進んでみたが惡かつたので返り、小さなリッヂを右にして大きな石のガラ場を千丈目がけて下る。岩は少し動く。十餘米下に良いアンカレーヂあり。ラストは降るとき岩

角にザイルを二重に掛けて下る方法を採つた。ガラは何處までも續いて千丈へ落込んでゐる。此處で暫く休む。岩の冷い角に火がためらつてゐた。

第四のピツチは、尾根の方へ槍の主峰を搦む様にして降る。此のトラバースはちよつと悪くて、小さなリッヂを越した所で、岩崩の爲か、砂土の露れがあつて足場が良くなかつた。アンカレーヂは狹くて危げな岩角であつた。第五、第六のピツチも、槍のシュピツツェで最も悪い場であつた、岩がボロ〳〵である上に、所々コンケーブがあつて殊にラストは苦められた。岩角の下の狹いプンクトでジツヘルングしてゐると、砂礫がバラ〳〵と降つた。よく求めれば少しいゝ、ローテがありさうでめる。天上澤を歸路に登つたが、あちらの方が岩が緊つてゐる様に思はれた。第六のピツチも同様の岩質で可成り悪い。Descending をした。此の頭から傾斜の度が減じて、やがて巨大な岩石の累々と重なつた廣い尾根の上に出た。その上をアンザイレンの儘降下する。二三回ちよつとした頭を越すと平な處へ出る。岩の平地で這松がへばり付いてゐる。北鎌平と呼ぶ事にする。アプザイレンして小さな羽蟲の羽音を聞きつゝ早目の晝食を取つた。八時五十五分。

此處から見た槍のフエルゼンワントは仰いだ所登れさうにも無い様に思ふ。赤黑い山膚が大刀でスパリと切斷した様に頭上に掛つてゐる。然し取つ付いてみるとそんなに物凄いものでもない。小槍は丁度裏面が見へる譯である。大槍との間に二つ鋭いシュピツツェがあつた。此處から小槍のシヤルテへのトラバースを想像してみたが行けるとは思はれなかつた。間には急な、狹いクロアールが一本挾つてゐた。一方天上澤側を高く搦んで、オストグラートに出るのも非常に難しく思はれた。岩の上へのびながら空をみてゐると、今迄とは全で變つた長閑な

心地となつた。

暫く休息の後、出發する。ちよつと降ると第一峰とのザツテルに着く。第一峰への尾根は鋭く痩せてゐて天上側は這松がへばり付いてゐるが概ね急斜で、千丈側は二三降れさうな狹いガラがあつた。千丈澤に芽生えた岳樺か何かの青さが美しく目に映じた。あゝ言ふ青さの中を一散に驅けながら底知れぬ谷間に轉げ込む時の心持が、此の頃は屢々要求される。

リツヂ通り進むと第一峰の下に着く。之は千丈側を登つて樂に頂上に立つ。シユタインマンに名刺を挾んで一休をする。

第一峰より北すること暫くで一枚岩の降り場につく。此處は一枚岩を下つて千丈側を降りると樂である。次の下りは天上側を通つた、降り場は共にザイルを使用した。はけれども此處は無くとも濟む。この邊りから岩が小さくなり、ボロ〳〵になつてきた。尾根が少し右に廻り初める頃、ちよいとした頭の降りとなるがこの降りが惡い千丈側がコンケーブして、天上側はいい。我々は下部の樣子がよく解らない爲千丈側を下つて見たが、ザツテルに下り付く所はぶらさがつて下りた。ビレイングが惡い爲にラストは可成り苦められた。之は天上側を通るべきでさうすれば容易である。

直ぐに又同樣の地形に出逢ふ。之も前と同樣にジツヘルングが不確定だつた。天上側を四五米搦み、それからリツヂ通りに下りた。下の方が矢張り惡い。ザイルにぶら下がる。降り切つた所には千丈側にガラがあつて、落下する石が物凄く反響した。天上側にガラの急斜面で直き下には雪田があつた。

その先はボロ〳〵の痩尾根で大抵の岩は動いた。暫く行つて、十一時一先づ休息した。此處は第一峰が一たん低下して、二九〇七米の峰に向つて高度を増さうとしてゐる所である。小春日の風がひら〳〵と飛んでゐた。

さいらんたる陽の下に、心地よい晝食を濟して、夢むともなく夢みてゐると、もう先進が嫌になつた。テライもせいぜい五六時間がいゝなと思ひながら、パイプの煙を眺めてゐる。『歸らうや』と誰かが云ふのをきつかけに前進中止と決めてしまふ。西鎌の方に濃い霧が湧いてきた。

十一時半、一同ぶら〳〵と歸り初める。合圖の様に一抹の霧が槍のシユビツツエにかゝつた。冷い風が千丈側から吹き付け始めた。最後の惡場の手前で、S・T氏の乘つた大きな岩が、ガラ〳〵と滑り出した。ザイルを付けてゐなかつたので驚いた。往路の惡場も歸りは何でも無かつた。氣の中を心は靜かに流れて行つた。そしてその流れが、第一峰に着いて一層深いエクスタシーの中に陷込んで行つた。その日は眞夏の最も高かな日であつた。お互の胸は極度の幸福に沈んでゐた。その幸福はどんな物を以てしても破る事の出來ない種類のものであつた。餘りの喜びが、恐怖を呼起す程であつた。一言に云ふと、我々が始終獲られないで失望してゐる幸福そのものであつた。

北鎌平で又休息する。歩いてゐる時間より休んでゐる時間の方が遙かに多かつた。霧が濃くなつて槍が見へなくなつたので、ローテを心配したが、登路はなかつた。リツチ通りに成たけよく緊つた岩を求めて上つて行つた途中一個所やゝ惡い岩壁にと逢ふ。中央の裂目に身を横へて衣物のフリクションによつて。外にいゝローテがありさうになかつた。それから暫く行くと、前面に快いチムニーのある岩壁に出た。ガラ場を上つた所であつた。

此處で登路は二分する。右を採つてもいゝ譯だが（神社の北に出る）我々は左をとりこのリッジの上に出て上つて行つた。後は簡單なクライミングが續けられ、やがて祠から東北に出てゐるリッヂの岩角の下に出て、もうすぐ上は祠である事が解つた。ザイルは最初の惡場とチムニーのある岩壁のみに使用した。

四人膝を並べてパイプに火をつける。風は大分強くなつたらしい。怒號する風の音が背の岩角に聞かれた。天上澤、鎌尾根一帶はもうすつかり霧が占めてゐた。安らかな休息であつた。先に少しの心配もないものであつた心に浮ぶものはハイマートウエツヒの甘さだけであつた。あんな頂近い所に、あの樣な安かな休息があらうとは外の人達には考へられないであらう。事實頂上で話す人々の聲が間近かに聞れた。けれどもそれは靜けさには何の邪魔でもなかつた。丁度其處は樹間に作られた小鳥の巢の樣であつた。四人は巢の中のひな、な鳥であつた。全く巢の以外に何等の屈托もなかつた。親鳥の歸りを待つ代りに、唯『かへり』への甘さに醉つてゐればよかつたのである。その外にどんな響も心に入るべき術がなかつたのである。

頂上に歸り着いたのは三時であつた。朝の生々とした氣分が、すつかり薄ら淋しさに代つてゐた。

然し暖かい心を包んで默つて小屋へ降りて行つた。

之を要するに、槍のシュピッツェは別として北鎌は鋸狀に起伏する痩せた岩石の山稜が長く走つてゐるので、前穗高から北へかけての山稜を少し細くした感じである。第一峰の北が惡い。小さくまとまつてはゐるが、スケールは小さい。クレッテライと言ふ事を離れて、千丈、天上、兩澤を見下しつゝ、呑氣に步く所に他に求められぬ

變つた味がある。

しかし槍のスピッツは實に立派である。フェルゼンワントが宏大で、岩も緊り、千丈、のクレッテライの壯快は、附近屈指のゲレンデである。祠を中心としてフェルゼングラーる譯であるが、此等のグラートは各種の形式と質との岩を持つてゐる。オストグラードの非常に面白いと思ふ。

又小槍と大槍とを連らぬる線も、可成り惡るさうだが出來さうである。間に二個程シュビツツェがある樣だが之を加へるとなる程實のあるものとならう。肩の小屋も出來たし便利な一日のアルバイトとしては荷が過ぎる。その爲か內に喰込むものは尾根のワンデルングより遙譯である。依る登攀の動作は極めて緩かである。

に大きい。

前穂高の北尾根に就いて

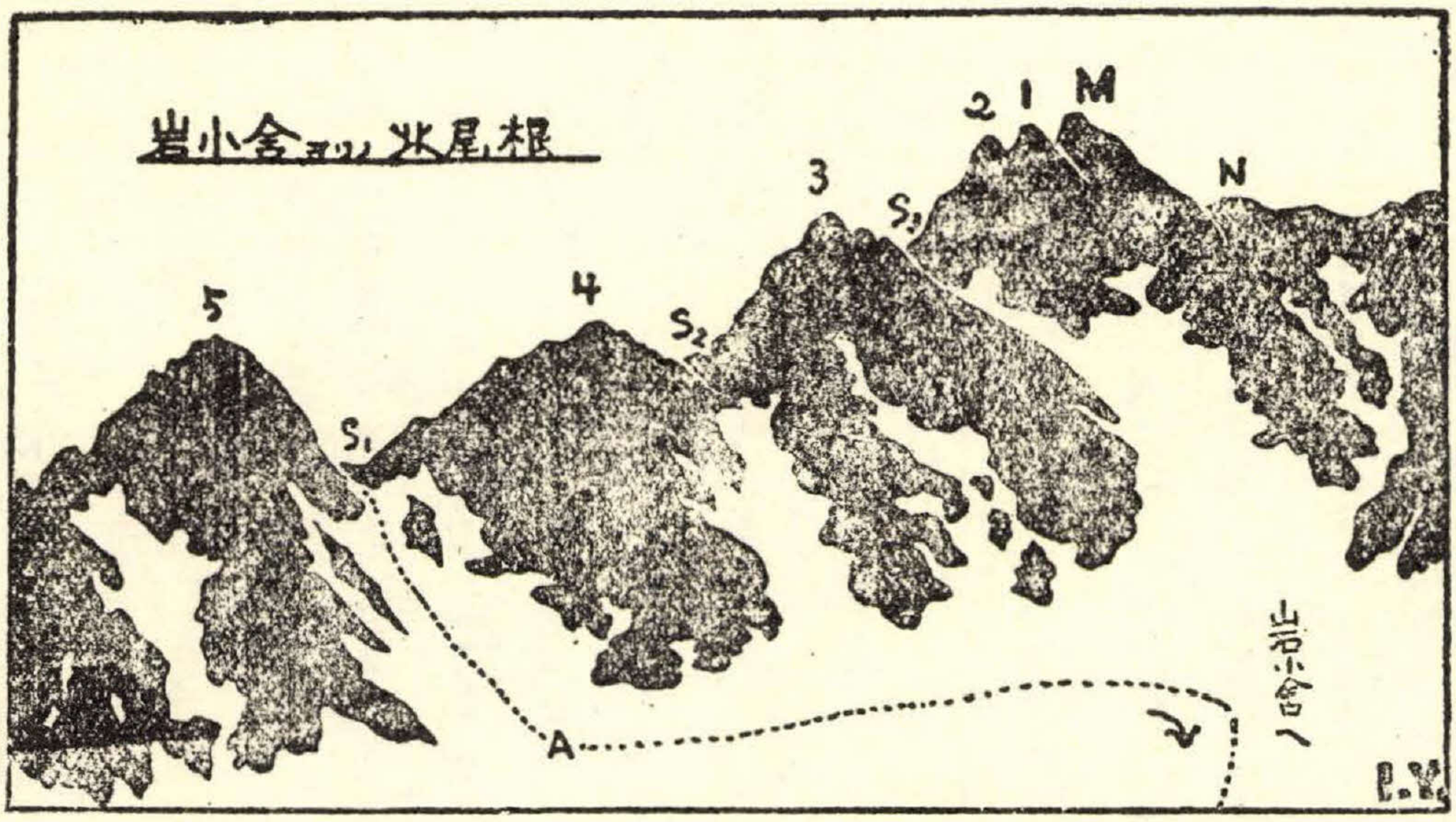
吉澤一郎

岩登りは確かにアルピニズムの一形式である。之に對して嘲笑的言辭を投げたり、打算的批判を加へる如き人々は登山の何たるかを知らぬのみか山岳それ自身のレーゾンデートルをも解せぬものであらう。

年々山は開けて行く。愛山家にとつて不要の勞力、或ひは危險の減少はいい事に違ない。長高の縱走路に完全な道をつけるといふ事を發表したのを、殺生小屋の主人が隱れたる登山家の野縣の營林所で穗に向つて極力反對意見を述べた時、岡野氏の爲に逆ねじを食はされ事は痛快な話である。穗高先輩たる岡野某氏度いとは何たる事ぞ、山を獨占する事之より甚しきはない。……憤慨は之位にして北尾根だけはとつて置きに就いて述べる。

北尾根は慶大山岳部の人々、尙其の前に登つた人もあつて、よく知られてゐる岩尾根である。故に自分は何も其の位置等に關しては書かないが岩小屋に至る道が完全に開かれた事を簡單に示さう。

梓川を上下する人々が、一ノ俣小屋の南方三十分位の所に大きな石に「奥穗高登山入口」といふ意味の事が書かれてあるのを見る。其の通り新道は此處から二本の丸木橋により、梓川を渡り橫尾谷へ導かれてゐるのだ。三尺巾の立派なもの。道標より約廿分で徑に沿つて右側にい〻岩小屋がある。涸澤の岩小屋と區別する爲に橫尾谷の岩小屋とでも稱して置いたらい〻だらう。一寸氣分の出るい〻所だ。水はすぐ前に橫尾谷が流れてゐるし、又



屏風岩の一面も見上げる事が出來る。これから徑は尙左岸について居るが、本谷と涸澤谷と分れる點の少し手前で屏風岩の方へ渡る樣になる。自分等は雪崩のデブリの上を步いたが雪の少ない時には多分橋があるのであらう。涸澤に入つて行くのに從つて懷しい奥穗高の姿が眼にうつる。徑は前穗高と屏風岩とを結ぶ尾根の最低部から約百五十米突下まであつた。これから上は雪の段を二つ越えると北穗根の姿が段々全體的にあらはれて來て、北穗と奥穗との鞍部からの雪溪になつてしまふ。北尾高と涸澤岳との鞍部からの雪溪の下にある特徵ある岩塊を發見するそれが勿論岩小屋であるのだ。

岩小屋から見た前穗高の北尾根の寫眞を深く頭に入れて置けば容易に發見し得ると思ふ。感想に付いては一緒に行つた詩人中島氏が書く事と思ふ。岩小屋滯在中は四高の人が三人居たきりで極めて靜かに充分穗高の氣分を味ふ事が出來た。四高の人達は全くポライトである。大學の山岳部の連中の樣に排他的でなかつた事が一番良かつた。

插入のスケツチは岩小屋の屋根から撮つた寫眞を基礎として書い



北鎌平より北鎌 No.1 及び 2907 の峯　　（吉　澤　一　郎）

たものである。今までの記錄に依れば第五ピークから前穗高の一等三角點まで普通六時間を要してゐるので自分等は午前六時に岩小屋を出る事にした。天氣の方は良くもなし、惡くもなしと云つた具合高層雲なので周圍の山々はよく見えた。輕い心臟の鼓動を感じながら岩小屋を出て、奥穗高と前穗高にかこまれた大雪渓を一周する。リュックサックの中はカメラと食料だけ、ザイルは輕く肩にかゝる。第五ピークと第四ピークとの間に食ひ込んでゐる雪渓の基部(A)までに三十分を要した。シュタイグアイゼンは萬一の場合に持つて來たが遂に使ふ樣な所は無かつた。S_1に達しやうとする附近は雪渓も可なり急なものとなる。鞍部に出てから、カメラのみを持つて北へ第五ピークの登りにかゝる。途中は殆ど這松のみであるが頂上は岩石の露出した所で、眺望も實にいゝ。槍と太天井岳の間に後立山々脈の尤物が縱に並ぶ。南アルプス、八ケ岳、立科山、さては夏澤峠の左方立科との間に顔を出す秩父の一角、北穗高もこゝで見ると三峰に分れてゐる事がわかる。

北穗高と涸澤岳の鞍部へ向つて小さな人影が三つ、岩小屋の同居人たる四高の人達だ。今日は北穗高へ向ふ事にしたのは七時四十分、十分間でS_1に達行くと云つてゐた。一通り周圍の展望を終り、いよ〳〵前穗高へ向つて緊張の第一歩は第四ピークに向つし、中島氏も結束して運び出された。第五峰より見れば第三第四は重なり合ひ、前穗高の頂上は見る事が出來ない。S_1より第四峰までは約四十分、途中梓川面を通る所があるが主として山稜を行く。アンザイレンは不必要。第四峰より梓川に向つて急峻な岩の尾根が降つてゐる。

S_2へは容易に達し、多少すごく見えた第三峰への登りとなり互ひにアンザイレンする。何しろ一人きりである から仕事が早い。約五十分で一寸オーバーハングした所にぶつかつた。こゝで自分は中島氏の肩を借り、難無く

でもないが、兎に角切り抜ける事が出來た。第三峰から見た第二峰の登りは可なりなものだ。北面を見たよりもすごいと思ふ。ザラ場を降つてS₃に達する。去年友人なる城南山岳會の長谷川氏と田中氏が案内を連れて此處まで來、霧の爲に淵澤面を降つたといふが前穗高の北尾根も此の第二峰の登りを除いてしまつては興味が半減されてしまふ。いざ登らうとする時、奥穗高から北穗高にかけて氣味の惡い霧がそろ〳〵湧いて來て忽ちそれ等周圍の眺めを閉塞してしまつた。が幸ひな事には自分等の目的先は免れてゐる。

S₃より三十分ばかりで可なりなチムニーにぶつかる。これは其のまゝくゞつてしまひ、少し登つてからまつすぐにあがらうとし、中島氏の兩肩を借りてやつて見たが、其の上が又可なりなオーバーハングなので二人も安心。數分にして第一峰に達した。此の間はやはり山稜を行けばいゝ。第一峰より直ちに前穗高(M)との鞍部へ降らうとした時、ふと下を見ると鞍部が見えない。そこで二人は淵澤面に降り搦んで鞍部に達しやうとしたが一寸惡くてへツれない。先のオーバーハングと思つた所を見上げると餘り大した所ではないとい事がわかり、再び山稜に出で注意して鞍部に達した。かくして前穗高へは梓川を搦んでたやすく一等三角點の櫓に出る事が出來た。第五峰よりこゝまで休みを入れて約四時間、普通より二時間早いのは人數の爲である。

此の時既に前穗高は濃霧の中であつた。飯をゆつくり食つて中島氏がまだ奥穗高を知らぬ爲、時間も早いので縱走路を行き淵澤岳と奥穗の鞍部から岩小屋へ歸へる事にした。奥穗高の頂上で少し見當違ひをしたがやがて今田兄弟のやつてる穗高小屋に至り、茶を呑んで又休む。

尾根を一つ越えた所から岩小屋までのグリセードは實に愉快であつた。岩小屋へ着いてからゆつくりパイプをくはえて北尾根を見ると今はさ程の威力を示さず。あのゴツい段階的の一つ一つのピークが皆異つた親しみを感じさせるものゝ如くである。前穂高の頂上には今しも雲霧がかゝつて來た。

・注意・　スケッチの中でNは奥穂高へ行かずに岩小屋へ直接降る所、Rは岩小屋に至る。直接降る時手頃と思ふ邊まで岩をつたはり、後はグリセードすれば面白いと思ふ。

始めて山に登りて

後藤十郎

此夏、學生に連れられて、流行を追ふ譯ではありませぬが、日本アルプスへ始めて登つて見ました。そしてスッカリ山好きになつてしまひました。私は軍籍に身を入れて以來二十年計りになりますが、其大部分は兵種の關係(私は歩兵)で、單に水平的に遠く歩むことは、人後に落ちない様な氣がします。けれど山と云へば兵隊を連れて八甲田山や岩木山に登つた位で、垂直的の行軍をして所謂登山氣分を味ふ機會がなかつたので是非登りたい、又一方軍隊生活の三分一は體育の事に從事して居つたので比較的數多くのスポーツを噛つて見ました（勿論手に入つたものは一つもありませぬ）が、どうもスポーツとしての登山の經驗を得る折がなかつたので、是非やつて見たいとは豫てからの願ひでした。そしてやるならば學生と行を共にしたい。夫れは學生を赤裸々に了解するには、スポーツを通してするのが一番だとは私の持論でしたからです。

處が此夏の休暇に、一橋會の山岳部の登山計畫が發表されたので、豫科三の高橋要二君に御頼みして近藤君の班に入れて戴きました。

始めてリツクサツクを背にして出發する時は、勇しい様な、不安な様な、丁度始めて軍隊に入る時の様な、感に打たれたが、リーダーからいろ〳〵聞かされたり、本一の〇〇君（同君は失禮ですが豫科三の時餘り頑強な身體

の持主でないようでした）が同行するので稍安心して山途に入つたのでした。近藤君の班は同君は豫科で山の人として知つて居たのと、其コースアルプスの代表的な山が多く、然も日數が初歩者には最もおあつらい向きだと云ふ高橋君の説明の結果ですから、私は軍隊での經驗と比較山や宿舍での實際や感想等は山岳部の各位は御承知ですから、したいと思ひます。

一　地圖の讀み方は充分經驗がある積りでしたが、垂直的行動が是れ迄少かつたので水平曲線の密な、換言すれば急斜面の讀み方に甚だ不慣れであつたことを、深く感じさせられた。いくらかつても二時間とは要しないと思ふ様な處が半日行程であつたり、三十分位で通過し得ると思ふ處が二時間を要したりするのが此度の體驗で始めて了解することが出來て、軍事上から見ても尊い經驗であつたと思ふので、其後軍職にあるものは一度は體驗すべきであると、機會あるごとに勸めて居ります。

一　燕の頂上に著いた時は、コレハ〳〵何とも云へぬ!!で盡きて居ります。下手な形容などすれば山に對して流石はリーダーは此點は頗る明いので計畫もステキに適切でした。

一　槍の殺生小屋に著いた時、特に槍の東尾根を登りつめたあたりは、大部疲れた方が多い様でした。私は此時迄此半老體と未經驗とでは、必ず青年學生の御手助を受けねばならぬか、と秘に心配して居つたのでしたが、案外水平行軍で練つた身體が御役にたつたと思ひました。未だ餘り疲憊しても居らなかつたし、

却て元氣を付ける位の體力と氣力が未だあつた様でしたから、然し若い時にくらべて呼吸の切迫するあたりは爭はれないなあと思はざるを得なかつた。

一

今度の登山で嘗て練習したスキー術が頗る役に立つたのを感じました。冬の登山は勿論であらうがそんな場合でない時でも、急斜面を横行する時等は、極めて有効にスキーの原則(大げさですが)應用される様な氣がしました。特に、登山には雪渓が附きものですし、是れのない山は氣分の上に、著しく低下する位で もあり、一面危險なのも雪渓の踏破の様ですから、スキー術の應用は誠に適切に役立せられます。スキー術も何もクリスチヤニヤとか、テレマークとかの技術に達しないとしても、スキーで急斜面の登降を少しやつた丈でも、どれ丈、効果があるかと思ふたのです。

赤岩から、槍の東尾根に下る時に一寸としたスロープがあつて、十分もかゝれば樂に下られる處でしたが、三十分以上もかゝり、又我々の前驅をつとめた形で歩いた某校の學生は、此處で墜落して危險な目にあつたのを目擊しましたが、スキーの一寸した心得があれば、あのスロープ等は初歩者でも、實に容易に通過し得たと思ひます(尤も落ちた學生は餘りに樂に降り過ぎたのかも知れぬが)。

槍の大雪渓を下る際にも、痛切に感ぜしめられました。

一

平素養成した懸垂力(腕の力)が大變役に立つた様です。一寸した斷崖の通過(ロープを用ゆる時は尙一層然るべしと想像します)でも、腕で身體を引上げる力があるとないとでは、非常な差が生ずる様です。燒岳の急斜面で五尺位の高さの崖の通過に、多くの危險の感と時間を要したことから、つく〴〵そう思ひま

した。

一　吾々初學者は携帯品の選擇が矢張り拙い、是れはないじやないかと云ふ様な老人らたくなつて皮肉を申す様で甚だすみませぬが、ぜいなりながら考へて居つた。軍隊の携帯口糧や背嚢の内容品と同じく、最少限度の品を數多く背にして、體力が是れに伴よい事でしたのに、山岳部の御注意も此點にあつた様でしたが。

一　軍隊では長い行軍をするときには、特に出發當時の歩度に注意して概して急ぎませぬ登山の時は此注意が大に必要な様に思はれました。初年兵等は初めはピン〳〵して

一　我々は朝出發すると、約三十分位で一寸休憩する居るのを見ます。

したり、衣服や装具の不適な處を正し、殊に背嚢（リックサツク）の重さを平均したり、用便したりする要です。此時迄に感じた、不具合を其まゝにして行軍すれば途中必ず其報ひが來ます。

が生じ、是れが追ひ付く迄に急いで早く疲勞する等の故障が必ず來るのです。團體で

疲勞を避けて團體的の行動をする爲めに、御參考になりはしませぬでしようか。

一　行軍で一里を行軍するのが普通です。一里は（旅次行軍）五十分歩いて十分休み一時間して或程度の疲勞は一寸した休憩で恢復しますが、其程度を越へた疲勞は、比較的多くの休憩でなければ恢復しませぬ。駈歩行軍（激烈なる永續運動）等では休憩時間を纏めて一度にするよりも、同一時間を數回

に區分して休んだ方が、最後の體力が旺盛であるとしてあります。
登山も激烈なる永續運動ですから、一つの參考にはなりはしまいか等と、苦しい時
に御願して時々實行して頂きました。
經驗ある各位の御教示を承りたいと思ひます。
山を歩いて居る際時々こんな事をトギレ〳〵に考へさせられました。それは登山
いなものだ、自己の力外に賴むべき何ものもない。一方に於て眞劍な自然界との
之れに勝てば、言語に絶する愉快がある。此の眞劍さと、此愉快さとは、是非世
味はしむべきものだ。各の體力に應じて、各の程度の山を選んで。
神は斯くさすべく吾人に、此の高い嶮しい山を作つたのではないか、などと。
たのは、自然界に對して非常な罪でも犯した様なものだ。こんな處が此世の中に
迄訪ねなかつたのは、何んと云ふ怠惰な人間であつたのだらうと、槍から降りて
ら、しきりにこんな考へが浮びました。
こんな尊い經驗を與へて呉れた山岳部、特にリーダー並に同行の諸士に今更御
そして又連れて行つて頂きたい、まだ獨り歩きは出來ませんから。



五月の室堂附近　　（吉澤一郎）

晩春の劔岳と針ノ木越え

吉澤一郎

五月のアルプスはアーノールド、ラン氏の特筆するものてある。五月になると高峯の雪はすつかり落付いて來て春の雪の様に變化がなくなつて一様に稍硬い緻密な質となる。

落ちる可き雪は崖からすつかり落ちきつてしまつて雪崩の危險が殆どなくなる。喬木帶の雪は其の上を歩いても最早甚だしく、陷ち込む事なく秀峯の雪はもう固く氷つてゐない。此の狀態は日本アルプスに於いても同樣である。否其の他の高山にあつても内地では始ど同じ事であらう。

スキーの滑走は自由であり、靴のまゝでも歩けるし、氣温がもう大分高くたつてゐるから野營等も實に樂である。

五月頃の立山は實に氣持ちの良いスキー場 Gelände である……田中薫先生著「登山」より。

南富山驛　自分は法政大學の田中菅雄氏と二人きり時候外れの登山を行ふべくこの貧しい驛に小雨降る中を發車の時間を待つて居た。都では春を歌ふ今でも山の國の町では未だ薄ら寒い氣候である。發車間際に富山日報の新聞記者につかまつてしまつた。

汽車はガタリゴトリと動き出す。最早新川郡もこの邊は田植時で皆忙し相に見えた。村の乙女達が何かの民謠を歌ひ乍らしとゞ降るこの雨の中でこうして働くのを見れば全く涙が出る。雪の山々の崇嚴も何もない。

行手の山々は怪雲につゝまれて美しかるべき白銀の峰々を望む事は出來ない。千垣驛に着いたが誰も迎へに來てゐない。仕方無しに千垣驛止にして置いたシュラーフザックを二人で持つて芦峅へ向ふ。例の靜氏の家に行つたが主人は藤橋へ行つてるのであつた。やがて光次郎がやつて來て萬事打合せ、も一人雇之助を連れて行く事にして荷物は萬事任せ、二人は身體だけでドシヤ降りの中を藤橋ホテルへ赴く。常願寺川の水は物凄きものであつた。ゴトン〳〵と河床をころがる石の音が聞える。菅雄氏曰く大きな石はだん〳〵川上へ登るとの事。ホテルには佐伯靜氏が大部よつて居た。あの植林を要する頭を自ら人の手をとつてなぐらせる所なんかなかなか振るつてゐる。

芦峅寺の人夫組合の女將は感じの悪い奴であつた。

●弘法茶屋へ●

この日はあまり芳しい天氣ではなかつたが雨の降り相な氣配もないので出かける事にした。雪は途中にも少しはあつたが、ブナ小屋過ぎてからは完全に平になつて來た。

この平より右方に藥師が樹間に特徴ある岩井谷の頭を光らせてゐる。桑谷の茶屋は雪の爲か見えぬ谷の右側の急斜面を笹につかまり乍ら登るとあとは弘法茶屋まで殆んど平な樣な斜面であつた。

弘法へ着いたのは正午少し過ぎではあつたが行手は一面にガスに包まれてしまつたので斷念して今日は半日を此の邊で遊ぶ事に一決する。こうなると呑氣だ、晝飯もそこ〳〵にして今まで引づつて來たスキーを着けてすぐ

四の急斜面に行つて見た。はじめは直滑降には氣が向かなかつたが二三度やる内に慣れて來てドシドシ尻マークをやる。大日の尾根が右の方へ續いてゐて、それが彌陀原に隱れ樣とする所で別山らしいものが雲の間に黑く隱顯する。平凡なるべき鍬崎山が雪のお影か馬鹿に立派に見える。

平の小屋からやつて來て今歸へる所であるとの事、平には日電の人がゐる事や熊の肉がある事なんぞを話たり、中の谷の瀧の上は雪崩が起り相だから通れない事等をポツリポツリ語つてやがて御客樣御大事にと彌陀原の樹林に姿を消して行つた。

少し平な所は雪が軟かい爲スキーが一寸も出ないので癪に觸る。四時頃夕飯を濟ませ、六時再びスキーをつけてプロムナードをしやうと滑り出したのはいゝが、その儘ステーンと仰向けにひつくり返つてしまつた。晝間の軟雪の積りでゐたのが失敗のもとなのだ。此の時はもう一面にフイルムクラストになつてゐてどんな平な所でも自由に滑る事が出來る。まづ薄い氷の上を滑つてると思へば間違ひはない。「山とスキー」に大島氏の紀行があれによると、三時頃からこのクラストになるとあつた。五月もはじめと終りとでは三時間違ふ事を發見するこれは室堂に於いても同じであつた。

・室　堂　へ・

實に坦々たる平原である。スキーは相變はらず後からついて來る。擔ぐより何パーセン勞力が除かれるかは不

明だが、トレナージュも少し行くと餘り樂なものではない様だ。追分小屋は雪の上に屋根だけ出してゐた。小松坂から國見岳（二、六二一米突）への尾根の北面の斜面即ち天狗ビラは實に美しい。總じて五所は箒ではいた様になつてゐるので、自分等はこれに箒雪といふ名稱を與へた。難しい外國語より此の方が解りが早いと思ふ。外國語は其れ自身價値あるものであるは勿論であるが。正午前室堂へついたのだ。ゐるのだ。秩父の宮は測候所の方へ泊られた相で毎日人夫はふろをわかす爲にミクリケ池まで水とりに往復したとの事。アンテナの支柱が無慘にも雪の爲か曲つてしまつて居た。もう立山へもラジオが來て今まで天氣が惡く鏡石あたりで大日の尾根に三人の人が動くのを見た。人夫の話では慶應の人と兼次郎だ相し冬季と異つて空氣て劍もやめて歸へるのだらうと云つてゐた。室堂の中は眞暗で五分間位は何も見えない。然の流通のいゝ事だけは安心である。

雄山へ行つて見やうと思つたが又ガスの爲に中止、然し晝飯後田中氏と共に淨土の肩までるステムボーゲンと直滑降を味つた。夕方には例によりフイルムクラストで五月のアルペンスキーで行き痛快な事が出來た。三月あたりに來て此の雄大な外國のアルプスにでもあり相な斜面で紛雪を飛ばして滑つたらなあとつくづく思ふ。淨土の肩へ二三度往復してから雄山の西面を上り、頂上より約三百突米下から又ボーゲンをやる小屋へ入つたのは七時も既に過ぎてゐた。明日の劍行きを樂しみに早く寢やうと二人は同じ袋にもぐり込む。毛皮の爲か少しも寒さを感じない。日暮るゝ頃シン〳〵と雪が降つて來た。

三四時間はそれでも寢る事が出來たらうか。フト薪の音に眼が覺めた。田中氏は爐傍で丸かしてゐる。龍さんは相變はらずキヨトンとした顏でもう飯の仕度をしてゐる。光次郎はまだテントにくるまつて寢てゐる樣子。時計を見ると二時だつた。

「龍さん外はどうだい。天氣具合は？」

「まつくら（霧の深い事）ですよ」

と云ひ乍ら煙管をたゝいてゐる。

やつぱりさうかと少し落膽したがまだ夜明けには間があるんだから心配するのもつまらないと思つて飯の出來るまでと再び袋にもぐり込む。

飯と味噌汁の出來あがつたのは四時だつた。眞暗な筈の外からは薄明りがさして來てゐる。四人は爐をかこんで朝めしをとり、間食の砂糖餅をやく。

室堂の地下室の樣な穴から雪の梯子を登つて平へ出て見ると、モルゲンロートにはまだ少し早かつたがすぐ前の雄山、別山の尾根はスカイラインを明瞭に空に劃してゐるし、大日岳の尾根はクツキリと彌陀ケ原に浮んで居た。そして夕べ降つた新雪？は約二寸ばかりではあつたが一面に四邊を美化してゐる。

……占めた……今日も亦天氣に惠まれた樣だ。未だ見ぬ雪の劔もいよ〳〵今日自分のものとなるのだ

四時四十五分遂に室堂を出た。光次郎、田中氏、僕、龍之助の順だ。此の日スキーを用ひなかつたのは今でも殘念に思つてゐる。

すぐ下の淨土川へ最初のグリセードをして一氣に滑つてしまふ。さすが光次郎は旨いものだ。暫く淨土川の右岸らしい斜面の方を平地行進、やがて雷鳥澤にかゝりかけて稍々登つてシュタイグアイゼンをつける。

平年より二月も遲れたといふ雪の上に新雪の二寸は總てを淨化し盡してゐる。雷鳥澤はアイゼンのツアツケは一歩一歩確實に雪に喰ひ込む。左手の尾根を越えて大日がまづモルゲンロー雪であつた。そして岩は黑い。それに何とも形容の出來ぬ早朝の光が大日のシュネーカツペを包んだのだトに輝き出した。

雪は眞白である。

處女の如きその柔き線と肌地……

心持ち汗ばむを感じながら大日との同高線あたりへ藥師がのぞいてゐた。室堂附近は未だ曉の夢より覺めず、龍王、淨土、藥師の頭は既に紅見岳との鞍部に大きなやがてあくまで黑き槍の突峰が出て來た。もう別山乘越も間近いのだ。右へ右へとアイゼンを運ぶ内這松地帶となり、其の上をどし〳〵登るともう別山乘越となつたのである。

まづ感激の眼底にやきついたものは北に鎭座する大劍岳の全容であつのた。威嚇そのものゝ如き劍の岩壁も今は雪の衣もて一層の莊嚴美、男性美を加へてゐる。

驚いた事は別山乘越は六月といふに氣持ちのいゝ、紛雪?である事だつた。劍澤はさすが偉大である。

六時十分いよ〳〵雪の急斜面を降り左へ左へと搦む。

小憩の後二、五八〇米突の鞍部に立つたのは丁度七時である。

ルバイトは始まるのだ。

西側は風の爲に吹飛ばされて雪のない這松地帯を有する一峰を越えると眼前は壁の如く立つてゐる鶴ケ御前の急斜面である。冬季劍岳登攀者の苦しみ惱む所は卽ち此處であらう。普通南の二、七六六米突の峰を西御稜とか鶴ケ御前と云つてるが光次郎は前述の如く此の急斜面の頭の記號の入つてる所であらう。急斜面は一面に固い氷に被はれてゐた。サイルも持つては來たがそこまでも可なり時間を要した。光次郎は先頭でステップを切つてゐる。ザラ〳〵と氷の大小破片が滑り落ちて來る。一枚別山の尾根を寫眞にぶつかつてもろに痛い。段々と高距は增し撮つたが其の時なぞは隨分苦心してやつたものだ。滑り落ちれば命の方はあきらめなければならない事必然であるから。八時廿分漸く急斜面も過ぎて鶴ケ御前の頭に達する事を得た。平藏の頭にはまだ可なりある。そして劍澤を歩く場合でも亦少しはづれて劍澤を歩るく時は勿論、未だグルンドラヴィネを起す可能性あるものを多々見るので必要がある。一つシュネーブリュヴィネを起すと絶對に出來ない。脹物にさはる樣に歩るくそれから劍頂上との鞍部へ馳け降記憶してゐる。平藏の頭は九時十分に達してゐる。平藏の休憩をとる。平藏の頭に寄りかゝつてゐる雪塊もやがては劍澤へ向つて凄じいラヴィネを起す

事だらう。

所々雪に被はれた約十五米突のクレッテライを終つた所で今度はトラバースである。この雪を踏んだのは正に十時であつた。かくして劍の頂上の大觀、それは今更喋々を要しない位であらう。ない印象は大窓への脊稜と八ツ峰の岩稜にからむ雪と岩眼近かにある黒部川上の雲海の上に連々する後立山々脈の起伏もすばらしい一つの大觀であに岩に狹つて誰が置いたかまだ新しい寒暖計と名詞入れがあつた。

雲海はどん〳〵劍澤の頂をも包んでしまふのであらう。に手早に記念撮影を爲し、執着の念を頂に殘して四人は再び結束なし平藏谷目がけて一散に降つた。も少し時期がのグリセードはベルグシュルンドの遲れゝば劍頂の僅か南よりするこ出來ないであらう。龜之助の元氣な事は一番であつた。まるで小學校の子供が校庭でたはむ急雪溪を降つて行く。光次郎は先頭であつたが殆ど劍澤に合せんとする所で右に捲くべきを逸散に劍澤の底にかけ降りてしまつた。成程よく見ると何か黒いものが横はつてゐる樣だ。そこへ行つて見た。可なり大きな斧であつた雪崩と共に落ちた岩塊の爲めに頭の邊をうたれて倒れたものらしい。

毛皮が欲しいかつたと見えてすつかり腐敗してゐる。光次郎は角だけとつて嬉しがつてゐた。

此の頃田中氏は腹の虫にストライキを起されたと見えて大部へばつて來た様であつた。自分は小屋まで我張らうとしたが、遂に這松の露出したい〳〵具合に陽があたり持つて來いの晝寢場所では小屋の少し下の所で晝飯をとる事にしてしまつた。今はやの西のヒラを登つて行くのだ。いつか劍澤小屋も右下に見過して一時五十分別山乘越に着いた。頂も雲の中に隱見する。そしてこゝにも寒い風がを先へ室堂へ歸へし、自分は田中氏の來るのを待つべく這松の中へもぐり込んで風をよけバツトを吹き出した。

田中氏と龜之助の來た時にはもう室堂方面はガ今度は雷鳥澤でスの爲何も見えなかつた。光次郎の足跡を注意して降つて行くい。ましてや自分達にとつては光次郎の足跡が唯なくその東隣りの澤を降つてゐる。立山でこの濃霧におそはれると相當な案内者でも迷ふらしつて行く。淨土川へ降りきつた頃自分も相當へばが、光次郎に賴んで置いたシルコを力として元氣ピン〳〵跳ねて降懷しい室堂が眼前にあらはれて來て四人は再び眞を出し、雪より外に何も見えないガスの中を辿つて行く。

寢ても覺めても忘れる事の出來なかつた雪の劍暗な地下室の爐傍にくつろぐ事が出來た。

今は心ゆくまで岳もこれで終つたのであつた。

を達し得た喜びは自分一人では無かつたであらう。此の日も天氣恢復の後淨土の肩へプロムナーそして今夜の夢は針ノ木の峠を漂浪ふ事であらうド、を行つて來た。

• 雄山澤の滑降と平ノ小屋 •

劍岳に成功をさせて呉れた室堂を後に一ノ越指してスキーを運んだ。龜之助はこゝかにした。ゲルの方の關係もあつたが最早平小屋へ一泊すれば大町へ出られるし防寒具も彼に持たして今までの賃銀を拂ひ惜しき別れをつげた。

室堂から一ノ越までは實に氣持ちのいゝ斜面である。約三十分の後一ノ越に着けば鳥望は實に偉大なものである。雪尚多きこの高連山脈は黒部の流れを狹んで雄大なる。立雄山澤はベツトリと雪に埋つて未だ冬の呼吸をしてゐる樣でスキーを置いて尾根を東北に登る。夏季と殆ど同じ調子であつた。陽あたりのいゝ爲か通路には少しも雪が殘つてない。

昨日其の頂を極めた劍も今は浮雲をまとつて懷しげにうち微笑む。室堂はと瞰ると、チヨコナンとかしこまつてゐる。約廿分間の展望後頂を辭して再び一ノ越に向つて降りを味つた。誠に五月の雪はグリセードの爲に存在してゐると云つても過言ではないであらう。

彌陀ケ原に最後の別れを告げて一氣に雄山澤に向つて滑り降る。雄大なるステムボーゲン、振り返へれば友も亦滿面に痛快なる笑みを浮べてボーゲンを描いて來る。端から端があまり長いので二三回もやれば忽ち足許に疲勞を感じて來る。仰げば一ノ越はいつか小さくなつてそこにはあくまで青き大空が雪との堺を共にしてゐる。

光次郎はスキーを持たないが生れつきの元氣に任せてまつすぐにグリセードをやつて來る。へつてか喜々としてスキーは肩にかけて約三百米突登つて中ノ風を切つてゐるのだ。

やがて雪質が悪くなつて傾斜もゆるくなると自分等は地圖の御山谷とある谷の字なりに曲つてゐるのだ。

此處で御山澤はく●スキーは肩にかけて約三百米突登つて中ノ尾根の鞍部に出た。弘法茶屋であつた數藏右衛門の忠告に從ひ、こゝより中ノ谷へは降らず多量の爲大した藪潜りの苦しさもなく忽ち黒部川を脚下に瞰下ろす突端の下である。よく見ると平ノ小屋は見えないが新しい日電の小屋が左岸に行儀よく明い感じを與へて呉れた。

一先づこゝで腹をつくり、尾根を降る事が出來てゐるのであつた出したそこまではいゝのだが光次郎の身體がいつまで經つても現はれて來ない。其の内に帽子だけが猛烈な勢で轉つて行くではないか。奇怪至極な事もあるものだ。田中氏と自分は思はず顔を見合せて「オーイ光次郎」と叫んで見た。と暫くたつてチヨツコリ十間ばかり下の雪の中から顔を出して「アハヽヽヽヽ」と笑ひ乍らこつちを見上げてゐる。クレヴスとまでは行かぬ程度の雪溪の切目に不動の姿勢で落ち込んだのであつた。上で見てゐると徐ろに肩のスキーをはづして帽子の方は見向きもせずにそこから出てストツクをグツと雪溪につきさし、自分に降りて來る樣にして合圖してゐる。全く急な雪溪なのである。滑り損へば五百米突を一氣に黒部の流れに飛び込んでしまふ事確實である所。自分はすぐ下の岳樺を眼あてに沈重に滑り降つた。がどうしたはづみかアイゼンを

つけた足をさらはれてしまひストツクの梶も働かす事も出來ずにそのま、仰向けに滑り出してしまつた。

しまつたと思つたがもう遲かつた。

ドサンと落ちた所は光次郎の落ちたクレヴスのや、左方であつて、多少小さかつた爲、こゝで一回轉して又滑り落ちやうとした時光次郎はあはて、自分の下方へストツクを突きさしたのでそこへドシンとぶつかつた。餘り激しかつたので、光も一緒に滑り出し相であつたが危氣一髪の所で僅かに命だけは助かつた。光次郎の言ひ草がい、。

「俺が落ちる位だからお客樣もむろん落ちるだらうと思つて待つてゐた」と……確かに落ちたのだから仕方がない。

まだ落下組が一人殘つてゐるのだといふ事をふと思ひ出して見上げると、田中氏は妙な顏をしてこつちを瞰おろしてゐる所だ。彼が同じくダルマをしなければ自分の男がさがるんだから落ちます樣にと內心八百萬の神に祈つてゐたが先生、一歩々々ストツクを突さしては足場をつくつて降りて來たので到々面白い活劇も見る事が出來なかつたのは今以つて殘念である。

時計を落しはしなかつたかと思ひ手探りにポケツト內を捜索するとちやんと鎭座ましましてゐる。一通り身づまいをなほして安全な場所へ移つて落ちた田中氏はあきれて物が云へないといふ樣な顏をしてゐた見當を探してゐたが見當らないと見えて黑部の着くと今度の問題は光次郎の帽子である。

帽子は惜しくないがメタルが惜しいといつて自分等の見て

川岸まで一度降つて行つた。それでも登つて來る時に彼の頭上に帽子のない所を見れば矢張りなつてゐないから面白い。

そのメタルといふのは芦峅の案内組合で作つたガイドスキーと彫つてある銀製のものである。

かくして中ノ谷に日電の小屋へ着いたのは三時半頃であつた。

日電の小屋とは大阪に本社を有する日本電力株式會社の小屋の事であつて黒部川の水を利用して水力電氣を起す爲此處に半永久的小屋を建て宮本秀藏氏主任のもとに測量に從事されてゐるのである。氏の言に依ればあれだけの水でも充分とまでは行かない相である。

小屋には宮本氏の外に今の所重吉といふ芦峅の人が一人ゐるだけで極く靜かであつた。

熊の仔が二匹ゐたので非常に面白かつた。紐をつけて雪の上にひつぱり出し、木登りや喧嘩をさせたりして其の日は一日遊んでしまつた。

翌日は歸へる積りであつたが宮本氏が是非にといふので自分等も餘り氣分がいゝ爲願つたり叶つたりとばかり一日愉快な雜談に花を咲かせたのであつた。

熊の肉は殊に珍しかつた。あれは煮るよりもつけ燒きの方が旨かつた樣である。この山奥でキヤベツの食べられたのも珍しい又驚いた事の一つ。

氏はこの冬をこの小屋で過された相であるがまづ僕等には出來ない仕事である。吹雪に明け、吹雪に暮れる一月の頃からだん〳〵と明るい三月、四月となると雪は解けて來る。そして時々鳶が此の山中の一軒家を訪れて來

る。ある時一羽の仔雀が尋ねて來たが日毎にそれが増れもいつしか姿を消して後にはたまに鳥が飛んで來る位來られた相である。

自分は歸京後も時々宮本氏へ通信して遂に來年の三月には平を中心としたスキー登山を行ふべく決心したのである。再びこの山奥に雪深き頃黒部の神祕境に氏を訪れる事は何とも云へぬ喜びであるのだ。幸ひに宮本氏の健在を祈つて止まない。

・針ノ木越へ・

今日はいよ〳〵里へ出る日である。そして自分等の最後の活躍を示す針ノ木峠の難關が横日で大町に出る。それは誰でもがやる事ではあらうが相當がんばる必要はある。

宮本氏及び重吉さんに又の別れを告げて、小屋を出たのは五時に近かつた。まだ天氣は自分等に幸福を與へてゐる。其の後宮本氏よりの通信に二匹にも挨拶したがキヨトン、とした顔で箱の傍にちゞまつてゐる。其の愛らしい動物が食物の異ふ爲か七月はじめに死んでしまつの中に悲しい便りを見出したのだつた。それはあの可た事である。誠に可哀さうな事ではあるが自然のまゝに放して置けばどんな惡さをするかも知れない動物だから仕方のない樣なものゝ、あゝして人手に捕へられあへなき最後を遂げ樣とは思つてゐなかつたらう。

籠渡しの綱が切れてゐたので小屋の前に架る危げな釣橋を渡り對岸に達してから雪崩の爲に破壞された徑を除

けて遥かに尾根の藪をわけ約一時間の後に籠渡しの對岸があつたが誰も居なかつた。

残雪豊富な此の谷を右に左に上流さして登つて行く。大南澤落合まで約一時間。煙草が切れたので光次郎の煙管を借りてスパリスパリ呑氣に谷間の明るい空氣を胸一杯に吸入れる。針ノ木岳の西山稜の南斜面は雪崩の出盛り時分の物凄さを思はせるに充分である。谷には所せきまでに無慘な倒木が交錯してゐる。皆その折れ口が眞新しい針ノ木谷の木の字あたりへ來るともう水は見えないで、一面の雪渓となつてゐた。羚が一匹左岸の遥か上のガレを上手に逃げて行くのを見た。

牛小屋跡で宮本氏に戴いたお萩をたべる。こゝは餘程注意しないと北葛乗越の方へ行つてしまひ相である。目指す峠が現れて來た。實に廣々とした峠路である。キーはつけずにアイゼンだけでヂグザグに登つて行く。一枚の白布をかけた様にベツトリ雪に被はれてゐる、スだ。相變はらず空は何處までも藍である。初夏の候、さうそして其等の色と雪の配合やがては夏も訪れるのであらう。

六月五日の午前十一時廿分、自分等は遂に天下の險を以て誇る針ノ木峠の頂に立つた。連らなる後立山々脈の雄峰の數々、爺岳も鹿島槍も又遠くは白馬、朝日も未だ夏とは云へぬ白さであつた。槍から穂高に至る南望も亦棄て難く思はれる。薬師も遠いゝがどつしりとして西南の空にうそぶいてゐた。

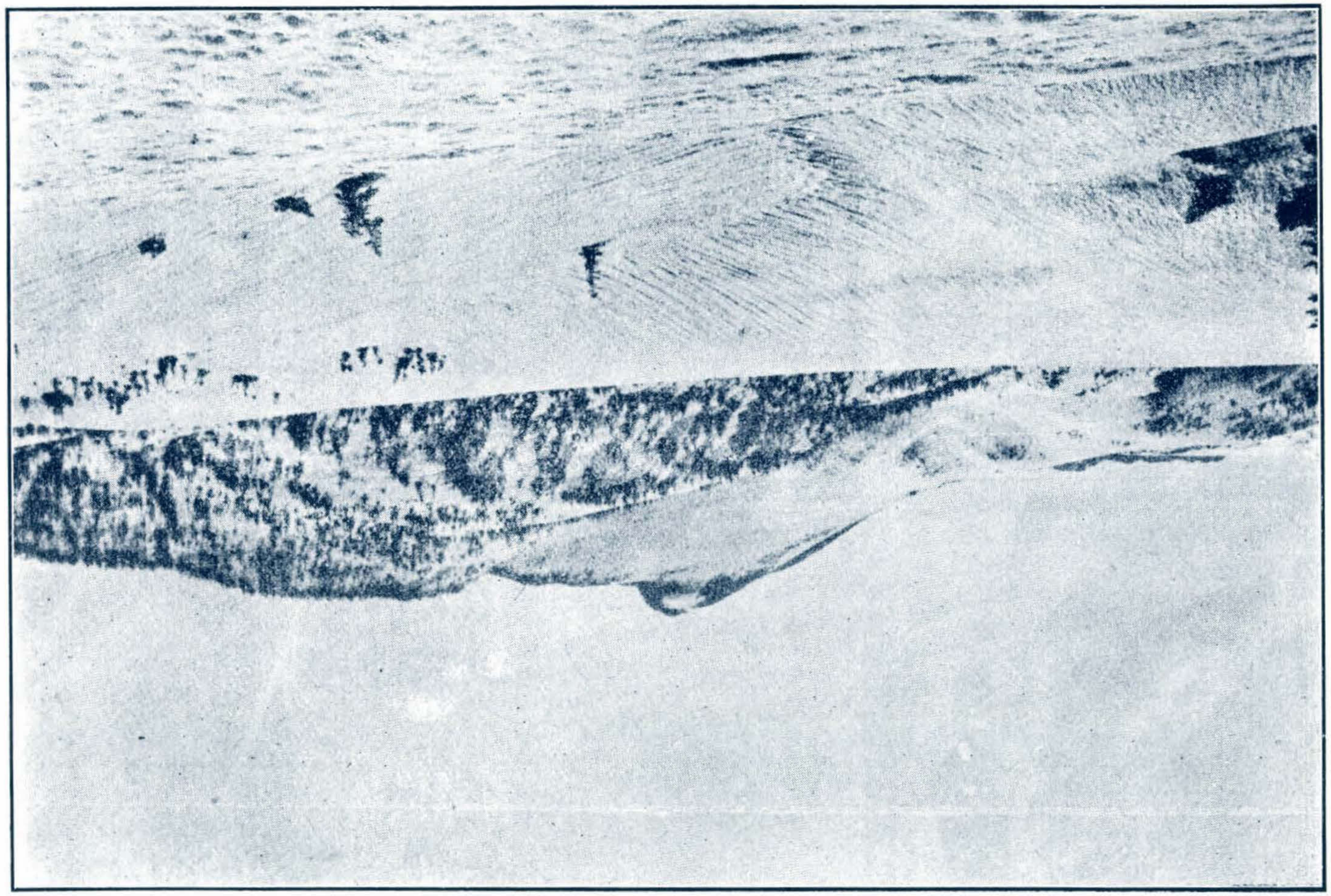
ふと籠川谷を瞰おろすと思ひがけなくも人影二つ。動くが如く動かざるが如く峠路をあへいでゐる。卑しい事

ではあらうがも少し遲れゝば今年最初の針ノ木越を彼等にしてやられる所だつたと一番乘りの愉快さを一層深く感じたのであつた。之も心なき者の喜びとして許して貰ひ度いものと思ふ。

いよ〳〵最後の檜舞臺だ。此の頂より遙かに瞰おろす籠川谷に向つてスキーを飛ばすんだ自分の技術と此の急峻な雪渓とはあまりにもかけ離れてゐる様な氣がする。リユツクサツクも埋れてしまへばどんな事になるかわからない。意を決して光次郎にリユツクを持つて行つて呉れと賴み込んだ。然し彼は拒んだ。いやしくも一個の登山家が人夫にリユツクを持つて降りたつて、たとへスキーを用ひたにせよそれは男でないといふ。成程さう云はれて見ればさうだ。今考へればあの時自分でリユツクをしよつて降つた事はどんなに貴い經驗となつたか測り知る事は出來ない程であるのだ。自分は光次郎の忠告に感謝の意を表さなければならぬ。

まづ奮然とスキーをつけ、何落ちても上へは落ちないだらうと中央の雪庇を除け、西端より皮切りとして自分は半制動の姿勢で滑りはじめた。思つたより危險率は少ないがズルズルと横滑りをするからつて來る。ボーゲンをしやうとしてまづ右足に力を入れ、すぐ左スキーの後部をひろげはじめたがハツトして止めてしまつた。全くそれからはステムボーゲンを味ふ事が出來た。一度段になつてゐる所で先制動の姿勢となつた時とても支持する事が不可能と思つたからである。約四回位かくしてキツクターンで降り、一人は有明の大賀館リリーの主人であつた。峠に登つて回轉寫眞をとるとの事、朝日を一袋客人は松本の寫眞館リリーの主人との二人に出遇つた。

春の磐梯ヶ原　（吉澤一郎）



載いて別れる。光次郎はまつすぐにグリセードをやつてゐる。それから幾分かの後、大澤小屋も氣づかずに通過してしまひ、光次郎の來るのを待つべく晝寢としやれ込んでスキーをはづし、籠川の河原へ出て大町に入がにもう暑い。

扇澤を過ぎ、大出の部落まで可なり永い道をテクとやるのも樂ではなかつた。埃の田舍道に出て大町に入り對山館へついたのは六時近かつたであらう。

さても幸多かりし五月の山旅ではあつた。

……

最後に弘法及び室堂に於ける物價を參考までに掲げやう。

……

（弘法茶屋）　薪二把　一圓六十錢
　　米二升五合　二圓　　毛布四枚（借賃）　一圓二十錢
（室　堂）　薪四把　八圓　　木炭二貫目　二圓
　　米五升　七圓五十錢

……

自分は之を見て可なり高いものだと思つた。それでも使はぬわけには行かぬのだ。秩父の山小屋が懷しかつたいくら焚いても只なんだもの。といつて必要以外は焚いた事はないが。

……

最後に對山館の若主人でない方のおやじの待遇が實に癪にさわつた。そして汽車の時間割を具へてないのを理由に夜行で歸れる所を無理にとまらせた事などは實にひどい。愼太郎さんは何も知らなかつたであらうと思ふ。丁度石川欣一といふ友人と話中であつたのだから、餘計な事だが營業方針を變更する必要があらう。

登山の意義に就いて

阿部東吉

私は何時も山を眞の意味に於ける道場であると思つて居ります。道場とは種々雜多の社會相の中から眞理を抽出して來て、之れを知――行――信の過程を經て修業者の人格の構成要素となさしめる行の活躍の舞臺であります。柔の道場は劍道を劍士の人格化する場所であるのです。柔の道場は柔能制剛と云つた言葉によつて其の片鱗を知り得る柔の精神の眞只中へ突入する純粹の方便であります。道場の中にあつては其の道場を支配する眞理の外に何者の介入も許しません。修業者は眞直に此の眞理に向つて知――行――信の過程を辿らねばなりません。若しこれに違反すれば必然的に制裁があります。劍の道場にあつて劍道の教へる處に從はねば直ちに負の制裁があり、劍道の體得は出來ないのであります。即ち道場中の修業者は其の道場の支配原理に絶對服從であるも心身行の三從とは其の主觀的の服從ではなく、客觀的に服從するものであります。

此の意味を日蓮上人は「日蓮こそは法華經一部を讀みて候」と簡單な力強い言葉で云ひ表はして居りますが、此の「讀みて候」の境地即ち心身行にて知るの境地に達せしめるのこそ道場の體得に向つて單一に突進し得る處、一つとして道場にあらざる處は無いのであります。禪堂、教會、弓道場等は勿論眞理の體得に向つて單一に突進し得る處、更に云ひ換へれば「信」の境地に達せしめるのこそ道場の動きであります。

さるものはありません。圖書館然り、教室然り、運動場然りで、釋迦は鹿耶園を、文覺は那智の瀧を、芭蕉は足跡の印する處盡く道場となしたのであります。

山岳も亦此の意味に於いて立派なる道場であります。登山の意味は山姿の明眉なるを歡賞する爲めではなく、眺望の絶佳を喜ぶ爲でもなく、又高山より下岳を望みて、已れの過去の苦闘の生涯と比較して快感を味はんとするが爲めでもなく、一歩々々踏み占める其の一歩に千萬の味があり、踏んではなせしむる處に無量の慈悲があるのであります。

一度山に踏み入る時は甘へ心の侵入を許しません。金もなく、地位もなく、天涯孤獨心身無一物の絶對境地によりて自己を確立し、これより第一歩を踏みしめなければならぬのであります。

に於ける一歩は此の法悦に憧れて一歩の意味を忘れてはなりません。言ひ換へれば一歩による眞理の體得を忘の力によるか、又は僥倖の力によるかの一歩ではありません。こふした一歩一歩の歩みこそ山姿の末に遂に見出し得た時の大歡喜にも等しいものであり、登山の眞の意義であり、山岳の道場たる所以であります。山姿の明美も眺望の絶佳も眞に美化され、全く美化されて行くのであります。私は此の法悦の境地を禪門の道士が難業苦業の如の世界に向つて勇猛精進するが如く、一本の金剛杖を持信じて居ります。私達は禪門の道士が公案を提げ、一

ちて、昔の登山者と云へる時代の心に返り、山を享樂地と見る今の世の所謂登山者ならず、山を踏破する毎に私達の人格の上に何者かを加へて行き度いと思ひます。

Weit, hoch, herrlich der Blick
Rings ins Leben hinein!
Vom Gebirg zu gebirg
Schwebet der ewige Geist
Ewigen Lebens ahnungsvoll.

(goethe)

野澤の事ども

松倉榮司

忙しい世間の年末、お花見も近いとそろ〳〵浮き出す三月の二期は我々にとつては一番待たれる時だ。上野驛に行つて御覽じろ、スキーをかついだ男を見かけぬ事はこゝは全く別世界だ。僅か十數時間の旅でこうも違つた世の中に出會はすのかと思ふと日本人の宇宙觀に些かの影響なき能はずである。短い時間にしては餘りに異り過ぎる眼前の空間。雪や山に興味もなければ變つた景色とは云ひぬだらうが、そこを目あてに心躍らす我々には餘りに變れる自然の空間こそ望なれでそこに働くスキーマンの頭は雪や山にある絶對の價値を認めて御座ると時間や空間ばかりが要素ではないらしいと勝手にきめ度くなるが。宇宙觀うも參らぬ。宇宙觀と人生觀をごつたにしてきめつけやうとしては無理といふもの。だが無理にも價値といふ要素を入れて見たくなる。それも道理何も好んでこんな寒いお國にやつて來る人もなからうからと考へるのが素人のお考。スキーマン雪國に來て「おゝ我が天地」と叫ぶではないか。それ程我々には冬のお國がなつかしい。

さて我々は上境で下車した。輕便鐵道の田舍停車場らしい氣分が軒に下つてゐる善光寺の御開帳のビラを物め

づらしさうに眺め入つてゐる胴ミノ爺の顔面筋肉に表はれてゐる。狭いけれども樺内は樺内だ。ない列車はその樺内に横付にされてゐる。雪の中をこゝまでころがつて來たのかとしか思はれぬ位列車は後の貨車からちかに雪の上にほうり出されたスキーをとるために呑氣にも樺内に入り込んでも文員は手數が省けて却つて嬉いしといはぬばかり。それつて見る。この邊は田口や關山の事務的な扱よりはフレツシュな感じを與へる。

驛から左に折れて千曲川に沿ふて行くこと二町、沿道——道といつても地上四五尺の雪の上、他の部分といくらか色わけされた一條の線である——には十軒位の家が立ち並んでゐる。そこには鐵索を張つた渡船が待つてゐる。先客五六人、この寒い所へ湯治に千曲川の畔に出る。そこには鐵索を張つた渡船が待つてゐる。その服裝で湯治客と知れる。車中で出見えて此船の中三人の女連の客、何れも尻を端折つて藁靴をはいてゐる。その服裝で湯治客と知れる。車中で出會つた鐵砲打ちが船の胴間であぐらをかいて獲つた一匹の兎を見入つてゐる。すべてが靜かだ。只渡守が着てゐるゴム引の外套とゴム靴が騒々しい東京深川邊の下素な文明の暗い影を思はせて、見る目が何んとなく冷たさう矢張りムツクリした胴ミノ鉈豆煙管の主であつてほしい。

殆ど登りとは氣付かぬ程の登りを行きつめると野澤の溫泉に出る。山中の盛り場と言ひ度い所だ。流石は昔からの湯治場で結構立派な宿屋が三十幾軒。階段狀に層をなした家並は好き勝手に列んでゐて儿帳面を出してゐたり急に街道筋の側の道とはちがつて道の雪が色づいてゐたりして踏む我々に溫い感じを與へて呉れる。併し夜になると眞黒にせまつた背の山から吹き颪す星

宵の風で流石に寒く身に浸みる。雪もこち〳〵に凍つて宵のスキーマンの無聯をなぐさめる話頭に上る。

明日の雪具合はどうだらう。この上ちらりと降つてくれたら……」と

▽

酒屋といふ我々お馴染みの宿屋今年で丁度足かけ四年の通ひ詰め。話ずきなおかみさんやちさん、それに若夫婦お孫さん二三人、と言つた風な至極心のおける人達。「御免」と這入れば「まあ——ようこそ」と氣易く挨拶される。旅から戻つた倅の草鞋をぬがせる母親といつた氣持で僅か一週間や十日の逗留客とは自分ながら考へられぬ程の應待振り流石に純朴さと心易さがしみ〴〵嬉しくなる。旅で下手なお世辭を聞くのは眞平だ。どつちかと言へば漱石の所謂「非人情」に近いグループだけにこの宿屋の感じが有難い。夏場になればきれいに磨き上げられるだらう處の玄關。そしてその板場に三四遍頭を下げてしこたまお茶代をせしめるその玄關先——これがつるつると辷らんばかりに蠟だらけになつてゐる。玄關側の小部屋は我々に與へられた乾燥室だ。こゝはふだんなら疊を入れて立派に客を泊められる處だが今ぢや靴のまゝで踏込んでまるで人足の控部屋といふ感じだ。三階の廊下までうつかりすると足を滑らす程の蠟の狼藉振り。こんな我々のお茶代を大目に見てくれるのもこのおかみだ。こゝの處暫くは宿屋稼業停止スキー合宿所開始といつた風な有様である。夜は夜とて風呂場で高聲御勝手次第、まるで我々スキー部で土地でも一流所のこの宿屋を貰切つた形である。

「先に行つてるよ」と手廻のよい者はスキーをかついで練習場に出かける。取り残された連中は例の乾燥室で

蠟をつけたり靴に油をくはせたりしてゐる。九時は充分に廻つてゐるが雪はまだパラ〳〵に凍つてゐる。お宮の左側を登つて行くと第一練習場に出る。眞白い雪の上にくつきりと青い陰を投げた杉の木の下は恐しい程凍り切つてゐる。練習場の往復毎に歩いたり制動で下つたりするので可成雪がしめつけられてゐる爲だ。

朝のスキーイング程氣持よいものはない。殊にちらりと降つた朝等は何とも言えない。シヤンツエの尾根を練習場で滑る前に一先づ試る時位惠まれたスキー氣分はなからう。この尾根をジツグザツグに登る途中下の方から寢坊な連中が「おーい」とも言はずにこい〳〵登つて來るのを見てゐると朝起のとくをあり〳〵と感じられる。朝のすが〳〵しい空氣を吸ひながら右手に毛無山を望んで雜木の冬枯木立の間を通りぬけると大抵い、加減な所まで登られる。風もない練習場からこゝへ來て見るとまるで雪の質も變つて強い風が遠慮なく當る。パラ〳〵の粉雪が波狀形にきざまれて風が吹く毎に雪煙を立てゝ移動する。風足がもの凄く一寸前まであつた兎の規則正しい足跡をパツとならし去つてしまう。この邊でよからうと思ふあたりでターンして滑る前にどつかと腰をおろして一服やらうとマツチを擦るがチツともつかない。まゝよとかつとばしシヤンツエの上まで來て右にコースを曲げて練習場に眞直ぐ滑降する。毎朝これをやつたら相當足のガンバリが出ていゝと思ふ。

練習場に出る。大勢の者が學校毎にかたまつてテクニークの練習をしてゐる。この練習場だけは赤倉は勿論關よりも少しく劣る樣だ。併し第二練習場は相當廣いけれども少しく急傾斜でおまけに宿屋から少し離れてゐるのが惜しい。むしろ第二練習場へ出る位なら野澤峠かその尾根の續きを西南に取つた方がむしろ面白い。そちらの方は殊に午後の練習にはもつて來いだ。三時過には野澤の何處でも味へぬ雄大なスキーイングが出來る。野澤峠の

スロープなどはクロスカントリーの折こゝに出ると、更に三百米位のコースを逆に登つても道草を食ひたくなるそれ位手頃なスロープが展開されてゐて、しかも西側に降れば可成もの凄い氣分が味へる。殊にスラロームの練習にはこゝが第一等かと思はれる。斜面の幅が廣くて雪も相當輕いから。嘗つて初心の連中とこゝへ行つた事があるがその中の一人が廣くて相當急なこの斜面に直面して避易したのには閉口した。べつたり雪の上に腰をおとして手で逼ひ出した彼を見て氣の毒になつた、仕方なくW氏と二人で前と後から手傳つた事がある。併し妙なもので彼も百米も行かぬうちに結構一人で登れる様になつた。これもスキーはやつぱり雪と山に馴れねば駄目だといふ一つの證據である。

▽

また練習場に戻らう。

「今日はおしるこが來るぜ」三時近くになると、宿屋の好意でおしるこの御馳走が練習場までかついで來られる二時過ぎるとさあそれが待たれること。

「まだかい」

「いまKさんがそこまで見に行つたやうだ』

こんな調子である。至極無邪氣といふもの、ぎこちないテレマークを習つてゐる連中も食ふ段になれば一人前の餘駄を飛ばす。

後の杉林にもぐり込んで到來のしるこをたべる。二杯三杯は忽ち。少し休んだせいか汗でぬれたからだが急に

悪寒を覺える。遠くに出かけた連中は恰もレースをやつてゐる様な速力でつーと杉林に飛び込んで來てにゆつと食氣たつぷりな顔を出す。

「おかへり」

と先客に挨拶されて一椀を與へられる。この時だけは流石にゲレンデもこつそり、スキー獨特の燥音はぱつたりやんで靜かである。

それが終つてからは又新しい元氣に立ちかへつて猛練習をする。そろ〳〵雪も凍り初めて、スキーはぐん〳〵出る。ゲレンデの雪などは靴のまゝあがつてもぐりつこはない程固く凍つてゐるのでうつかりやると横辷りで投げ出される。汗はすつかり引込んで冷い空氣が遠慮なく肌に通る。手袋も凍り初める。その頃にはゲレンデ越えて妙高と黒姫との間と覺しき邊りに赤い西日が傾いてゐる。西日を直接にうけた部分の雪だけは或は紫色に或は淡紅色に次第々々にクラストに變つて行く。もう毛無も見えねば野澤の平すら模糊たるものである。すべてが冷い青い色にとけ込んで紅がだん〳〵後方の山へと減退する。もう五時近い。

「おいもう歸らうぢやないか」

「オーライ、疲れたな」

こうして温い宿屋の炬燵と温泉と夕飯とを頭に畫きながらスキーをかついでこつ〳〵下山する。スキーツールに出かけた二人連の男シュツと傍をパスしたかと思へば忽にして夕景の中に姿をかくす。後のゲレンデは人ツ子一

人通らず。明日の日の出までは夜の星明りにめぐまれてスキーの精がおどるやら、吹雪の悪魔が狂ふやら——静かに〳〵何事もないもの〵様に自然は數世期前と同じプログラムを運んでゐる。

▽

此處は八疊四間ぶつ通しの酒屋の二階——我々の居間だ——赤い火がはいつた炬燵が四つ、煮空つ鐵瓶をかけた火鉢が四つ、外と變つて室内はすべて温い感觸に充ちてゐる。飯山時代とはうつて變つて合宿氣分がおちついてゐる。もうあの時代の様に尺八や謡曲で邪氣を和らぐこともなければ、又飯山中學の寄宿舍の廊下に氷柱を轉がして謡曲の邪魔する豫科生の茶目振もない。讀書、漫談、すべてが靜かだ。しかし時々トンネル狂な話題で滿座が微笑、苦笑、哄笑する。一度ゆらいだ空氣を元に返すも殘念とばかり次から次へと話がはづむ。

野澤へ來る様になつてからは飯山時代に見る様な猛者はないが、あの時は夜の一時頃になつてもおかまへなしにヒヤメシ草履をひつかけてのそ〳〵町場へ暖を取りに出かける者もあつたものだ。從つて練習の取締りも可成嚴重にして朝などは寄宿舍の食堂用の鈴を耳もとで振たりして起し廻つても「うーん午前は休むよ」といふ様な調子で平氣でやかましい鈴の音をき〵ながら蒲團にもぐり込んでゐる連中もあつたものである。それから見るとこのはしやいだ處が「ゼスチユア」か青春讃美の漫談位だ。そんなせいかこちらに來てからの練習參加者の進歩には實の野澤で目ざましいものがある。往年の二期分位には相當しやう。（當りさわりがあつたら御許を乞ふ）

こゝらで野澤よ、さようなら

岳友へ

高木英二

友よ！
靜かな秋の夜が音もなく更けて行きます。
めつきり寒くなりました。
高い山々にはもう初雪が降つてゐるでせう。
過古の思ひ出が限りもなくなつかしい夜です。
確かな記憶を呼出させるべく。
それは、あまりに遠い昔の思ひ出でしたかしら。
綠の林の中を玉なす溪流に添ふて
永遠に續く樣な小徑を
私達は只つた二人で辿つた事があつた樣です。

それから高い山々に圍まれた靜かな湖。
ええ、小波一つ立たない。
あゝそう、月でした。
そうして絃月、
白樺の梢にうつゝた
その青い光を受けて
私達は立つてゐました。
言葉もなく。

そうして、何時かしら
山の背でした高い山の背でした。
細い道でした。
木が一本もありませんでした。
小さい枯れた草がありました。あたりに。
白い雪の様な砂がありました。
空は眞青でした。

でも夕暮れでもあつたののでせう。
西の空が仄かに紅を止めて居たのを、
覺えてゐます。
あの時私達は歩いて居ました。
急ぐともなく、
その時もやつぱり私達は默つて居ました。

それから又
小さい美しい山小屋でした。
赤々と燃える火を圍んで、
坐つて居たのは矢張り二人でした。
あの時程君がおしやべりをした事はありませんでした
私も話しました。
何んのお話し？もう思ひ出せません。
その日の山の出來事でも、
その次の日の道の事でも

なかつた様です。
只私は覺えてゐます。幸福にした事を。
その話しが
限りもなく私達を
友よ！
靜かな夜です。
覺えてゐますか。晴れてた日、
何時か。
高い秋空が限りなく
ふつくらとなだらかな草山で、
歌つたあの歌を。
さあ窓を開けませう。夜です。
空は降る様な星月夜です。
明日は良いお天氣でせう。
近い中に歩きませうか。又、二人で……。

ありし日の秩父

近藤恒雄

「プロゼミナール」を終へて師の家を辭したのは九時頃である。雨は一寸止んだ様だが霧のツと霞んで如何にも秋の夜らしい落付きに滿ちて居る。支度もそこ〳〵に飯田町驛に急ぐ。す一行と旅役者らしい赤裝の小娘の數人が居る位であつた。靜かな而も淋しい門出である。

是から又當分山の中に入るのかと思ふと何となく淋しい感じもするが又一方には譬へられで汽車を乘てたが未だ夜は深い。三人は默々と歩き續けた。皆んな半分位寢て居るらしい。るものは登山靴のガタ〳〵云ふ音と何處かで吠へる犬の遠吠へのみである。私は何時の間にか「テス」の物語りを頭に浮べて居たが突然大きな石に躓いた拍子に別分に滿ちて居た事は事實である。霧は依然深い。猿橋を過ぎて間も間くた。何處か一寸寢る場所は無いかと三人とも一郎さんが「ランプ」を出して先に立つものである。下瀨戸を過ぎる頃夜は明け始めたが、矢張三人ともぼつとして居る。

「リュックサック」の重みが馬鹿にこたへて行程が少しも捗かどらぬ。夫れでも正午頃には佐野峠にかゝつて居た。道が下りに成つても寢る事を決して忘れぬのは正直なものである。

左うして池の尻に着いた頃は全く闇に鎖されて居た。三人ともすつかり足に豆を造つてしまつた。こんな風な旅が翌日も續いた。

霧が深いので自然氣分も重い。話の糸口を見つけて一郎さんや村尾氏に話を仕掛けても答は簡單な Yes No の何れかで盡きてしまう。

矢張り默つて歩いた方がよい。岩岳を過ぎる頃又闇が訪れた。我々は又一夜の宿に急がねばならぬ。斯くて一個の「ランプ」は三人を段々と秩父の奥へ運んで行つた。

將監の小屋に來たのは三日目である。

豐富な薪を据へて三人は爐を圍んだ。今日は惠れた靜養の一日である。昨夜の楢の澤の小屋に比すればとても「ダンチ」である。今夜は三人とも俳句に熱中し出した。村尾氏の口から出る句も一郎さんの夫れも駄作には違ひ無かつたが兩兄の生活をよく寫し得て面白かつた。

四日目の晩久振りで人里に來た。栃本である。此處から歸京遲延の報告をする事にする。今日雁峠附近の笹で全身濡れ鼠となつたので宿の女中を「ガイゴツ」て全部乾して貰つた。

明くれば今日も亦峠越へである。唐松尾が霧の間に隱見する頃昨日通つて來た道と別れた。昨夜あんな道を通つて來たのかと思出に耽りつゝ一歩々々登る。昨夕豆燒澤の入口を過ぎた時私は全くぞつとした。夫れは薄暗き此の澤の入口が餘りに狹く然して何者をも呑み盡すと云ふ深さを持つて居たからである。雁坂峠の紅葉は素敵なものである。今日は霧の見舞を受けたのは峠近くなつてからである。

今日は珍らしく明るい内に小屋についた。殆んど家根ばかりと云ひ度い位の荒れ小屋である。昨夜四枚の夜具に守られた體は今や板間もる夜風に夢を破られると云ふ有様である。

廣瀬も淋しい處だ。二股小屋の夜は今から考へると最後の小屋の一夜であつた。

蠟燭の光が冴ゆる頃例の如く友は歌ひ出した。僕はどうしても歌ふ氣になれない。然して東澤の心快き私語に聞く活に段々痩せて行く友の顔をぢつと眺めた時私は複雑した感じに打たれた。私はすぐ此の感じを紀念の爲め筆に出そうと書いて見たが到底描き盡せ得るもので無い事に氣付いてペンを置いた。然して東澤の心快き私語に聞くとも無しに耳を傾けて居た。

幸に翌日は好天氣であつた。一行は段々と西澤を溯行した。私は自重して草鞋に取換へた。背中の簑笠が餘り木に引掛るので涙を振つて此の懷しき笠と惜しき別れを告げた。

此の澤登りを斷念して石塔尾根にかかつた頃は天氣は益々よい。遥に霧を帶びた三寶甲武信木賊の勇姿が釜澤を距てゝ恐ろしき威嚴を示して居る。二〇八六米の三角點を發見するに大分苦んだ。尾根は長いが國師の頂が段々近くなつて來るので樂しみである。此日到々國師と奥千丈との間の「三ツナギ平」に露營した。

今日は澤登りの積りであつたので水の用意が無かつた爲夕食は少しも喉に通らぬ。處が夜半突然小豆大の霰が降つて來た。うつら〳〵として居た僕が吃驚して飛起きて見ると村尾氏が一生懸命で消へ掛つて居る火を吹いて居る。幸にも一同は水無き此の頂に水の結晶を得たのは天の賜物であつた。皆んなガリ〳〵霰を食べて渇を癒した。斯くして寒き一夜は明けた。今日も上天氣である。行程

は案外捗つて豫定より早く金峰の頂に出た。此處からの景色は全く絶景であつた。初雪を戴いた芙蓉の優雅と北岳鹽見赤石連峰の鋭さが八ツ岳の一群を前に据へて對立して居る様は全く見事なものであつた。此日増富鑛泉からは靜かな一人旅となつた。顧みれば思出多き秩父國境山脈は何れかに沒して前途には只一筋の道が黄昏を通して彼方に消へて居るのを見るばかりであつた。——（一五——一一——一）　以上

「山は靜かにして性を養ひ、水は動いて情を慰む」と芭蕉は云つた。富士山を朝夕に望むことの出來る或る村に永年住んでゐた或人が、「富士山ほど姿の變り方のはげしい山はありません」といふ名言を吐いたといふ話を此頃人から聞いた。私は芭蕉の言葉にも感心した。また此の人の話にも感心した——

——相馬御風著「第二の自然」より。——

年毎に暮らせし秋の秩父かな　（くま）

あか〳〵と焚火の焔、友の顔　（くま）

煙草吸ふけむりも重し谷の雨　（ペン）

すきま漏る夜雨に夢を破りけり　（たぬき）

三人で處分にこまる柿二つ　（たぬき）

オリオンの柵にかゝる寒さかな　（くま）

岨路に灯影に白き息の見ゆ　（ペン）

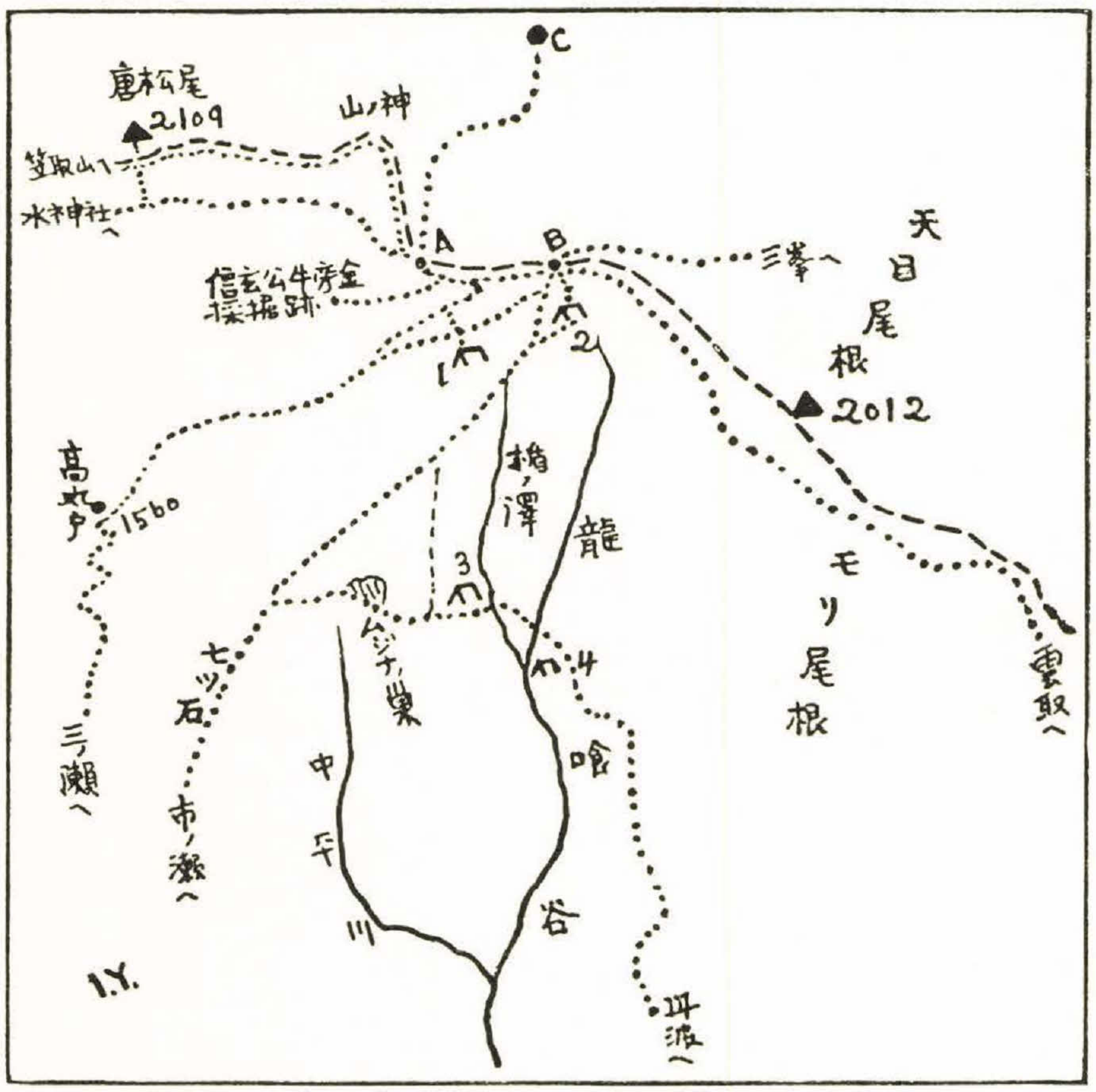
夜の爐の煙に泳ぐ自在かぎ　（ペン）

雨の夜友は一句をものしけり　（たぬき）

秩父雑記

1 秩父雑感 村尾金次郎
2 西澤を遡る 中島二郎
3 秩父事情 吉澤一熙

6. 其の他
5. 石塔尾根に就いて
4. 雁坂峠より栃本へ
3. 將監峠以東の新道路
2. 日原川本流を降る
1. 丹波より將監へ


C
唐松尾
2109
山ノ神
笠取山へ
水神社へ
A
B
三峯へ
天目尾根
2012
信玄公埋蔵金
採掘跡
1
2
3
4
高丸峠
1560
三ツ瀬へ
七ツ石
市ノ瀬へ
ムジナノ巣
中ノ川
鶏冠ノ澤
龍
喰
谷
モリ尾根
雲取へ
丹波へ
I.Y.

将監峠附近林道

秩父雑感

村尾金二

【その一】

御坂越えて來りや、あけびの口に
　釣瓶落しの　陽がのぞく

御坂の峠路であけびを照らした秋の陽は、秩父ではたゞに、熟した柿の實にカーツと照りつける。自分としては秩父に入るのは大てい此の頃である。猫坂で落葉松の新綠の美しさを思つて夕闇の笛吹川に暮れ殘る青葉の下を歩いた五月の印象は唯一度、外は皆霜近い秋である。

大黒茂の谷にもチラホラ黄色い葉が浮き出される。笛吹川の澤々に湛へられた釜の口にも、散り浮く紅葉は「渡らば中絶える錦」を布きつめる。

東京の西郊から覗かれる雲取のカヤトも黄ばむ。二三度霜も訪れたらう。

此の頃にたると日分の心は秩父へと向ふ。そして足は秩父の地に入る。其處の村々には珍らしい程柿の木が澤山ある。街道、校庭、畑の中、至る所柿である。石垣の上からも赤い實が覗く。白壁にも丸い影をうつす。重い

足どりで夕暮の山を下りて來て、先づ暮れそめる柿の木が眼につけば村も近い。輕い飯盒には下りて、夕餉の煙、汁煮る香が心に裕りを與へる。

然し是等の柿は大抵その色とその艶とに、あさましくも誘はれる。中雲取を下りて多摩川に沿ひに下る夕、秋の氣を一つに集めた様な視覺を樂しますばかりである。パラ〳〵と散つたのを拾ひ上げる。皆がゴクリと唾をで背の高い一人が杖を振り上げる。皆がゴクリと唾をのむ。れる。

ペツ！　舌の根が曲る。

それ以來、どんなに艶を見せても食慾は起されなかつた。街道筋のは此の苦い且澁い經驗からして、古生層と呼び慣はしてゐる。

然し駄菓子屋に腰を下して、古生層と呼び慣はしてゐる干乾びた菓子や、飴玉をしやぶつかの柿の實を仕入れて行く事を忘れない。

雁峠からの縱走を雲取から七石、六石で終へて、氷川で熊の肉をたべて、すつかり伸びてしまふ。二俣尾の電車に遲れそうになりながらも柿の實をしこたま買ひ込んで、汽車の床にうづ高い皮の山を積んだこともある。

丹波山で買つた柿が將監峠までに二個になつて、三人の間に配分問題が起る。方々持ち廻つた揚句一つは子酉の露營の夜に鳧がついた。此の日は生憎、日が暮れてしまつて、水のある前岳の下の野營地まで行けぬ。三繋平で火を焚いて明かすことにする。水がなくては御飯がたけ

ぬ。星を時々かくす霧、梢のぞよめきが深夜の山を殊に深くする。ボロ〳〵に飯盒の底に残つた飯もたべつくす空腹でもある。咽喉も渇く。二本残つた芋を焼く。そして結局、空腹の人は芋を、渇と云ふ事で話がきまる。自分は芋をとつた。翌朝早く、前岳の下で暖い御飯をたべてから、「昨夕は芋をとつたが今ならどつちをとるだらうか」など、考へながら煙草の煙を見つめてゐた。霧の去來のめまぐるしい朝だつた峰から望む白峰の山々が白い化粧をして、渓の紅葉も散り殘つたのが、風もないのにハラ〳〵梢に震ふ頃になると、澁かつた是等の柿も、樽の底で美味しくなる。

「地震があると柿が澤山實りましてねえ」ねえが柔しく響く。こちらの人のなつかしい語調だ。宿の小母さんにこの樽柿を澤山もらつて食べ切れず、翌朝佐野峠に息を切らして休んでは喉頭をうるほした。

柿の思出は盡きない。

秋と秩父。時間と空間のこの二坐標が交はる所に柿の實が赤い。

秋、秩父、柿、三にして一。三位一體論も生れそうだ。

【其の二】

樹の豐富な秩父の夜は割合に過し易い。高距や緯度の方の關係もあるだらうが、大てい一夜を明かす焚木を集める業の容易さからだ。

樹についての智識は口惜しいが餘りない。黒木が針葉樹で雜木が濶葉樹とかう簡單に區別する。黒木と云へば

栂か杉位しか分らず、雑木は樺か栗――栗も實がなつて居れば猶都合が好い――位しか見當がつかない。知らないのが自慢でも何でもない。正直な所何も知らない。うつかり踏みこんで抜き差しならなくなるのが偃松と石楠木である。大きな木にぶら下つてるのが、さるをがせ、和名抄には「萬豆乃古介（マツノコケ）」又「佐流乎加世（サルヲカセ）」と訓ずなどとは百科辭典に出てゐるから驚くには及ばぬ。

將監峠は東京市の水源地で、今は落葉松の植林地だ。小屋の出來たのは嬉しいが、折角山へ來て落葉松の畑！ほんとに畑の感じがするし――では始まらない。植林地で木は伐れないから、小屋の横に薪を山と積んである。

夜半フト眼が醒める。Tが起きて火を起してゐる。生子板の屋根を打つ雨の音が激しい。明日も雨かも知れぬ燃え殘つた炭火が暗闇の中に赤く小さく輝いて、Tの扇ぐハタ〳〵の音と共に段々廣がつて行く。削られた木片からパツと焔があがる。二本並行に横たへられた丸太からうすら白い煙がはひ上る。まだ温もりの去らなかつただけに火も直ぐ起きた。毛布にくるまつたIの眞黒い影もムク〳〵起きてくる。

紅茶が沸く。暖かい液體が咽喉をうるほす。

Tが鉛筆と紙を出す。

「何するんだい？」

「句を作るのさ」

「ク？」

「俳句さ」

慌てゝはいけない。彼は眞顏である。五七五、指を折つては十七字を並べてゐる。焰の反面に黑い三つの影が沈默する。魚の恰好をした自在鍵がユラ〳〵煙の中にゆれる。雨はまだやまないらしい。大分寒くなつて來た。

太い木をもう二三本入れよう。

將監の夜は十月でまだ暖かかつた。十一月の秩父に颯と吹く風は如何にも「金風」と云ふ字を思はせる。秋の氣は金也とか云ふ。破風で泊つたのはこの金なる冷たさを思ふ頃であつた。

破風の小屋は大凡三間に三間。東西に入口。兩方の口から眞中を拔ける土間が通路ともなり、且爐ともなる。床の高さは二尺を越す。此の時も一行三人。毎日寢る時の位置に就いて、三人の中の一人が必ず眞中になる。(Z−1)、(Z)、(Z+1)の關係で誰もこの(Z)になりたがる。事實此の眞中に寢るのは少しは暖いだらうが、半分はそこにゐると云ふ氣分で精神上の暖氣をとるらしい。

抽籤によつて、子酉川二俣の小舍ではWが眞中、釜澤の露營の夜はYが眞中である。一番高い破風の小舍は自分になる。木賊を越えて破風の小屋に着く。夕飯が濟んで無駄話も盡きて寢に就く。眠りに就いて三時間許りは呼吸だけを殘して此の世との交涉を絕つ。十二時、一時。寒さが襲つて來ると眼をこする。伸びをする。不思議にも右にゐる筈のWがゐない。左のYもゐない。爐の中では太い栂の幹が赤々と燃えてゐる。その兩側に、何時の間に土間に下りたのか、(Z+1)と(Z−1)が暖かそうに眠つてゐた。結局(Z)が一番精神的に寒い思ひをして夜を明した。

烟かつたのは七石の夜である。鷹巢、六石と行きたかつたので七石神社の前で携帶テント一枚張つて二人で泊

る。水は三十分もかゝつて下へとりに行く。

夜になつて霧が來る。霧小便だ。雨とまでは行かぬ。時々霧を透して青白い月の光が照し出されるのが、靜かな山の夜に一層の凄味を添へる。薪は少し濕つた樺ばかりで吹いても扇いでもなか〳〵燃えぬ。焚火の消えて行くのは寒さよりも淋しさが堪へ難い。代る代る起きて辛じて火勢を保つて行く。夜は長かつた。

夜が明ける。小鳥が鳴き出す。大菩薩から東へ引いた尾根の裾を雲の中に沈めてゐたのが、段々赤く輝き出す好い天氣だ。晴天の下に、睡眠不足と焚火の煙とで瞼を眞赤に腫らした重ぽつたい四つの眼が、鷹ノ巢へのカヤトの道をたどつて行つた。

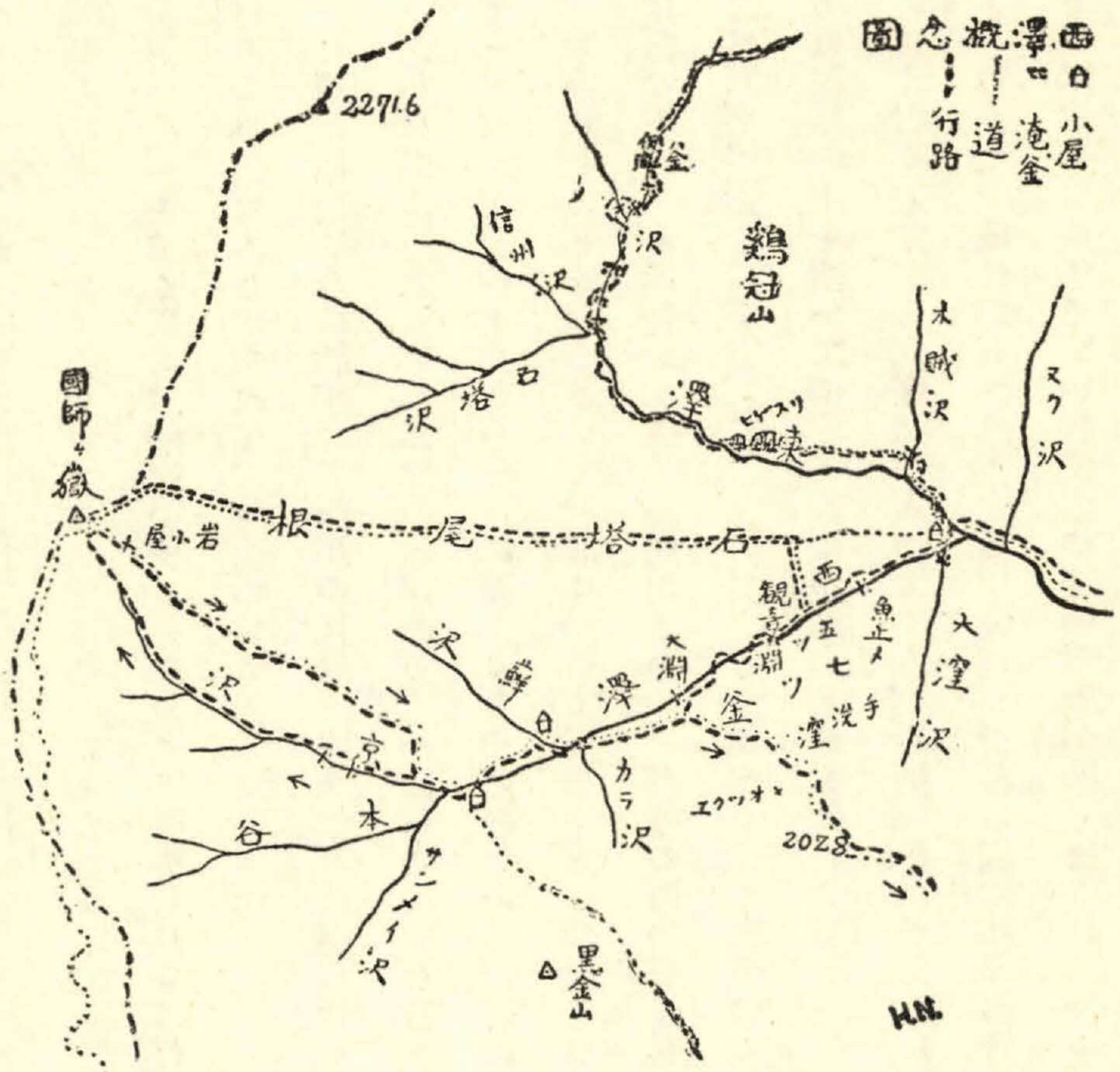
山へ登つて嬉しいのはこの焚火だ。山へ來ては食事と寢る事位、頭を脅やかすものはなくも火である。寢る時も火を焚く。然しそれ以上には、原始人以來重ねて來た、大きな樂しみが見出される山を思ひ、焚火を思ふ。そして秩父の樹を思ふのである。

西澤を遡る

五月三十日、獨り旅の心安さから、朝雨の白い鹽山の町を、油紙に身を包んで出た頃は、未だ細かつた雨足が

町を離れると篠つく様な降りとなつた。それが廣瀬の部落に入るまで付きまとつて心の中まで雨氣がしみ込んでしまつた。材木工場の飯場へ宿を頼み、駄目だから歸れ、としきりに亭主に言はるゝのを、どうでもと頑張つてやつと西澤入の案内を探してもらひ、その男の話しを貪る様に聞いた處によると、七ツ釜の所は、通れないし又行つた事も無いから知らない、廣瀬の部落の對岸にある鐵砲沼を溯りつゝ、屋根づたひに行つて、七ツ釜の上流へ出るのだがそれでいゝか、と言ふ。二股から溯れないのは殘念だが、仕方がないその男によろしく賴んでその晩は寢た。

五月卅一日、ところが翌朝になつて、その男いくら經つても來ない。非常に失望してゐると飯場のおやぢが氣の毒がつて、あれこれと物色してゐたが、運よく通り合せた赤浦の日原政美に賴み込んで、やつと西澤入りが出來る事となつた。



八時半頃、おやぢに厚く禮をのべて宿を出る頃、低く這つてゐた朝もやが、次第に登つて、ずつと雁坂へ一條の道が導くのが、昨日の雨に心地よい氣分を足に味はせる。この押せまつた峽の奥を限る雁坂、破風の山々が無意味な眼を谷一面に投かけてゐる。雨後の晴やかな氣と空とが晩春の陽に和して、心から感傷を奪つて唯躍る心を奥へ奥へと導く様に、峠澤、ナレイ澤、ヌク澤等を渡つて行く立派な山道が殊更明るく感ぜらるゝ。青笹川の邊(ほと)りの林道はもうすたれて、一面の笹である。

日原が面白さうに話す。子酉川の怪(かい)談を聞き乍りながら行く程に何時の間にか二股のドウ(ヽヽ)へ着く。

之から西澤へ入るには二ツの道がある。一は石塔尾根を暫くゆき、やがて西澤側へ下つて五つ淵の下に出る。今一つは、二股のドウから忠實に澤上りをやるのである。道につき協議する所があつたが、結局後者をとる。

東澤に架る橋を渡らないで、澤について下る。兩谷の出合ひに立つて磁石を讀むと、東澤は子の方面より西沼は酉の方面より出合ふ子酉川の所以である。西澤の暗い谷を眺めながら煙草をふかしてゐると、岩魚を釣つてゐた日原が、「今日は水が冷くて駄目だ」とつぶやく。一腹やつてから、ぶら〳〵石を傳つて行く。なるだけ良さうな河床の上を歩いてゆくと若葉が通す光が明るい。

暫く行くと左から大窪澤が入つてくる。岩壁の露出が多くなつて兩岸が狹つてくる。かうして約一時間もぶら〳〵行くと、流れが右へ急折する。流れが折れる處に西澤第一の瀧がある。魚止めの瀧である。可成り大きな瀧で、兩岸を形成する堅い秩父古成層の岩壁が深くえぐれて仲々に物凄い。

此の瀧は左岸を搦んで城(こ)す。草付きの急斜を五六十米も登り瀧の上に出て笹の中を分けてゆく。流れを窺つて

みても響々の音のみ。水の姿は見られぬ。暫く笹の中をゆくと降つて流れに出る。急に濕つぽい氣が妙に心持を陰氣にする。空も曇つてきた様だ。雨後のせいか水勢は仲々あなどれない。その上にともすれば忘れ勝の足元が萬事に滑る出來るだけ河床を歩いたが岩にぶつかる時は掬んで通つた。が大體に於て左岸を歩いた様である。かうして拾一時半頃、かなり緊張した溯行を爲しつゝ、五ツ淵の下手に着く。

五ツ淵は、西澤七ツ釜の中の下流にある五ツの釜を言ふので、その上流にある二つの釜と共に七ツ釜と言はれてゐる。場が惡い爲、釜を認め得るのは、四ツ程であつた。

最初二回左岸を高廻りする。釜の様子は掬んでゐる瀧の上をヘツルのは決して氣味のいゝものではなかつた。第三番目の釜も瀧を伴つてゐた。瀧の向つて右手に露出せる岩壁があつて、それに裂目があつたから、細引を手頼りに登つてゐて、流れは左に向つて折れてゐる。間もなくちよつとした河原へ出たので晝食とした。その手前に十呎ほどの一枚岩を下る處があつた。それから小さな岩の鼻を二ツ程越した時、流れが淵になつて苔の生へた一層じめ〳〵した所へ出た。洞の様にへこんだ岩壁に妙な裂目が入つてゐる。近くで見ると何の事だかさつぱり解ぬが、見へるさうで、遠くで見ると觀音像に西澤の觀音と言はれてゐる。その邊りから湯が湧いてゐると言ふので。水に觸れてみたが暖かであつた。

ここを越すと流れは少し左に廻る。短い岩角を、徒渉しながら越して流れを進むと、五ツ淵の最上流の瀧がある。ここで流れは鼻を一つ廻つてゐる。この瀧の通路はその左岸にある岩壁だが、如何にも氣味が惡くて

登れなかつたので、右岸を搦むことゝする。

右岸をみると、水の枯れた急な溝と言ふ様なものがある。それを登る。百米程もあつたらう落ちてくる物を吸ひ込まうとする様に開いてゐる釜を見下しながら、四這で堅い岩を登る。途中からザラ場になつて弱つた。上はちよつとした扇になつてゐる。あたりを見廻すと尾根に向つて道がある。これは村人がツクヱから西澤の観音や、堂を見にくる道ださうで、廣瀬方面に通じてゐる。それから暫く鼻をつく様な斜面を滑りおりると河原へ出る。降り口に又十呎程の一枚岩があつた。外によさそうな所がないのでそれを下つた。

それから又暫く河床を歩く。この間にも小さな瀧が二三あつた様に思ふ。

暫く行くと流れが再び右へ急轉する。そして大きな瀧がある。あまり瀧ばかりで興味も失せてしまひ、直ぐに左岸を搦む。之を終つて又暫く河床を歩くと、右岸がよくなるので右岸の苔の生へた枯木の上を歩く。やがて流れが左折し、その角のやゝ悪い滑石の角を越すと、之で西澤の悪場は全部終つた事となり、柔かな美しい流れとなつた。時に三時半であつた。河床のV形がすつかり無くなつて、河原には美しい流れが息を休めてゐる。西澤は岩魚や、やまめの多いので有名ださうだが、岩魚釣りの名人として赤浦第一と自認する日原が僅に二魚を釣つたのみであつた。

空は午後になつて益々曇つてきた。徒渉に濡れた身に午後の寒さがひしひしと迫る。

午後四時尾根の出鼻を一つめぐると大淵の深潭が美しく澄んでゐた。その釜の下手に宏い河原があるが、以前

は此處に小舍が在つたさうだ。日原は此處を大窪と呼んでゐた。（書上氏記行には長八ケ窪となつてゐる）大淵は西澤最大の釜ださうだが、確に最も大きい。そして美しい感じのする釜である。高さ一間程の幅の宏い瀧が音も無げに滑り込んでゐた。

初めはここで宿るつもりが、小舍は跡もないし、明日のコースが餘り長くなると氣がゝりで、先へ進むことにした。

此處を出發して右岸の苔の付いてゐる斜面を約五十米も登ると、遂に道に出逢つた。この道はツクヱの肩から廣瀬方面に通ずるもので、先途は蘚澤より京の澤に入るものである（歸路參省）。道は流から五六十米上方を流について溯る。此の道から見下した西澤は、今までの奔走狂亂から、すつかり落着いて見事な一枚岩の河床を夢の様に流れてゆく。響々たる怒號は聞れなくて、さらさらと絹ずれの様なせせらぎを調べながら、愛すべき流れを爲してゐる。紅葉の頃はどんなであらう。一體に西澤は落葉樹が少ないのであるが、何處ばかりは珍しくも落葉樹に蔽れて、秋は、霜に色付いた紅（くれなひ）を流すであらう。はけれども今は、燃え初めた若葉が、流れの早さを示しながら、霧をいとひて風情氣である。處々音も無く滑り落ちる瀧は、此の瀧水の見る夢に一種の階調を與へてゐる

空はいよ〳〵濃く曇つてきた。傾むく時を追ひつゝ京の澤小舍を目當てに進む。暫くして又流れに下つて徒渉する。が歩きいゝ所を

を繰返すが水の冷さが、午後の身に浸みる。道は分明であるが澤へ下つてからは注意を要する。

歩けばいゝ。やがて澤が大きく左に轉ずる所に、右岸からカラ澤が入つてくる。ここで徒渉をして右岸に移り、

間もなく蘚澤があらはれる。西澤本谷は再び削壁の中を流れ、從つて流れの溯行は不可能となる。小徑は蘚澤に

入り二丁程で、本谷との中尾根へ出て京の澤の小舎に降り濡鼠となつた爲に、すつかり氣力を失ひ、一刻も早く宿りたくなつた。そこで協議して蘇澤の鹿打の小舎で宿る事とした。

鹿打の小舎の位置は、道にかまはずに蘇澤を溯ると、本谷との出合ひから三丁程にして流れの右手にある。ほんの假小舎で、せいぜい四人の狹いものであるが、風は通さないし燃料は山程あるし、唐松の葉を敷いた床も惡くはない。蘇澤は水の痩せた暗い澤で、附近一體に、唐松梅の密林である。この谷からも國が多い爲に、鹿打の入りらむ道で、が、それはこの谷に鹿が多い爲に、鹿打の入りらむ道で、夕飯の濟んだ後の所在なさに日原の話しをしたが、水も見へない程に雪の積む西澤の有樣はちよつと想像が付かなかつた。

暗黑な晩であつた。焚火の屆く外は、黑白も解からぬ夜であつた。血を吐く樣に銳い鳥の叫聲が物凄く西澤の闇を震しつとした。西澤に死んだ人々の魂の樣に。我々はぞへかゝる犬の聲を聞いたからである。確に二聲三聲であつた。けれども唯それだけであつた。あとは澤の音のみしじまに響いた。

その夜の夢は、何時までも秩父の山々の上をさ迷つてゐた。

六月一日。（京の澤遡行）

起きて見ると天氣が面白くない。雲が低く垂れこめて氣が高くなつて行つた。苔に蔽れた倒木が算を亂てゐる。此の澤の夜は恐しい夢を與へた。日原腹の具合が惡いし、夢が惡いので歸りたいと言ひ出した。此處から歸られては何にもならないので、極力說いて

七時三十分兎に角出發する。

それは秩父の谷特有のものだけど、苔の蔽ひかぶさつた崖の濕地を行くことは、心持を嫌に濕めらせる。梅の小枝のやたらに出る。徒渉の冷さに身震ひをする。道は直ぐに中尾根へ登る。尾根の上は石楠の繁つた小徑で、左方遥に見下される西澤は、絶壁もなく、可成り明るさうである。暫く行くと笹が生えてゐて、道は二つに分れてゐる。右はそのまゝ尾根をゆきやがて蘚澤に入る。左を取つて降りてゆくと笹の小徑は西澤本谷の方へ降りてゆくが間もなく流れの邊りに出る。水量はあるがゆるやかである。對岸には黒金山への支脈が黒く迫つてゐる。川の邊りのちよつとした平地に小屋がある。之が京の澤の小屋で、蘚澤の小屋の所へ降り付き、暫く京の澤について窪地を行の上位置にある。宏さも相當にあつて十人位は宿り得ると思はれる。風も全然さへぎらるゝから暖たかであらう。燃料は澤山はない。伐木の勞が入用である。中央に鐵の自在鍵があつた。小屋の後から左に登りに移り、又三四丁にして京の澤と本谷とのドウ本社に通ずるものである。小屋を出ると道は直ぐ對岸に山奥の院道に沿ふて進む。やがて道は尾根へ上つて行つたので、離れて、二人とも未知な京の澤へ足を入れた。

さて地圖の奥の院道即ち國師道は確に誤りであつて、それによると、黒金の肩からカラ澤を降り、直に中尾根へ出る様になつてゐるが、實はあれから暫く上流の京の澤の小屋へ降り付き、暫く京の澤について窪地を行きやがて尾根へ出るのである。

暫く進むと道は笹尾根に向つて急激な登りとなつて
少く積石の上をたとれば
のあとが見へてくる。右岸は登れさうも無い程急であ
から澤は右に向つて廻り初めた。
曇つてゐた空が何時の間にか晴れて、濃い青空がひろくなつた。白雲が黒金山の方へしきりに飛ぶ。陽の光が
明るい澤一面に輝いて、朝から重かつた心の中が追々と輕くなつてゆく。やがて兩岸に痛を加へてくる。本谷との出合から約一時間程も歩いた頃
んに顯はれ始めた。さうして今まで平であつた澤が傾斜を加へてくる。本谷との出合から約一時間程も歩いた頃
澤が一度ぐつと右折すると、その奥にちよつと立派な瀧があつた。下水工事の溝の中
を歩く様な氣持である。此の瀧は京の澤第一の瀧である。頂度殘雪の爲に上から見上げるとちよつとこ
て落下してゐた様である。下の瀧の落口は、短いものではあるが事實谷、チムニーの中を落ちてゐた。兩岸への間
隔が一間ぐらいに狹つてどうして越すかにつき思案をめぐらした。
右岸は上方の枯木の生へた土に蔽れた岩壁で、下部が蔽はれてゐたので、よく解らなかつたが、二段になつ
の處へ、水の枯れた瀧が落ちこんでゐる。そして瀧に
途中一個所惡い所があるから注意せよ。
と瀧は雪穴の中を響々と流れて物凄かつた。

それから河床はぐつと急になつた。澤の積石の上を暫く行くと再び澤が右折する。其處に、第二の瀧がある。ど
ちら側を搦んでも上られるが、左岸を通る。瀧の上で日向に仰向に寝て若々しい陽をみる。
ぐ眠くなる。
流れはちよつとの場が悪いので右岸を通る。岩角を廻つたり、少さな瀧に濡れながら越す中に、第一の澤が入つてくる。
一時間、左手から三十分程、煙草を喫しながらぶらぶら歩いてゆくと、第二の澤が左手から入つてくる。出合
此の邊りに來ると所々殘雪が多くなつてきた。第一の澤も殘雪で半ば埋れてゐた。京の澤は非常に場がいゝ。
處々に堅い蹄のあとがある。日原か獵犬の樣に見入つてゐるので何だと聞いてみたら、鹿のあとだと答へた。皆
生々しい。それから三十分程、煙草を喫しながらぶらぶら歩いてゆくと、第二の澤が左手から入つてくる。出合
ふあたりに宏い平な處があつた。
京の澤の入口は盛んな倒木で、その上に傾斜が加はつてきた。暫くガラ〳〵の動き易い石の上を歩いて行くと
岩が大きくなつて堅くなり、澤全體が緩やかな瀧の樣になる。登るに譯はないが時々ふみ外すと流れへ落ちて濡
鼠となる。一時間も登つた頃、澤の眞中に一間四方程の草地の臺の上に出たので焚火をして休む。立つて見下す
と下が見へない。相當急だなあと思ふ。見上げる谷は水が細つて殘雪の間に時々姿を隱しながら、針葉樹林を縫
ふて上つてゐる。兩岸は美しい斜面で、焚火のあとがあつた。
無心に空を見上げてゐると眠くなるので出發する。もういゝ加減に天狗岩の方へ搦まねばならない所なので、
絶へず注意して行く。一度右方に岩峰が見へたので、藪の中をこいでみたが絶崖へ出て駄目だつた。二三、淹の

中を岩を這上ると、澤は二分してゐる。右を取つて、殘雪の中に足を入れたが、馬鹿に冷いので、濡れながら澤を行く。かうして雪を歩いたり、澤を歩いたりしてゐる中に、十二時半頃、左岸にガラの押してある下に出た多分岩小屋の下に出るんだらうと思つて、ガラ〳〵の石の上を汗に濡れながら登る。かうして半時間も登るとふと、道に出逢つた事は直ぐ解つたので、我々が國師の南腹を搦む道である。その道は國師の南腹を搦む道であつた事も解つた。林の中を行くと、あの栂の尾根へ出るんだらうと思つて、やがて岩小屋に着いた。

着くとまづザツクをおろして、一散に天狗岩に登つて履這ひになる。風は寒かつたが陽は未だ高かつた。一時半である。直ぐ眼の行く所は何と言つても西澤である。見渡す限り、西澤、木谷、サンメイ澤、京の澤が、隅々まで見られた。

奥千丈岳以南の尾根は一面の殘雪であつた。

丁度唐松の若芽の輝しい頃であつた。それは遥か東澤に、そして薊澤に、柔かに、青んでゐた。

陽の下に、靜まりかへつてゐた。けれども淋しくはなかつた。皆んな何事かを話し合つて、

だけど、それは耳には聞えなかつたから、耳にはさう思つた。皆んな何事かを話し合つて、

小屋には氷雪が在つたので之を排除して、一面に栂の葉を敷いた。

その夜は限りない寒さであつた。夕方から降り出した雪まじりの雨が、夜半には雪となつて眠りをさまたげた

そして幾度か結び兼ねた夢を見捨てゝ這ひ出した時は大能座の星等が、眞上に輝く頃であつた。四邊は靜かであつた。唯人の心のみが、その時から幾千年を經てゐるのであつた。總て成り出でし儘の姿であつた。

であつた。雪に飾られた山の膚は蒼白かつた。空には

六月二日（かへり）

輝いてゐた朝空が、見る中に濃い霧となつてしまつた。今日は再び西澤に降りて、オツクエの肩から大嶽神社に出る積りである。岩が無くなると笹尾根となり、所々八時半頃。尾根傳ひに下り始めると京の澤の窪地に入り、じめ〳〵した濕地を進むと、やがて京の澤と本谷との出合ひに出で小屋に入つて焚火をしながら一時間程休んだ。それから行路と同じく薊澤のドウに向ふ。淵の上に來た。一昨日から兩人共に腰具合惡しく、青息をつきつゝ釜を見下して休む。十二時である。何時までも休んでゐたかつたがキリが無いので出掛ける。道はよく踏まれてあるから間違ふ心配は更にない。約一時間程にして大上ると、ガラ〳〵の押出しに荒れた澤に出た。此處で晝食をとり、又綾くり休む。煙草の煙りがなびいてゆく。空には一面に薄墨色の雲が厚くなつてきた。それから約百米も登るとちよつとした肩につく。日原が何時の間にか眞赤な石楠を折つてくれた。それを持つて手洗窪の澤に入る。窪の入口に破れた可成り大きな小屋があつた。手洗窪はじめ〳〵してゐて、その上に暗い澤である。苔が一面に生へてゐて氣味が惡い。二時半息を切らしてツクエの肩に出る。右手に折から曇り初めた空に突立つ岩峰の姿が二個みられた。此處は西澤と大窪澤との中尾根の二千二十八米の肩である。下へ降れさうな所がある。五つ淵へ下れさうだ。

曇つた空で雷の音が始まつた。雁坂以南、雁に至る尾根が一目に見へる。三時五十分。又ぶら〳〵出掛ける。石楠を何時の間にか落してゐる。雨がぽつ〳〵降つてくると、時々紫の閃きが身を震せて貰ふ。東京

へ持つて歸れと言ふ。「唉くかい」と聞くと、「大丈夫唉くさ」と答へた。飯盒に入れて歸ることゝする。

折しも、又一閃のひらめきと共に、猛烈な雨となつた。急いで大窪澤の頭を廻り、走る樣は西から降りつけるナレイ澤、ヌク澤が行儀よく南面して並んでゐる。降りつける。東の谷に眼をやると、峠澤、青笹川、からうして降りしきる雨の中を轉びながら大嶽神社に降り着いたのは四時頃であつた。

III 秩父事情

吉澤一郎

【日原川本流に就いて】

去る四月の下旬、自分は友田氏と共に雲取より日原川の本流を降り日原へ出た事があつた時號に記錄だけを出して置いたが、後に耳に入つた事などを綜合してこゝに一文をものする。近の山川に就いては最近出た「山岳」の秩父號第二號に木暮理太郎氏が「多摩郡村誌」といるからそれをも參考して戴き度い。

三峰山脈の雲取山と後白岩山との鞍部は鴨澤の岡部源作によれば深ダワといふ相である。くタルミの事をいふ。岡部爺さんは廿五年も雲取附近の山仕事をしてゐるまあ云へば雲取の仙人であらう。

四月と云へば未だ殘雪は豐富だらうと思つたが山が秩父だけに大した事も無かつた。それでも雲取三角點の東

南のヒラには雪田が殘つてゐた。雲取頂上の獵師の假小屋を後にして凍雪の上を滑り乍ら深ダのは六時半頃であつたらう。鞍部に着いてから少憩の後いよ〳〵未知の澤に入り込んだ（七・五〇）

下る時、萬一の用意にとて立木に「大正拾五年四月廿六日日原川へ降る。商大・吉澤、友田」と鉛筆で書きして置いた。

暫くの間は急な所はない。又水もない。所々に尾根上の切明にある様な標木がさしてある。二寸位の釘が打ちつけてあつた。後で日原で聞いたら民地と官地の堺である相な。八時十五分ねて少しばかり水が流れてゐるものらしいから、水に困つた時は深ダワからこゝまで廿五分位しか要しない事である故、水のない三峰山脈に於いては便利であらうと思ふ。早大の會田君であつたらうと思ふが深ダワの大洞川面には水があると書いてをられたが一寸危險で降り惡い樣に思ふ。八時半、出口の右に大きな岩のある澤が北から落ちて居た。少し降ると今度は南四十度西寄りより澤が落ちる。八時四十分狹つた岩の間を過ぎると一寸した河原に出た。少し深い淵となつてゐた爲左の尾根を登つて又河原に降りて休む（九時）。瀧にぶつかつたので右を搦んだ。之が最初に出あつた瀧であるが大して大きなものではない。九時半北より小澤が來る、暫く行くと段々本流がせばまつて俄然右へ曲つて居た。此の時霰が猛烈に落ちて來て瀧の樣だつたのには驚いた。本流は急に右に曲つて二尺位にせばまり、小さな瀧となつて岩の間を落ちてゐるのですぐ眼の前にある小尾根を越えた。又暫くは河原を傳つて行く。霰は雹と變つて來た。兩岸が迫つて樹が重なり合つて嫌に陰氣だと思ひながら行くとふと左側に細徑らしいものが見えたので登りかけると、右手に大きな澤が落ち合つてゐる

のを發見した。此が雲取三角點より東へ走る尾根の南側の澤で東京市水道部の地圖には大雲取澤と呼び度いと思ふものである。因みに郡村誌によれば唐松谷の上流に小雲川あるから自分の名稱の方が妥當であると思ふ。此の大雲取澤の落ち口は小さな瀧となり、本流の中央には上がある。此處へ着いたのは九時五十五分であつた。之よりは又暫くの間河原をぐん〳〵と雪に降られるのは餘りいゝ氣持ちはしない。

幅の廣い瀧を右から降りると本流は又直角に左へ曲つて居て、其の先は瀧になつてゐるので右の尾根を登る事にした(十一時五分)。此處の特徴は尾根の乘越に岩が二本出てゐる事だ。降りは馬鹿に急で河原がいやに下に見える。注意して降り、平な河原を傳ふと又澗に出合ふ。

のぞき込んだら左側の方が深くもないらしいので尾根をへつるよりも早いと思ひ徒渉してしまふ。膝のあたりまで入つてしまつた。友田は躓いて危くずぶ濡れになる所であつた。其の内に雪が止み、陽が出て來たので、まるで開放された樣な氣持ちになる。正午又深さうな澗にぶつかつたので左へ登る。之は隨分登つた。偶々右へ搦まふとしたが急峻の爲斷念し、約百米突の上から脊中合せのヒラを本流さしてずり降るのヒラを本流さしてずり降る。身の丈位の笹の降りもたどりつき幸ひ陽も出てゐるので晝飯を食ふ事にし、焚火を起して、臍から下の總てを乾かす。

獨立標高點一、七〇八米突の東北に、等高線の數字あるが尾根が出てゐるが、其の北側の澤は東京市水道水源地圖

によればゴンエといふらしい。これは先のへつりの間に見落してしまつたのは残念であつた。

晝飯に大部時間を費して了ひ、出發したのは二時十分であつた。すぐ瀧にぶつかつたが又續き相なので右へ登ると人の通つた跡らしいものがあるのでどしどし登つてしまふ。百米突ばかり登ると降る徑があつたので、それをとると又河原に出た。焚火の跡がある獵師の偶然にも此處は長澤谷と本流との落合であつた（二時五十五分）。又そろ〳〵雹が降つて來たので急いで出發する。所が中々おいそれとは河原を通る事は出來ない。ものすごい深淵と瀧と岩壁の爲に前途は閉されて了つた。

尾根を搦む事も容易に出來ないので降つて來た徑を又登り返し、いゝ加減な所から遙か下に淵をのぞみ乍ら搦みはじめた。途中友田氏が向側に變なものが見えるといふのでふと眼をやると成程變なものが見える。トンネルの入口の樣だ。門構へのトンネルだ、小屋の樣なものもある。ハテナそろ〳〵錯覺を起しはじめたかなと心配はしてみるがどう見ても小屋に畠だ。後にわかつたがこれは錯覺でもなく、正眞正銘の小屋と畠でワサビ小屋と稱し、唐松谷の東の小澤ナグリ澤の上にあるらしく日原の人がこゝまで來てワサビを育てゝゐるとの事。

幾度も下へ降りかけたが其の度に下に見えるのは河原でなくて深い淵であつた。やがて今自分等二人の居る所から下は急な斜面で一度滑れば間違ひなしに其の瀧壺にはまつてしまふといふ樣な所だ。上へも下へも行かれず進退谷まつたが勇氣を振起してへつる事にした。氣がつくとさつきの小屋は何處かへ見えなくなつてしまつて、その代り谷に橋の樣なものが架けてあるのを見た。よし彼處まで行けばどうにかなるだ

らうと決心して下へ降りはじめた。岩の上に立ち、今へつつてから降りた所を見てよくもあんなだと感心した。……やはり橋であつた。（四時五分）

これで雲取の鞍部よりこゝまで晝飯の時間をぬくと七時間を要した事になる。此の橋のすぐ下落合でそれは又瀧となつてゐた。つまり日原方面よりはこゝまで完全な道があるのである。橋のしてゐる。一つはさつき上から見えたワサビ小屋へ行くものらしく、又一つは唐松谷へ登るもの人の言によれば唐松谷には徑があり、雲取まで行けるとの事、こゝから日原までは可なり長かつた。分やつと山上屋の爐ばたへ坐り込む事が出來た。七時三十五

要するに日原の本流は長澤谷と唐松谷との間が問題であつて、殘りの部分は少し澤歩きに經驗に容易である。然し兩谷の間は人間業では一寸通れないと思ふ。地圖の簡單なのにはいつも乍ら次に蛇足ながら日原までの事につき少しく書く。

●四時半——道標（右雲取山道左唐松谷道）前者は北々西に向つて登つて居る。これは長澤谷を横切つてるらしい

●五時四十分——道標（右天祖神社參道左雲取道）雲取へ約三里、長澤山麓約一里半、唐松山約二里半とあつたが意味不明瞭、天祖神社とは地圖に白石神社とあるもの。

●孫曾谷へつく前に天祖神社裏參道と書いた道標もあつた。

●地圖に大日谷とあるのは日原邊では小川谷といふ方が普通らしい。大日谷と云つても變な顔をして居た。此の谷は上まで徑があり、三峰神社へ參る時は大日向へ出て行く相である。

●三峰圖幅の日原川とある日の字の所へ落ちる澤は八町谷。
●秩父大宮圖幅の一、二七六米突獨立標高點ある尾根の西のは鷹巢谷で、五日市圖幅の鷹巢山はあれでいゝらしい。

【丹波より將監峠へ至る捷徑】

此の徑に就いては田島勝太郎氏が其の著「山行記」及び「山岳」の秩父號第二號に於いて一寸書かれて居るが詳細に就いては不明なる爲、自分はこの十月に歩いて見た。同行者は村尾氏と近藤氏であつた。

今丹波よりこの將監峠へ行く道として三つを擧げる事が出來る。最も普通のものは多摩本流に沿ひ落合部落に出で、それより犬切峠を經て市ノ瀬又は三ノ瀬よりするもので、第二は丹波より後山川の三條湯へ行くサヨウラ峠に至り、天平尾根を登り、飛龍の南面に於いて東京市の環狀林道に合し、大した上下もなく國境尾根の南面を搦んで至るもの、第三は自分がこれから説明せんとするものである。

丹波を出で奥秋の部落を左下に見て、サオラ、熊倉の二澤を過ぎると餘慶橋により青梅街道は多摩本流を渡るが、此のあたり景色としては可なりなものである。田島氏の本では橋を渡らずにすぐ右に小徑を入る様に書いてあるが、實はそれは遠まわりである。自分もそれを通らうとしたのであつたが幸ひにも小菅で中川金治氏に遇ひ、色々お話を聞いて此の徑をとらなかつたのである。

橋を渡つてもの〻五分も歩るくと地圖の通り本流がへの字に曲つた突端へ來る。こゝで一寸注意すると急な崖

を降る徑がある。藤蔓につかまつて降り、丸木橋を渡ると小常木川の落合に立つ事が出來る。此處から見た多摩の上流もいゝ。地圖によれば兩岸崖で通れない樣であるが水量が馬鹿に少ないから眞中を通る事が出來る。

天平尾根の獨立標高點ある一、九三九米突の火打山から出る火打岩谷と岩岳から東流するナメドロ澤の合流點から左へナメドロ澤へ入るとすぐ左岸に炭燒のらしい小屋があつた。餘慶橋を渡らずに來る徑はこゝで合するらしく思はれる。岩岳から來る尾根の北面を一、一二五米突附近は其の北側をジグザグに登り、尾根筋よりは約百米突位下を横に搦み乍ら段々と登つて行き、一、三六〇と一、四〇〇の數字の間の鞍部に出で、今度は尾根の西面を巻いて岩岳三角點の西を通過し、三角點の東北の鞍部なる小常木タル又はハシカキノタルよりヂグザグに大常木谷の常と木の中史あたりに降りつく。途中谷から約五分ばかり上の所で會所小屋に行く林道が別れてゐた。會所小屋は大の字あたりにあるのだらう。次に常の字の左側にある尾根を二百米突ばかりまつすぐに登ると會所小屋よりの徑が合する。これから徑は等高線沿ひにシナノキタル（一、五三五米突の北の鞍部）に出る。これからも亦殆ど上下はなしにモリ尾根の西側を巻き、龍喰谷を千四百米突附近でクロスし、其の脊中合せの楯ノ澤をよぎり、楯ノ澤の西側の尾根を植林地中を二町程登ると左から來る林道にぶつかつてそれを東に進むと、やがて徑が二岐する故右下のをとるとすぐ將監峠の東京市の小屋に着く事が出來る。龍喰谷を渡る時に左手に「古小屋」と稱する小屋の跡があり、楯ノ澤の右岸には楯ノ澤小屋がある。

又將監峠附近の道路は非常にやゝこしい故圖によつて說明しやうと思ふ。

A點は地圖の將監峠、B點は東京市水道部の監將峠、C點は實際の將監峠なり。

1は牛王院小屋、2は東京市の小屋、3は楯ノ澤の小屋、4は古小屋、これは使用出來ない。天目尾根を通過する三峰道は惡い相だ。楯ノ澤小屋の左手の點線道は近道にして林道にあらず。

【將監峠以東の新道路】

此の六月に完成した所の東京市の林道につき一言したい。それは東京市の將監峠から龍喰山(二、〇一二米突)飛龍山(二、〇六九米突)大洞山(一、九四九米突)等の南面を卷いて狼平の雲取小屋に達し、進んで雲取の西面をすぎて七ツ石山に至るものである。左に中川金治氏直傳の說明をする。

將監峠——飛龍(一里十五町)……一時間半

飛龍——雲取小屋(一里廿町)……一時間半

雲取小屋——甚助小屋(一里十町)……一時間廿分

林道は飛龍三角點の南の神社を通るが神社と三角點間は六町しかない。雲取小屋より雲取三角點までは八町で上り三十分、下り十五分かゝる。狼平とは千八百四十米突を算する雲取、大洞間の鞍部である。新設の小屋はこゝの南面にあり、便所は埼玉縣にあるとの事、水は小屋より東へ林道に沿ふ事三町で林道と別れて北上にある。甚助小屋はシヨ澤の源頭、七ツ石山の西北にある。

尙詳細は「山岳」の秩父第二號或は田島氏の「山行記」を參照せられ度い。

【雁峠より栃本に至る徑】

地圖の將監峠で水神社への林道をとり約廿分歩けば唐松尾三角點へ約六町と書いてある所へ出て、十字路になる。北すれば秩父山に至る。栃本へ約五里半、南すれば市之瀬へ廿町時間行くと一寸平な所へ出て、十字路になる。北すれば秩父山に至る。栃本へ約五里半、南すれば市之瀬へ廿町落合一里廿町、といふ様な意味の道標が立てゝある。

市之瀬へ降るのは地圖に點線のあるものであらうと思へる。栃本へ五里半といふ徑は黒エンジュの頭附近を通つて北に走る尾根を降り、之から説明する雁峠よりの徑と會して栃本へ向ふ。將監峠より雁峠までは林道による時約二時間半で濟むだらう。

自分の通つた雁峠より栃本までの徑は雁峠の西北のタルミなる燕ダルミより瀧川へ合する澤は葡萄澤であつて、その下流にて南より即ち黒エンジュの頭と唐松尾の間から合するのはクマアナ澤である。

此處から下へ降る所は去年あたりは非常に分明であつたが今年又行つて見て手入れのしてないのに驚いた。尤もこゝから栃本行きは一寸危險な所があるからもう手入もせず廢道にしてしまふのかも知れない。

ダルミを二時に出て五分ばかりは笹の中を降る。直ぐ小屋跡が左手にあつてもう笹もなくなり、笠取山の北の尾根の突端をまいて行くと右手から渡り、笠取山とある笠の字から北すれば右手に小屋の跡の澤だと思ふ。又本流に沿つて少し降れば右手に小屋の跡があつた。この

スダレ的の瀧が來てゐる。笠取山とある笠の字から北すら約五、六分で大きな仕掛の製材所の

父特有のしつとりした氣分に充ちてゐる。やがて右岸へ

がある。草刈鎌や鍋の錆びたのが散らばつて居た。之か

傍の右岸には可なり大きな澤が流れ込んでゐる。多分笠取と黒エンジュの頭との間から出る澤であらう。小屋は左岸にある。水車式の製材所で八ケ岳の赤岳鑛泉へ行く人が北澤と南澤の合流點に見るのと同じ形式であつた。どうもこんなあばら屋に密生してゐる雜草と周圍の樣子を見ると自分でも何となくいゝみりしてしまふ。

この小屋の所から右岸に渡ると徑はぐん〳〵登つて行く。葡萄澤は遙か下に瞰る樣になつてしまつた。何十年かの昔は立派な道であつたのだらう。仕掛けは可なりなものであるが殆ど破壞されてゐる。何だかものすごくなつて來る。三時廿分ばつたりと右から來る徑にぶつかつた。それには今自分等が通つて來た徑の事を（コノサキハ危險デアリマスツウコウオヨシナサイ。左ハ市之瀨ニ至ル）といふ風に書いてあつた。自分の考へでは此處は千五百六十米突と千六百米突の間の多少平地を示す所位で、先に書いた十字路からの徑は此の尾根の東側を降つてこゝで合してゐるのだらうと思ふ。これからは猛烈な降りで約四十分にしてクマアナ澤に着いた。こんな深山としては立派な橋により渡りる見ともう自分等は瀧川谷の右岸にゐるのである。水晶谷は遂に見る事は出來なかつた。クマアナ澤の落合から一町も行かぬ內に小屋があつて、これは又立派な釣橋により徑は瀧川谷を渡り左岸へ移つて居る。小屋の側に又道標がある。（右雁峠を經て市之瀨、高橋、左將監峠を經て同じ、四里半）としてあつた。前者は自分等の通つて來たものであるが後者は一體何處をどう通つて行くのか全く解らないが、想像を逞しくすればこの徑は唐松尾の三角點に達してゐるのではないかと思ふ、唐松尾を出したのは別に根據がないのではないのだ。釣橋を渡るといきなり百五十米突ばかりヂグザグに登らせられて後は平の樣な降りとなる。瀧川の左岸遙か上を捲いて行く事約四十分で雁坂峠から水晶尾根を經て來る徑と合

する。其處の道標は次の如し。

（左は是よりバラドヤ林道――雁峠及び將監峠を經て何れも神金村に至る。右は雁坂林道――雁坂の舊道に國境尾根の三角點一、八二八米突より北に曲る尾根の千三百米に至りて合す。栃本まで三時間）此の合する點は水晶突附近と思ふ。約廿五分にして豆燒澤の橋を渡る。自分等は此處で日がどつぷりと暮れてしまつた。次の大きな澤を渡る頃遙か下の瀧川谷にランプの光の明滅するのを發見したが、それは下、駄小屋である事が後にわかつた。豆燒澤より一時間十分で雁坂峠の大きた徑に合した。合する所の大村方へ着いたのは八時も過ぐる三十五分であつた。

水晶尾根を通る雁坂道は新道であるが舊道より一里半も遠くて又徑が實に根性曲りに出來てるから通らない方がいゝだらうと思ふ。然し葡萄澤は忘れる事の出來ない谷である。あの製材所の跡の邊はズーデルマンならずともゆかしい小説の題ともする事が出來やう。自分は豆燒澤を探ぐる積りで栃本へ出たのであるが、又あの變な道を戻るのが嫌なのでやめてしまつた。見た所割合水量も少ない樣であつた。

【石塔尾根に就いて】

子酉川の上流は二股に於いて東澤、西澤に分れてゐる。そしてこの兩澤の間にある國師岳の肩つてゐるのが石塔尾根である位の事は誰でも知つてゐるだらう。然しこの尾根道については餘りらしい。今度自分等は偶然にもこれを通る機會を得たのであつた。西澤を遡らうと思つて二股の小屋を出たのは

此の十月十二日の朝六時廿分であつた。廿五分ばかりで大窪澤の瀧を過ぎて魚止の瀧に達した。左岸に踏あとを發見して高廻りを爲し、大きな釜の一寸上で河原に降り、小さな淵の連續を左にして少しへツリ、左に薙を見る所の手前で再び河原に降りたが再び可なりの瀧にぶつかつたので右をめがけて登つたが、之が抑々西澤遡行に失敗した原因であつて、石塔尾根を登る結果となつたのであつた。此の瀧の下を多分鎌倉淵といふのであらう。一度河岸へ降りたがV字型の典型的な谷で殊に滑石と來てゐるから勿論河岸をへツる事もならず、又對岸へ渡るには中島氏の文を見られ度い。又早大山岳部の先輩書上氏は「山岳」第十七年三號にこれに關して書かれて居る故ついて參考せられ度し。

段々登つて行くとどうもたゞの尾根ではないらしい。人の通つた跡が可なり明瞭である。それにやせ尾根で所々に鉈が入つてゐる。さうかふ思つてゐる内に石塔尾根の尾根道に合してしまつた。獨立標高一、四六二米突附近と想像される。十時十分に合して暫くの休憩をとり、出かけたが地圖に點線のある徑それが無くなる邊までは徑らしい徑であるが其の後は單なる切明それも神寂びたものであつた。こゝに切明のあるのはこの尾根筋が西澤御料地と東澤御料地との境となつてゐるからだ。十一時半可なりな岩峰を越えた。このあたり切明不明瞭。一時半宮内省の三角標石があるなと思ふと、すぐその上に三等三角點二、〇八六米突の標石が藪の中に筍の様に出てゐるのを發見した。こゝまで來るのに手間のとれた事は實に閉口した。これから二、二六二米突の獨立標高點までは

は所々切明が倒木の爲に消されてゐるのがあるだけで注意すれば何の事もないであらう。國師、境尾根と今の獨標との鞍部までは案外近かつた。こゝらは石塔澤へも南面の薊澤へも容易に降れ相な下生えの比較的少ない樹林である。

これからいよ〳〵國境尾根の最後のアツセントとなるのだが其の急な事霞澤岳のそれも及ばぬ約一時間半を費して例の花崗岩の岩峰に達する事が出來た。

過ぐる大正十三年の晩秋、親しき友湯淺とそして小栗上流やそれをめぐる木賊、甲武信、ミヅシ、や怪偉な鷄冠山等を眺めた時、それは實に思ひ出深き處が今また再びこゝに立つて周圍の秋色をうちながめると自分と秩父といふ親しい感慨が何處からにじみ出て來るのであつた。あの釜澤の奥で今こゝに居つた所はどの邊だつたらうか。あの木賊のガレの下の藪でるペンちやんと人のいゝ渡邊と三人で假小屋を造つて寢れからそれへと三人は苦しめられた事もあるのだつた。

追懐の情は泉の如く絶えない。

こゝから約卅分で國師の三角點へ着く。三繋平へ着いたのはそれから間もなくで、自分等は五時半遂にこゝに焚火を起して夜を明す事にした。村尾氏の携帯テント一枚を屋根として小屋を急造し、誰かの殘して行つた薪を一晩中たき明した。藍よりも濃い寒空には栂の梢を徹して無數の星がまばたいてゐた。

氣流に變化を起した爲か(?)猛烈な勢で霰がザツアと落ちた來たが咽喉に水氣のない自分等には實に天惠であつたのだ。然し秋酣の今野天に寢るのは可なりの寒さを感ぜしめた。

【其の他】

●廣瀬に寄つて晝飯を食つてゐる時、一人の村人がやつて來ての話ではこの十日に測量が終つて、來年あたりまでには東澤の上流信州澤と釜澤の落合まで立派な道が出來、それがやがては梓山にまでも達する事になるであらうとの事。

●增富ラジウム金泉湯から韮崎に出るのは非常に便利になつて、今は日向を通らずに本谷川沿ひに鹽川へ出られる。今は中尾(韮崎圖幅の中小倉とあるすぐ下に避病院の記號があるすぐ下の邊と思ふ)から自動車が五十錢で韮崎まで行くがやがては八卷まで延びるらしいのでさうなれば大變便利だらう。

●中川金治氏の話では七ツ石より鷹巢山の南面を通り氷川に降る林道が最近出來上るとの事。

かくして段々と秩父の山々が開けて行く事は或る一派の登山家には閉口な事であらうが自分は非常に嬉しく思ふ。殊に東京人にとつては便利であるばかりでなく、種々の起り得べき危險が減じられて行くのであるから大いに祝福すべき事柄であらう。

——木暮理太郎氏は曰く「東京市水道水源地圖」は餘りあてにならぬと。——

追憶——Gruppeになるまで

奥野綱重

圓覺寺にある濟蔭庵の庭、芝生の上に三人の如意團同士が仰向けになつて日向ぼつこをしてゐる。齊座の前の隨意座だ。山內の梅は名殘なく散つて春も愈酣になつて來た事を知らせる。然し裏山に鳴く鶯の聲は若々しい。南陽を全身に浴びて若しか話でも杜絶れゝば直ぐ睡眠に陷ると思はるゝ位いゝ氣持になつてゐる。

だが話は仲々盡きそうもない。爐端接心が芝生接心になつた譯だ。老師の事から禪堂へそれから山へと話題が移つて行く。

□

——僕等が常に事物に對するに飽くまで自己と對象とを對立せしめる。自己を充足せしめる爲の對象と考へる自己の生活に趣を副へる飾物、附加物とする。たとひ偉大なる自然にしても單に自己の生活の背景としか見えない。然しその事物は總て自己の爲に造られたものとは限らない。皆きながらの姿と意味を有つてゐるのだ。玆に於て妥協か然らずんば淺間しい醜い葛藤だ。互に傷き合ふ。僕の樣な弱虫は種々の氣苦勞と自己の無力の省察とより昏倒して了ふ。

此の時更生の道を教へて呉れるのが宗教だ。坐禪の如き方法により或は念佛の如き道により自他對立を滅却す

る境地に至るべきを示してくれる。僕等はかくする事によつて以前の煩悩より脫却出來るのみならず事物の眞景が見えて來る、如實の心とぴつたり會つて來る。

——そうだ。山へ行く氣持もそれなんだ。喧煩なる都會生活より逃避して幽寂なる山にて靜かな生活をせんとするのもその宗教的感情さりだ。そしてその境地に入つた時益都會生活が煩しくなる。山へ行くもまた行かなくてはならなくなるのだ。

——山の生活は禪堂の生活だ。

——登山は坐禪や念佛の如き無風味な方便によらずに山に對する崇敬を機緣としてその境地に悟入するのだ。

——然し山許りだとは限るまい。エマーソンの言つた様に荒涼たる沙漠にあつても崇敬の念を抱き得ると思ふ。

——尤もだ。然し山に於て最も敬虔なる崇高感を喚起される。仰も崇敬の念は或大（グローセ）さに對する感情なんだ。その平原或は大海に對して崇敬の念を感ずるのは平面的グローセに對してのみだ。山が我々に與へる感動の主要原因としてはこの平面的グローセ卽ち高さを有する點だ。若し高くのみあつて廣さがなかつたらあの莊嚴なる力はあるまい。同時に廣さのみあつて低かつたらあの崇高は見出せないだらう。それにあの不動の姿だ。飽まで不動と沈默とを以て嚴然と存在しその中に充實せる生命を感ずる。ジムメルのいふ地上の生命より超越した生命を有するのだ。

——そうすれば山を征服するといふ感はあり得べからざることだね。

——そうだ。山頂に辿り着いて山を征服したといふ感を抱く人でも麓からその山を仰いだ時少くとも瞑想的氣

分になつたに相違ない。然し一度その上に登ると周圍の群山が脚下に見え又同等の高さにからして畏敬の念は薄れて自我の昂揚のみ強くなるのだ。

——僕等はそんな自然を征服しやうといふ大それた考は抱かずに默つて山の懷に——宛行くと同じ樣に入つて行けばよいのだ。そうすれば僕等は再び幼兒に還り幼年時代のあらゆる天眞と無邪氣とを恢復する。平常の習慣規則よりすつかり抜け去つて自分自身にとつても未知の人となり母胎より出た時の赤子の心の狀態に復つて行ける。

□

當座を告ぐる板木が山內にこだまする。三人は立上つた。

東俣谷の美林

中川孫一

一

小屋から四五町谷に沿ふて上ると林鐵の終點になつて、賣店の前に出る。其前の崖を登ると、もうそこから東俣谷の美林が始まつた。私は今迄にこれ程美しい膚と幹とを持つた木を見た事はない。木曾の檜の良材！　木曾の美林！それは已に人口に膾炙した事實であつて、私は幾度かそれを耳にした。木曾の檜の柱や、天井板を見た事は何處であつたか。然し此東俣の木――それは檜ではなく椹ではあつたが――餘りに想像とはかけ離れたものであつた。百の説明も、千の講釋も到底此眞景の半分も寫し得ないであらう。幹はさのみ太くはないが、枝下は六七十尺にも餘り、地上二三十尺が程は殆んど變らない太さを保つてゐる。直線と均齊の織りなす整正の美よ！　實にも天の成せる藝術品である。遙か百尺の樹頭は蓊鬱として茂り、梢頭はさだかには見えぬ。

（我は元、木曾の檜よ、白雲を頸に卷きて峰高く空に聳えき）

小學讀本の此一節は眞に此狀を寫して餘蘊なきものである。峰から峰、澤から澤へと茂つた其數は恐らく萬を以て算へねばなるまい。

「立派だねえ」

案内役の高橋君さへ三嘆してゐるのである。私も杉の並木は幾つか經驗した。高尾山道、武州御嶽山道、日光街道と。乍併、太さ、高さに於てこそ優れ、樹相と數に至つては到底比すべくもない。感嘆の言葉の代りに我知らず深い太息を洩らすのであつた。

「あゝ……」

詞なき感嘆。驚嘆の極である。

此美林の中を軌道に沿ふて奥へ奥へと進んだ。此頃から空は愈々暗く雨は又強くなりてきたそして雷さへ鳴りはじめた。幸に風はさまで強くなかつたが雨は數千の銀箭を射かける様に林を縫つて前から、後から降り注いだ。傘の中まで飛沫がとんで私の眼鏡は忽ち曇つて三四間先は朦朧と一面に暈かしたやうになつてしまつた。雨は段々強く遅れて全山を揺るがす雷鳴が鳴りはためいた。自分の服裝を顧みて私は慄然とした。鋲の多い靴、金の石突のついてゐる杖、眼鋭、金の柄の洋傘、喬木林の中、そして鐵道線路！　まるで尖の錆びた避雷針を背負つて雷に近づいてゆくに異らない。ぢきに斃むだらうと思はれた夕立は、時の經つにつれて一層猛烈になつてきて、下半身は水浸し同様になつてしまつた。に辿りつく事が必要であつた。颯！　白紫色の光が目の前を掠めた。と間髪を容れず、耳朶を擘くやうな雷鳴が轟いた。思はず足が竦んだ。足をとめて振返ると十間程後から高橋君がにや〳〵笑ひ乍ら寄つて來る。

「今おどけて立停つたねえ」

「傘の柄が怖いよ」

「落ちりや死ぬばかりさ」平氣である。

漸々運材日傭人夫の小屋が見え出した。檜膚葺の粗末な、×組日傭小屋」そんな嚴めしい標札の懸かつてゐる小屋もあつた。徑に沿ふた或小屋の側を通つた時に激しい雨聲に、交つて赤坊の泣く聲を聞いた。運材人夫が家を擧げて此山中に移り住んでゐる事を私は初めて知つた。徑は尚林中を迂餘曲折して奥へ奥へとついてゐる。

岐路に來て私が立止ると高橋君がうしろから右！とか前！とか怒鳴つた。時にはまだ枕木ばかりの軌道を辿らねばならなかつた。濡になつて流れてゐる所もあつた。と滑つた。そこには割栗石の代りに溜水が待つてゐた。眺望所ではない。一歩も踏み外すまいと足元にばかり注意せねばならなかつた。雷鳴は凄じいのを最後に熄んだ。日傭小屋が、標の右手に現れた「瀬戸川貯炭倉庫」墨黒々と書かれた標札が懸けてある。

「其處だあ」

背後から實さんが景氣よく怒鳴つた。

□　□

□

小屋主の安さんは心から歓待してくれた。見る〳〵爐には炭が山の様につがれた。其上に衣更掛をかけて私達の濡れた襯衣を乾かす用意をしてくれた。

「さあ、此浴衣とお着換えなすつて」

安さんは私に浴衣をすゝめた。炭は青火をあげて熾りだした。爐端に横になつてるとズボンから濛々と水氣が立昇つた。爐は土間につゞいてゐる。土間の端は扉である半開きになつた扉の隙間から、山峡の雨景が手にとるやうに見える。小屋の一町程東になだらかな丘陵がある。地肌は一面に熊笹に蔽はれ、其熊笹の間から苔蒸した檜や柱の大木が蟲々と聳えてゐる。もうらの枯れたのや、朽ちてのめりかゝつてゐるのもあつた。サーツと音して夕立が其上に降り漲ぐ。熊笹は雫に打たれてヒヨイ〳〵と頭を下げる。濡れた葉がどうかするとチラリと白く光る。夕立は尚も歇まずにふりそゝぐ。蓑笠姿の人夫が蔦を肩にして其裾を通りすぎる。雨はまだ小屋の木葉葺を打つ。

其音をきゝながら私はふと此小屋に一夜を送つてみたいといふ好奇心に動かされた。此山峡の雨に烟つた山峡の夕くまで味はつて見たいものだと思つたのである。

「今夜こゝに泊りたいな」

飴を麥こがしにまぶしてゐた安さんはヒヨイと頭を上げて私の方を見た。

「どうぞお泊んなすつて、何もへゝ御馳走は無えけんど」

私は少し答にためらつた。官舎を出るときに、泊るとは云つてこなかつたのである。

「ね、是非、さうおしなすつて」

高橋君は其後についた。

「俺は今日どうしても官舎まで歸るから倉澤さんへせえつときます」

私は到々決心の臍を固めた。

安さんはまめ〳〵しく米を磨いだり、味噌汁を拵へたりしやぶり乍ら、自在鉤にかけてぐら〳〵煮立つてゐる汁鍋を見てゐると私は去年の赤城の天幕生活を思ひ起した。其時私の目はゆくりなくも、安さんが今入れやうとする藥のやうな汁の實にとまつた。

「それはなんですか？」

「小松菜ですよ」

「えつ、小松菜？」

安さんは私の目の前に手を突出した。ほんの芽生えたばかりのういういしてこんな菜がこんな深山にあるんだらう）

「どこから持つてくるんです？　王瀧からですか」

「前の畑にありますよ」

畑？　怪まずにはをられなかつた。

「なーに、日傭（ひやう）のおつかあが蒔いたのを貰つたんで」

屋上方二尺の箱に菜を蒔く人もある。街路樹の根本に花奔を植える人もある。それを大都會の眞唯中に自分は屢々見た。そして土に親む都會人の心持に同情をもつた。併し、此木曾の深林中に、熊笹を刈り木の根を堀り起して畑を作る人を見出した時は形容の出來ない意外な驚にうたれたのである。

檜作りの仕事机を食膳に据えて、四人は夕餉の箸をとつた。安さんは一杯のビールにも赤くなつた。私は此の味噌汁と御飯のさゝやかな夕餉を心からの滿足を以て椀を重ねた。

山峽にはもう夕闇が迫つて來た。雨は漸く熄んだ。が空には灰白色の雲が厚い。此大深林には日沒の壯觀はない。然し、梢洩る光にも落日の衰は見えた。微に〳〵林の間に鳩羽色の薄闇が忍びよる。靜は其色を增した。瀬戸川源頭の水のみ淙々と岩走る。其水音を壓して一段高く、

「キ、キ、キコ〳〵〳〵〳〵〳〵キ、キ、キコ〳〵〳〵〳〵〳〵」

杣夫の鋸を磨ぐ音が鋭く響く。

——山峽の朝——

黎明の光は千古の大深林の奥にもほの〳〵とさし初めた。夜來の雨は霽れた。眞夏とはいへ五千尺の小中尾峠下、瀬戸川源頭に近い此炭燒小屋へは曉の嵐氣が壁板の僅かな隙間からさへ、刺すやうに忍び寄つて來た。

私は身慄ひして起き上つた。圍爐裡にはもう炭火が勢よく熾つて居る。荒削りの板で作つた形ばかりの扉を排

して外に出た。雨はあがつたが濃い朝霧が百尺の樹頭を包んだまゝ、じつと動かぬ。眞夏とは思へぬ程肌寒い。靜かな曉だ。本當に靜かである。模糊とした霧の裾を透して二號の篭が墨繪の様に霞んで見える。安さんは朝餉の支度に忙がしい。

「安さん、お早う」

「やあ、もう起きなすつたかね」

と一寸米を磨ぐ手を休める。

「昨日の夕立で水が出る様になつたよ」

安さんは嬉しさうに筧の方を眄に見る。

「濃い霧だね、これで晴れるかしら?」

「さあ、どうかね」

恰度杣夫が通りかゝつた。

「××さん、天氣はどうずら」

「今日はまあ降りだあ」

「××さん、天氣はどうずら」

「今日はまあ降りだあ」

素氣なく答へて通り過ぎる。時刻を告げる鷄の聲が山峽の靜かな空氣を震はした。

「安さん、こんな所にも鷄が居るんですね」

「日傭の小屋に居るだね。役人が來た時の御馳走でさあ」

米を磨ぎあげた安さんはぎいつと扉を推して小屋の中に消えた。

私は歩き出した。雨と露とに濡れそぼつた笹の葉が氣味惡く足の甲を撫でる。

靜かな朝である。二三丁下手の日傭人夫達の小屋から朝餉の煙が軒端をこめて、むら〳〵と立昇つてゆく。長閑な、平和な、此山峽の朝は、都會の雜沓に慣れた自分には驚異の世界であつた。小屋の横に桂の大樹が一本伐り倒されてゐる。遠からず森林鐵道が敷設されるので、木曾五木以外の木は、どん〳〵伐られてしまうのである。何時かは朽ち果てるとは知り乍らも、伐り殘された切株のいた〳〵しい姿を眼の前にしては、何ともいへない愛惜の哀愁に打たれて私はそこに立ちつくした。青く苔むした二抱もある檜の大樹も無雜作に輪切りにされて横はつてゐる。鋸目も鮮かな生々しい切口は夕立と朝露とにしつとりとぬれて、檜特有の甘酢い木香がぷんと鼻をうつ。私は切口の年輪を數へ始めた。一つ、二つ、三つ……二百七十餘年、三世紀近くが間を、靜かにこゝに立ちつくしてきた巨木である。それもやがては楔を打ち込まれて千々に碎かれ、炭に燒かれて空しく一握の灰と化すか、又は枕木に敷かれて雲深い木曾路の土とならねばならぬ。

切株に立つて遥に林の奥を望めば、晝尙暗い千古の處女林は、迫り來る鋸斧をも知らぬ氣に、しえ瀬戸川源頭の水は潺々と岩に囁やきながら、其木の下闇を縫つて流れてゐる。

「噫、此原始林も皆伐られる時が來るんだ」私は名狀する事の出來ない寂しさに打たれた……。

「中川さあん。御飯が出來ましたよう」

安さんの元氣のいゝ聲が小屋の中から聞こえてきた。

附錄

如水會山岳會
一橋山岳部合同大懇親會について

如水會山岳部が今夏登山期を前にして忽如として組織された事は非常に悦ばしいことであつた、のみならずその部員の顔振れが必らずしも若い血氣の先輩だけで無く否むしろ御老體と申上たい人達がその大半を占めて居る。此には登山の民衆化を問題にされる今日ではあるが、こうした人々が山に深い注意と興味を惹きおこされたということは一橋の誇としてもいゝと思ふ何故なれば登山に對する眞面目な經驗と思想とをもつ素硬苦しい片書付きのお方々もこの時間だけは「許された」といふよりは「涌き出た」心易さと融合さを以て居られる熱心家の人達だからだ、山は獨り若人のみの獨占する處でもないと思ふ。老人大いに登山やスキーをやつて我々若人の山に對する信念を理解していたゞく動機ともなる。

「お前山へ行くのはおよし」

といふ苦いおこごとはだん〳〵影を消して、人間が次第に自然に愛着をもつ様になるんではなからうか。

如水會山岳會の今後の活躍を期待する！

こうして生れた如水會山岳會と我が一橋山岳部が山に對する愛の心を中心にして、その第一回の大懇親會が十一月二十九日新裝なれる如水會館で催された。平素硬苦しい片書付きのお方々もこの時間だけは「許された」といふよりは「涌き出た」心易さと融合さを以て笑談を續けられる。（出席者合計五十四人、如水會山岳會々員三十五人）

正七時から左のプログラムに依つて山岳映畵觀賞會

に移つた。

一、挨拶　江口定條氏
一、南アルプス縦走　東邦電力會社撮影
一、喜劇　一橋音樂部
一、奏樂　細川侯秘藏
一、スキーの驚異

この映畵は一般に公開し、各山岳部の部員の方々を御招待した。ジヤーナリストならばこの處、和氣靄々堂に滿ち山とスキーに對する驚異と感激と興奮とを以て大成功裡に閉會したと書く處であらう。會衆は流石の大ホールにも滿ちあふれてゐた。閉會十時二十分。

×　×

プログラムに載せてある様に朝日新聞社の撮影にかゝる「空より見たる日本アルプス」は當日までに間に合はず、遂に公開出來なかつたのは殘念に思ふ。之は本年六月中旬にとつたもので槍、穗高、藥師、立山、劍等がよく出て居るのであつたが又次の機會に讓るの止むなきに至つた。

南アルプス縦走

「南アルプス縦走」は東邦電力の築山氏が主として撮影されたもので、實に帝都に於いては初公開であつた鳳凰山の大日岩、アカヌケ澤の頭よりの白峰三山の眺め、大樺澤の雄大等實に觀衆に山の如何なるものかを示すに充分の力を有するものであらう。自分は農鳥の頂よりの廻轉寫眞に充分ひき入れられた。あれを見乍ら嘗つて經驗した早川尾根の小屋、北御室の小屋、それから北澤の小屋、廣河內の思ひ出等懷しき憶ひ自ら微笑まざるを得なかつた。甲斐の山の親しさと雄大を示すに最も適した寫眞であると思ふ。

スキーの驚異

初めて見たものは是が非でもスキーを試つて見たいと思ふし、一度見たものは復見たいと熱望する程の流石は名映畵である。小さなゲレンデにおさまつて細いテクニツクの餘技に骨を碎く愚か者よ。廣い〳〵山に行けと思はずも云はされる。懸崖、急斜面、脊尾根障碍、なんでも御座れと巧に滑りこなす。シユナイダーの一行の妙技は……といふは愚か、身の程もわきまへずあゝもやつて見たらとりきみ返る自分の內なる興奮よ。どんな處でもクリスチヤニヤの腰でステムタ ーンをやりぬけるスキーのこなし方は畑黨にはとらはつて富山の方へ行つてゐることを知つた我々の落膽は非常なものだつた。幸にして先輩奥野氏の奔走で目出度く拜見出來た。厚く同氏に感謝する。

○「眞島さんの別莊でやれるんだつてね……」と英

入られたと見えて入口廊下で誰よりも先に拍手の急霰それが「スキーの驚異」に至つてはどう拍手していゝものかと思案の體は通りこして只「ウン〳〵」と唸り聲ばかり。傍に居た餘談子、そんなことなら奏樂の方の拍手だけは儉約しておいたら……はおせつかい恐れ入ります。

○スキーの驚異が終つた後で「おい明日もう一遍內緒でやらないか？」と餘談子に相談もちこんだ男があつたがその男こそスキーでは立派な顏役……それ程この映畵がエクサイトメントをひきおこしたのであります。

○「スキーの驚異」が一寸とした手ちがひで廿五日になつて富山の方へ行つてゐることを知つた我々の落膽は非常なものだつた。幸にして先輩奥野氏の奔走で目出度く拜見出來た。厚く同氏に感謝する。

余談

○老公E氏事奏樂「バグダツトの酋長」にすつかり悅に

(氣?)を養つて居られた、スキー往年の猛者杉浦先生手を洗ひながら餘談子に話しかけられる。「江口さんなんかに大いに轉んでもらひ度いですなア」會館内どこの隅へ行つてもこうした調子のスキー談ばかり。

○「日本でもあんな雪に惠れてゐたらなア」「いや三月の針の木なら大丈夫だ」「平の小屋では一つふんばらうぜ」と部員の口惜し談、三月には部員有志が平の小屋でスキーの練習をやることになつて居るのであります。

○終に臨み有益な南アルプスの映畵を御貸し下さつた東邦電力の築山氏、非常な効果をおさめ得たレコードの爲に奔走して下さつた先輩の守田氏に深く感謝致します。

—E M 生—



屋小山



こゝには登山の漫言を最も短い筆で書かれたものを載せ度い。山男にも辛味もあらうし甘味もあらう。硬苦しい事ばかり云つてるのが人間の能ではない。さゝやかな山小屋の爐傍からもれて來る山の讃美の聲はどんなに喜ばしい事だらう。

此の欄はこういふ意味で諸氏の自由の氣分に開放し度い。

△

●何時の事だつたかそれは忘れたが九月もやがて終りに近い頃自分は同勢七人で甲斐駒から仙丈へ行き又戻つて鳳凰地藏から中道をへて青木湯へ出た事があつた。第一日の夕方ドシヤ降りの中をやつとの思ひで屏風の小屋へ着いたのであつた。小屋の入口には大町桂月が書いたといふ大層らしい文句が看板になつて居た。まあ中へ入つて懐しい焚火にあたり、濡れものを乾したまではいゝのだ。が翌る日いざ出發となつて荷物の整理を始めた所が澤山あつた干物がない。同行のW氏のものであつたと記憶してゐるがその事を小屋の主人に質すと實に言草が癪にさはつた。「さうですか、犬でも食つたのでしよう」だけで、そりや大變だでも無ければ立ちあがつて探すでもない。心配さうな顔もしないで鉈豆をたゝいてゐる。事實犬も居たが何か頭位殘つてるだらうと見廻したがそれもない。確かに小屋の主人の奴が何處かへしまつてしまつたのだらうと思ふ。お影で旅行の最後の日のアカヌヶ澤の頭での晝食のおかづは一本の鰹ぶしを七人でわけざるを得なくなつてしまつたものだつた。あんな不徳な小屋番も居るのだから餘程注意する必要があらう。尤もこの小屋の下に今度縣營の無料小屋が出來ると聞いてゐたからではもうそんな心配はないが。

●山へ行くと自分等は How to make our food tastefully? といふ問題より考へ度くない。他の事を心配させる奴は自分等にとつて大敵だと思ふ。

●山へ行つて案内者や人夫に色んな登山道具をやつたり、多額の金をやつたりする事は自分等プロ黨には非常に迷惑な事だ。一日分位餘計やる事はお禮として美しい事でそれはまさに良い事だがプル振りを發揮されるのはやめてもらひ度い。後から行つたものが何もやらないといゝ顔をしない事てき面なのだ。

（いちらう）

△

●人も知る勞働法の大家である所の孫田さんは米澤の片田舍から飛び出して來た人である。偶然にも自分は此の夏東北朝日岳を志して同志二人と共に野川を遡つた。所が其の話を先生にするとシエーンではあるが何處となく平たい顏を益々平たくして驚いて居た。孫田さんも勞働法ぢや偉いかも知れないがまだ自分の故郷の山川に暗い樣ではまだ〳〵若い。僕はまだ先生より偉い所があるので安心したわけだ。然し先生がわが「針葉樹」を買ふ事によつて僕の精神的物權だか債權だか質權だかは知らないがそんなものは直ちに消滅させてもいゝと思つてゐる。

△

●資生堂商店で廣告をくださつたのは誠に有難いが其の紙型を見たら實に驚いた。山男と香水！　何と面白い對象ではないかもらつて來たのはW氏だが彼の太長い顏の中央に電信柱の如きものを廣告係の人が見出して、ではないその如きものを一目見てびつくりして、せめて香水でもかけなければ可哀さうだとおぼし召されたのかも知れない。自分等は實は寫眞の方の廣告だ

らうと決めてゐたのだが事玆に到つては何とも仕様がない。ロの悪い人間が世の中には充滿してゐるからとや角云はれぬ内にことはつて置く。

●廣告序にも一つ、三越へ行つたと思ひ給へ。そして首尾よく決定したのだが、廣告をいたゞかうと苦心してゐる時某商店から「紙に凸凹のあるものを吳れた」と説明すると次席のM氏が「そりや紙型つて云ふのだ」と親切に教えて下さつた。蓋し廣告を採集に行つて、術語を一つ拾つて來た事になる。（いちろう）

△

●山よ！　お前を慕うやうになつてからもう幾年になるであらう　お前は俺の初戀の人である　永遠の戀人である
山へ行く　何の爲めに？
質實剛健の氣を養ふ爲めに
體力を錬磨する爲めに
美的情操を涵養する爲めに
皆よー
我等は行かれば止まぬ情に驅られて。（かずま）

△

金の楯の半面が銀であることもある。紙にも裏表がある。廣告ビラにでも、端に小さく（裏面を御覽下さい）とある。その「裏面」なる所にまた（裏面を御覽下さい）と云ふのさへある。

山へ登ると云ふのはどうも馬鹿なことらしい。馬鹿とは見えないまでも、無駄らしい。重い荷を背負つて、汗を出して、石の下に寢たり、雪の中でころがつたり、時には怪俄をしたり、勇敢にも命までも投げ出したり。

此處で（裏面を御覽下さい）である。

世の中は段々悧口になる。日本丈でも年に何十萬とか何百萬とか生れて夫れが皆悧口になつて行く（らしい）。これ丈でもやりきれぬ位忙しい。眩ましいと言ふ言葉位ぢや言ひ切れない。ジャン〳〵グワラ〳〵の九段のお祭の見世物以上である。この忙しい中でノン〳〵として山へ登る奴がゐる。何と云ふ馬鹿らしさ加減ではないか。愚の骨頂とも云へよう。

だが、この忙しい世の中でこんなに馬鹿になりきれると云ふ事は、何と諸君、悧口なやりかたではありませんか。（無駄口）

△

北鎌を終へて槍の肩へ歸つて來ると米人が二人居た。Yと二人で話し込んで大槍の小屋に同道する。翌朝連立つて穗高縱走にかゝつたが生憎の悪天候で中止とする。その旨を彼等米人に通ずると米人の曰く「ワイフが危い所へ行つてはいけませんよと言つたから止します」と。Y顧りみて曰く「いさゝか當てられたれ」と。第三人目の曰く「誰かの雌雄を知らんや」と。

大喰で二人に別れてTと槍澤を下つて涸澤に向つた。涸澤へ下つて涸澤に向つた。涸澤へ、山岳會の岡野氏が來られた。の分岐點の橋の傍で休んでゐると氏から同氏が小島さんと初めて槍に登られた話を伺つて大變面白く時を過した。その頃から悪くなり初めた天氣は屏風岩の下の岩小屋に着いた頃は雨となつた。けれどもその雨も暖かい小

屋を見出した身にはかへつて懐しいものだつた。焚火も澤山あ
る、水も近い。程なく夕食を終つてからは、一層焚火を揷立て
ゝ、パイプをつけて二人で雨の夜に見入つた。岩をしたたり落
ちる雨垂と、水勢の增したらしい澤の音と、時々の風に木々の
葉末をざわめき落ちる雨水の外、我々の感覺に入るものは唯赤
い焚火に照され出た小屋の中だけである。しかしながら既に一
週間を山に送る我々には、暗なればこそ又雨なればこそ遠い何
處までもを見通す鋭い心をお互の胸に感じてゐた。無暗に酒の
欲しい夜であつた。僅か殘つたウイスキーを二人で飲んで、そ
れでも未だ去らぬ感傷を追ふ爲に歌を唱ひ續けた。それは雨を
通じ暗を傳つてあたりに反響したけれども、元氣なものから、
直ぐに悲しい歌に變つて行つた。そして氣が付いた時我々は故
鄉への思慕の歌を唱ひ續けてゐた。

おゝ Patria lontana!。せはしない眼を擧げて暗に見入りな
がら、それでもお前にそれが何處にあるかゞ本當に解る樣にな
つたか。

上高地の牧場に出た頃は夕立が激しく襲つてきた。今宵はキ
ヤンプと決めて、川の邊りに手早く天幕を張る。Yが火を作る
事として自分は飯盒を持つて川邊に立つた。手に觸れる水は氷
の樣に冷たかつた。こゞんで米を洗つてゐると何故か知らぬ間
に目尻が暑くなつた。それは又夕暮が私の心を沈めて何時もの
愚痴を心に上らせるからであつた。こうした山々の逍遙がこれ

涸澤にて。

ふと覺めて見ると何時の間にか邊りは春の日和
である。柔かい紫の空に雲雀が囀つてゐる、小川がゆるく流れ
てせりの若芽が燃えて、それに心に風が馬鹿に和かいので、占
めた、愈々春だと思ひながら矢庭に天幕を開いて外に出た譯だ
が、矢張り此處は涸澤だ。大きな雪田がせり上つて、その上に
ギザ〳〵の峰が大切さうにそれを圍んで、丸く句切れて見へる
空の色がそれでも春だ。「おい春だれ」と云ふと「うむ」と返事ば
かりが來た。仕方がないから岩の上にのびて岩燕か何かの歌と
青い空の中で戲れてゐる中に又夢の中へ入つて行つた。眠りを

乘せた岩の邊りに暖かい陽が照つて、和かい風が遊んで空が光つて、それに岩燕が歌ふのだから、これじや夢は、小川が流れて、せりが青んで、たんぽゝが咲いて、蝶が舞て雲雀が歌ふ、あのふるさとの四月の夢より外に見やうがない。（ひろし）

△

○人間の澄んだ心には深い自然の姿が美しく感ぜられる。

○一本の枯木にも、踏みにじられた雜草にも、一塊の殘雪にも自然の永遠の美と愛とを感じ得る者は幸福である。

○端然と自然の前に坐さなければ端然たる自然の姿は解らない、敬虔なる緊張を以て對する時自然は最も嚴かなる美を示して吳れる。

○頂を征服せんと憧憬れる者が頂に立つた時、彼の心は頂を征服した喜びでなく、威大なる自然を敬虔する事によつて起る歡喜に滿ちてゐる。而して彼は岩上に蹉まづかればならぬ。

○山の與へるものは力である。

○何故自分は頂上に立つた時、向ふの峯に飛びつき度い樣な氣になるのであらうか。山を敬し山を愛する心ではなからうか。

○かん〳〵眞夏の光を浴びて百花咲き亂れる高根に大の字なりに寢ころんで、心行くばかり青々とした大空を見つめて居り度いものだ。

○赤々と輝りはえた峯もやがて物凄い夜の幕に襲はれた。重さうなリユツクサツクを背いだ若者が一人山を下つて行く。ストツクは岩角に響いて居る。足下からは火花が散つて居る。

若者には凡てが自分は幸福であるとしか思はれない。

○數時間も身動きもならぬ深い藪を漕ぎ分けて岩間に湧き出づる泉に永遠なる森の情を掬みたい。

○雪・岩・木・水が一つの景色となつて吾々の目に映つる時吾々は唯自然の諧調の美にみせられる。（松木）

△

●諸君之から僕は諸君に山に關する知識を與へやうと思ふ。目藥つけて良く見て吳れ給へ。

●第一に針葉樹の祖先を知つてる人はあまりないだらう。植物學者として有名な武田さんでもこれればかりは知らない筈だ。まあ勿體振らずに敎えてしまふかな。曰くそれは外でもない、「栂」である。

●秩父古生層といふ奴は大概黒い樣だ。そして水氣のある所を見ると水成岩に相違ない。これが甲斐駒と駒津岳の間の鞍部に顔を出してるから面白い。あれも黒かつたし、又秩父の見える所にあるんだから學者が秩父古生層と名前をつけたのもうなづける。所が學者なんて圖々しいもので同じ黒くても槍や穗高なんかは北アルプスにあるもんだから花崗岩なんて名をかへて平氣な顏をしてゐる。花崗岩といふのは燕や金峯や地藏岳にある樣に白い事を知らないと見える。

山にある岩は僕の知る所では秩父古成層と花崗岩とも一つ何かの本で讀んだ小瀧川に片麻岩といふ岩がある外は大概輝石安山岩だと覺えてゐればさう不便を感じない樣だ。一寸變つた岩

で上記の他のものらしかつたら輝石安山岩の變種だと説明して置けば間違ひない筈である。

●それからこれは遂此の間聞いた話だが蠟燭の徳用的使用法だまづ一本を持つて來て紙を二枚か三枚かされて水にぬらし、それを蠟燭にしつかりと捲く。頭の心と平行位にまいて心に火をつける。すると心の火は周圍の紙の水を蒸發させて紙がもえはじめる。するとそれに蠟がしみ込む。しかも蠟は外へこぼれない。可なりの風にも堪へるし又頗る經濟的である。ラテルネは要せぬし光は小田原よりも大きい。然し雨の降る日は知らない。

×　×　×

●「登山」といふ本を書いた我等が親愛なるT先生は此の夏、後立山の針ノ木あたりを歩いて來られた。一人では勿論ない。三人でもないのだ。はじめの二三日は非常に面白いが直きに妻らなくなる相である。皆さん心得置くも良き金言ではあるまいか。

●自分には氣分としてよりの山はない機だ。山岳放浪による自分の變化——それが外的にしろ、內的にしろそんな事を知らうとするのは間違つた事だらうと思ふ。

山は理屈ぢや登れない。屁理屈を求めて登らうとすると其の山登りは何が何だかわからなくなる。各山に存する何か共通的な雰の樣なものを見つめて、それの流れを感ずる所に登高の價値はあるんぢやないか。安易なんか云ふものはてんで問題にならない。雪や氷や岩、それ等も亦同じ事になる。

△

●穗高にふられてNと二人で槍澤を正直にグリーセードして降りて來た。何處かの中學生だらう大枚三十人位が髯の生えた叔父さんに引張られて槍澤小屋近くの河原に休んでる。Nと二人でやつぱりその附近に腰をおろした。今年は雪が多い方なので雪渓はこゝまで來てゐた。穗高は雲ん中に隱れてゐる。槍澤は陽がカン〳〵してるのに。さつき松枝の永君が酒を擔いで登つて行つたがまだ大槍へは着かないだらう。穗刈氏や早大の連中が首を長くして、そしてのどを鳴して待つてるだらう。西鎌へ行つたヘン公はどうしたらう。こんな事を考へながらウト〳〵した。今日は屏風岩の下の岩小屋までなんで呑氣だ。道は天下の大道だし、休みあきて又出かけた。呑氣になると荷は二倍の重さを肩に感じさせる。

一の俣小屋に寄つて何か呑んだ。そこに五十位の親父が一人と二人で三十年前に槍へ登つた猛者だつたのだ。「俺の眼の黑い內に槍澤がこんなになるとは……」話はそれからそれへと盡きない。屁理屈を求めて登らうとするのに反對をしたのを盛におこつてゐた。山は萬人のものだ。危險な所は危險でない樣にするのが山で飯を食ふものゝ責任だし又その爲に人が多く來る樣になれば自分等もいゝではないかといふ。全くその通りだ。槍澤を正吉をつれて涉徒した時の苦心談が暫く續く、それから僕の大きなリュックを見て思ひ出したのか近頃の學生は何

だか荷を運搬に山へ來る樣に見えるといふ。「あれでは下ばかり見て居て一向周圍の山が見えないではないか。君の樣な呑氣に山を歩きまはる樣な人はいくらかついでもいゝがれ」こゝで加減行つて氣がつくと又落ちついて取りに歸へる。自分とNも亦慷慨してゐる。自分は幸ひにこの人に對して第二人稱の位か新しく出來た橫尾谷への徑に入る爲梓川にかゝつた丸木橋を置にあつたので助かつた。下を向ひて歩くで思ひ出したが自分等が二の俣の出合で焚火をし、コーヒーを呑んでゐる時だつた六、七人の學生がリーダーに連れられて肅々として槍へと向ふのを見た。總てリーダーの一擧手、一投足の通りに動いてゐて決して上を見ない。自分等は彼等は槍澤の道路を調査に來たのかなと思つたが人夫が一人後からつゞいてゆくから聞えて見たら〇〇高等學校の人だといふのでやつぱり槍ケ岳へ來たのだといふ事を知つた。皆澁紙の上にペンキとニスを塗つた樣な顏をしてゐた。あれではリーダーがころぶとそれつとばかりに後の人達もころぶだらうと思ふ。リユックは蟬のそれ的で別に下を向かなければならぬ程重さうでもなかつた。自分等は彼等を Funeral March と呼ぶ事にした要するにリーダーに從ふも程度問題だと思ふ。話は遂わきへそれたがもう一度例の〇氏の事を書いて此の項を終らう。

諸君は先づ流行兒「のんきな父さん」を頭にゐれてなければならない。腹を前に突き出して脊はひくゝ足は短くて脚胖わらし、頭には魚屋帽子をいたゞき、恐ろしく長い金剛杖をつき、それでも鼻の下には紳士のおもかげを影ながらも見せる美鬚をたくはえてゐる。一度休むと必ず何かをその場所へ忘れて來ていふ。「あれでは下ばかり見て居て一向周圍の山が見えないではないか。君の樣な呑氣に山を歩きまはる樣な人はいくらかついでもいゝがれ」こゝで加減行つて氣がつくと又落ちついて取りに歸へる。自分とNか新しく出來た橫尾谷への徑に入る爲梓川にかゝつた丸木橋を渡つて對岸で休んでゐると三十年前の父さんがやつて來たので置にあつたので助かつた。下を向ひて歩くで思ひ出したが自分等が二の俣の出合で焚火をし、コーヒーを呑んでゐる時だつた六、七人の學生がリーダーに連れられて肅々として槍へと向ふのを見た。總てリーダーの一擧手、一投足の通りに動いてゐて決して上を見ない。自分等は彼等は槍澤の道路を調査に來たのかなと思つたが人夫が一人後からつゞいてゆくから聞えて見たら〇〇高等學校の人だといふのでやつぱり槍ケ岳へ來たのだといふ事を知つた。皆澁紙の上にペンキとニスを塗つた樣な顏をしてゐた。あれではリーダーがころぶとそれつとばかりに後の人達もころぶだらうと思ふ。リユックは蟬のそれ的で別に下を向かなければならぬ程重さうでもなかつた。自分等は彼等を Funeral March と呼ぶ事にした要するにリーダーに從ふも程度問題だと思ふ。話は遂わきへそれたがもう一度例の〇氏の事を書いて此の項を終らう。

諸君は先づ流行兒「のんきな父さん」を頭にゐれてなければならない。腹を前に突き出して脊はひくゝ足は短くて脚胖わらし、頭には魚屋帽子をいたゞき、恐ろしく長い金剛杖をつき、それでも鼻の下には紳士のおもかげを影ながらも見せる美鬚をたくはえてゐる。一度休むと必ず何かをその場所へ忘れて來ていふ。「あれでは下ばかり見て居て一向周圍の山が見えないではないか。君の樣な呑氣に山を歩きまはる樣な人はいくらかついでもいゝがれ」こゝで加減行つて氣がつくと又落ちついて取りに歸へる。自分とNか新しく出來た橫尾谷への徑に入る爲梓川にかゝつた丸木橋を渡つて對岸で休んでゐると三十年前の父さんがやつて來たので置にあつたので助かつた。下を向ひて歩くで思ひ出したが自分等が二の俣の出合で焚火をし、コーヒーを呑んでゐる時だつた六、七人の學生がリーダーに連れられて肅々として槍へと向ふのを見た。總てリーダーの一擧手、一投足の通りに動いてゐて決して上を見ない。自分等は彼等は槍澤の道路を調査に來たのかなと思つたが人夫が一人後からつゞいてゆくから聞えて見たら〇〇高等學校の人だといふのでやつぱり槍ケ岳へ來たのだといふ事を知つた。皆澁紙の上にペンキとニスを塗つた樣な顏をしてゐた。あれではリーダーがころぶとそれつとばかりに後の人達もころぶだらうと思ふ。リユックは蟬のそれ的で別に下を向かなければならぬ程重さうでもなかつた。自分等は彼等を Funeral March と呼ぶ事にした要するにリーダーに從ふも程度問題だと思ふ。話は遂わきへそれたがもう一度例の〇氏の事を書いて此の項を終らう。

諸君は先づ流行兒「のんきな父さん」を頭にゐれてなければならない。腹を前に突き出して脊はひくゝ足は短くて脚胖わらし、頭には魚屋帽子をいたゞき、恐ろしく長い金剛杖をつき、それでも鼻の下には紳士のおもかげを影ながらも見せる美鬚をたくはえてゐる。一度休むと必ず何かをその場所へ忘れて來ていふ。「あれでは下ばかり見て居て一向周圍の山が見えないではないか。君の樣な呑氣に山を歩きまはる樣な人はいくらかついでもいゝがれ」こゝで加減行つて氣がつくと又落ちついて取りに歸へる。自分とNか新しく出來た橫尾谷への徑に入る爲梓川にかゝつた丸木橋を渡つて對岸で休んでゐると三十年前の父さんがやつて來たので置にあつたので助かつた。下を向ひて歩くで思ひ出したが自分等が二の俣の出合で焚火をし、コーヒーを呑んでゐる時だつた六、七人の學生がリーダーに連れられて肅々として槍へと向ふのを見た。總てリーダーの一擧手、一投足の通りに動いてゐて決して上を見ない。自分等は彼等は槍澤の道路を調査に來たのかなと思つたが人夫が一人後からつゞいてゆくから聞えて見たら〇〇高等學校の人だといふのでやつぱり槍ケ岳へ來たのだといふ事を知つた。皆澁紙の上にペンキとニスを塗つた樣な顏をしてゐた。あれではリーダーがころぶとそれつとばかりに後の人達もころぶだらうと思ふ。リユックは蟬のそれ的で別に下を向かなければならぬ程重さうでもなかつた。自分等は彼等を Funeral March と呼ぶ事にした要するにリーダーに從ふも程度問題だと思ふ。話は遂わきへそれたがもう一度例の〇氏の事を書いて此の項を終らう。

釜澤の一夜

栂の若木を二本柱として小舍は出來た。鉈を振つて幹に打ち込むと黃色に染つた大きな葉がハラ〳〵とふりかゝる、澤はもう暗くて音一つしない。雨がやつて來たが焚火は盛んにおこされた。パチ〳〵いふ火を圍んでゐると吉澤が小西俣のときの事を話し出す、あのときには火がつかなかつた、雨ももつと强か

つた。深い〳〵釜澤の奥に、その靜けさと共に三人は寢た。

破風の小屋

夜の支度を濟して小舍を出ると、正面に大菩薩嶺がある。低い處は夕暮の雲に鎖されて、その上に、亦赤い空の下に、大菩薩は小金澤以南の連嶺を提げて浮んでゐる。高橋の村も、犬切峠も、落合の村も、柳澤峠もみんなあの白い雲の下なんだ。陽が沈んでゆく、雲は青昧を增してかたく谷を埋める。

釜澤を登り得た三人はうれしさにそは〳〵してローソクの下に頭を集めておそくまで起きてゐる。風が出て來た、夜半寒さに起されて焚木をくべてちつとしてゐると、凄い音を立てゝ風が栂の森を渡つて行く。

劔澤の小屋

室堂から別の道を取つた强力達三人は、別山乘越の上に現はれた。三つの黑い點が純白の大雪溪を降り出す。中の一つが特別に早い、誤つて轉んだのだ。落ちて行くその前を又落ちて行くのは帽子だらう。

滑つたのは誰だらうと詮議してゐる間に黑い點は漸く止つたが帽子はどん〳〵落ちて行く。見てばかりゐても遙か下に光つてゐる小舍へは行けないので、僕等も降りにかゝる。笑つた僕等もよく轉んで、上から見えた小舍に着いたのは三時だつた平藏と八郎が俎の上で岩ごけをしきりに切つてゐる。朝は水が凍るので齒を磨いておく。小舍の窓から恐る〳〵劔を見る。

三窓の岩小屋

長い雪溪の終りは淸い流のはじまりだ。仰げば澄み切つた夏の靑空に白い雲がもく〳〵とかさなり、下は一面の雪とそれから迸り出る勢のいゝ水、僕等を圍む自然も僕等と同樣若々しい劔川をどんどん降る、兩岸の綠が夏らしく輝く。しばらくすると左から流が入つて來る。三窓の水だ。それを入つて行くと右手の砂地に强力達が待つてゐた。元氣な德平は得意になつて僕等を草むらの綠の中へ案內した。中には大きな岩屋があつてそれが今夜泊る金洞岩だつた。ゆつくりした氣持になつて河原の岩の上に立つと、夕暮の空に、三窓の雪溪が煙つた樣に浮んでゐる。

荒川渡の小屋

雨の中を靜かに流れる冷たい水を渡つて六時荒川渡に着いた。綠に繁る木の下に、丈なす草に包まれて銀彌の別莊、荒川渡の小舍がある。中は狹いが暖かさう。流木を河原に求めて歸る間もなく水も草も、人も木も夜の張に靜かに包まれた。

中俣の夜

偃松を少し游ぐと草地に出る、つる〳〵滑る急な草地よりも鹽見澤の水源をちやぶ〳〵行く方が未だ安全だ。怪しかつた雲行きはとう〳〵豪雨を齎した。立ち止ると耐らなく冷いのでどん〳〵降る。

五時頃には大部下へ來た、雨も小降りになつた。目の下遙かに中俣のドウが見える、黑い森を割つた白い河原が如何にも努力の報酬といふ樣で、目をそのまゝぢつと擧げると、ふつく

らした肌に殘雪點々たる小河内岳が小降りの夕空に浮んでゐるあの雪を溶かして降る様な星の下に寢たらどんなだらうと、づぶ濡れの身の今更に思はれる。ドウまで降らずに本流へ出られた、小雨ながら降つてゐるので焚火が思ふ様にゆかない。一番年を取つた久さんの手がかすかに震へてゐる。（くろう）

△

●山へ登る心！　時々その心持を考へて見る。然し決して分らない。分るもんぢやないと思ふ。たゞ山へ登るひたすらなる心があると云ふ事實だけだ。

●功利的に訓練されて來た今の世の中では頽りに目的を求めてゐる。

山岳美を說いて山へ登る。

宗教や哲學から山へ登る。

「浮世はなれて」と山へ登る。

然し自分には目的を以てする登山は淋しい氣がする。無目的が目的なのだと逆理論も考へられぬでもないが、それすら淋しいものだ。

●山のほんとうの姿は、荒れた時が一番美しい。と或人が云はれた。山らしさが充分に思はれるぢやないか。

●霧の中を歩くのは餘り面白いものぢやない。殊に始めての山などでは、心が極度に緊張する。その緊張も快よい。然し霧がある丈に一層陽の光が有難くなるから嬉しい。

●一人で山の中を歩いてゐても、決して默つて居られるものぢやない。何か獨語をいふ。草や木や小鳥にまでも話かけたくなる。そしてそんな時の言葉が素直な、腹の底からの本當な言葉らしい。（むき）

× × ×

●ペンちやんが功利的といつて、さういふ考へを持ち度くないと淋しがつてるが、同じ功利でも精神的なもの、即ち精神的に人格の充實をより完全なものにしやうとするんならば少しも差支へないものと思ふがどんなものだか。然しこうはいふものゝ自分は早大の藤田氏が年報四號の中に書かれてゐる様な矛盾に陷つてるではないかと否事實その矛盾に苦しんでゐるのだといふ事を切實に感ずる。自分は悲しいのか又卑怯なのかもわからない。たゞ悟り得ぬ身の口惜しいと思ふ涙が滲むのみだ。

（いちろう）

△

ペンちんが書いたものを熊さんが讀んで批評したものを私が讀んで一言します。山へ登つた後で其の登山に關する理論的考察をしても結局は無駄では無いでせうか。私達は山へ登つて然して云ひ表はす得ぬ感知に打たれますないでせうか。山を下つた後で山に入つた時の感じをあれかこれかと考へ見た處でそれは言葉に出せば結局は抽象論に過ぎないものとなります。世間の人々はよく登山に關して迷惑至極なぞでは、心が極度に緊張する快よい。然し霧がある丈に一層陽の光が有難くなるから嬉しい。

●一人で山の中を歩いてゐても、決して默つて居られるものぢが既に誤りではないでせうか、夫れが精神的であると否とに拘

らず口には云へぬものとしておくより致方がないと思ひます。矢張り功利的に考へるなぞは問題外です。平凡なありふれた事を書きました。然し平凡な事が案外馬鹿にならぬ事もありまず。（たぬき）

△

●私は一八五三年とある谷川の邊に佇んでゐるラスキンの肖像を見るのが大好きである。人生の總てを見抜いてゐるんだといふ鋭さも白い髪に包まれて只わけもなく何事かの冥想に耽つてゐる彼の此の寫眞は山と谷川を背景として偉大な力を私に示唆して吳れる。彼の思想を書いたもの萬巻を讀むよりこの寫眞なろ哉と思ふ。

「絹と紫」の中から人間を土と勞働に導く事を教へて吳れそして此の大自然から人生の「ベニスの石」を基いてくれた。人生はもつと自然に日をくれて、そこに美を見出すんだと示して吳れる。彼は今山と谷にかこまれて過ぎにし彼の思索の跡と生活の塔を見つめてゐるではないか。惠まれざりし十七歳の初戀、淋しい結婚生活の經驗を最も平和に此の谷川の水で決算してゐる彼の姿はごんなに嚴かな事であらう。さびしいと云へば餘りに寂びし過ぎる、併し私は此のラスキンが一番すきである。彼の顔には多くの Wear and tear of time の皺が重つてゐる。しかも彼は今こそ大自然の懷に最も安息にいだかれて、大自然にしかけてゐるではないかを山に持ち得るだらうかは、私はいつになつたらこれ程の親しみ。（榮司）

×　×　×

●一年のうち半分は學校、後は山でくらす男、熊に似たヒゲの小男、當年とつて芳紀二十四歳、近頃ごうした事かおそまき乍ら戀愛論を振りまく。あのヒゲだらけの口から「愛」とか「戀」とも懸がある。そして春がある。

●も一つこんな話がある。何とか書いて見たいが、「これ以上話すとおごらせられるから……」と御本人長い鼻をうごめかすばかり、口を緘して語らない。君子危きに近寄らずが！

（出かゝつた先輩の卵）

△

●狸にされた話。

此處は秩父の山の中です。一匹の名の附かない獸が一匹の熊さんと一緒に歩いて居ます。

すると其の獸が鼻を動して

「何んだかむじなの樣な香ひがする」

と熊さんに云ひました。すると熊さんが落ち付き拂つて

「君は仲々鼻が利くね、多分君もむじなの同類だらう」

と云つて夫れ以來可哀相に此の名のない獸を狸々と呼ぶ樣になりました。

木の上で立ち聞きして居た口やかましい山の小鳥は云ひました。

「エヘン、馬鹿にしてら！　熊さんの〇〇〇の香ひだよ、チ

ユウ〳〵」

皆さん熊さんと一緒に歩く時は御用心が肝要ですよ。

（たぬき）

●數年も前のことである。紺壁の秋空はいやが上にも澄み渡つて石神井からはあのなつかしい秩父の山々谷々が隅なく見渡せる小春日和が續いた。一日、間近かに見ゆる丹澤山塊に心を惹かれて武藏野軌道の上から恍惚となつて眺めてゐると、同じレールの上で矢張り美しい山の襞に見入つてゐる二人の豫科生があつた。「熊」と「乙蝶」であることは後になつて解つたのだが、山を戀する友のあることを知つた俺の喜びは非常なものであつた。その翌々日、晩秋の青空の下に、あの丹澤山の熊笹を押分けて登つて行く三人の學生があつた。

×　×　×

震災直後の丹澤山塊は崩潰や龜裂が甚だしかつた。豫定の時刻はとつくに過ぎて山麓に出た時は初冬の冷たい月が空高く輝いてゐた。夜半の寒氣は烈しかつたが懷中はそれ以上に寒風が吹きすさんでゐた。夕飯を儉約しても汽車賃に足りなかつた。憐れな登山者は寒風にさひなまれながら東京へ向つて歩いてゐた。翌朝、疲勞し切つた三人は品川までの切符を危ふく求めて平塚驛から乘車した。思出は深刻なものゝみ殘る。（平家蟹）

●上州の山の案内人は實に氣持ちがよい。春谷川岳から万太郎を經て三國峠へ縱走した時の事であるが、谷川温泉で雇つた田村彦太郎は谷川岳しか行つた事がないのである。それで万太郎々のも澤山載せ度いと思ひますから、何時でもよろしいですから一橋山岳部宛にお送り下さい。

追補

これで本年度の山小屋欄は終ります。次年度には先輩の方

年　　報



1926

(May-Oct)

大正十五年度一橋山岳部年報

記錄幹事
吉澤一郎
中島嘉一郎
橫倉吟三郎

大正十四年十二月より本年四月までの記錄は四月發行の臨時號を參照せられたし。（記錄係）

△新入生歡迎會（於石神井）

五月一日　出席者左の如し。

松倉　榮司　五十嵐數馬　渡邊　九郎　吉澤　一郎
松木　謙三　森竹　春雄　近藤　恒雄　中島嘉一郎
横倉吟三郎　石津　和一　高橋　要二　手塚　晴雄
井上　清　宇佐美敏雄　金田　浩　川本　信正
佐久間幸夫　紀田　時雄　近藤　晋　品川惠智郎
深澤　清一　瀧口金次郎　金　成享　橋倉　實美
加賀　行三　白井　次郎　野村　治信　芋川　稔一
高瀨　進三　中森長太郎

△新入生歡迎旅行（三峠行き）

五月八日

リーダー　五十嵐數馬　吉澤　一郎
石津和一　白井　次郎　中森長太郎　野村　信治
中島嘉一郎　外二名

飯田町を終列車にて大月下車、小沼より直ちに山に入り一行大元氣、天氣は朗々、府戸尾を登りつめると唯一の目的たる秩父、南、北アルプスは皆パノラミックに展開されてゐた。五月の雪を戴いた此等の山々の崇嚴なる姿は新入部員の血を躍らせずには措かなかつたであらう。三峠には茶屋が出來し、實に開けたものだ。

△晩春の劍岳、針ノ木越え

吉澤一郎外一名（法大山岳部員田中氏）

五、二九　曇

上野發（七、〇〇后）

五、三〇　雨

富山—芦峅寺—藤橋

五、三一　曇

藤橋（六、三〇）—ブナ平（九、〇〇）—弘法茶屋（〇、一五）

六、一　晴後曇後雪

弘法（七、〇〇）—追分（七、四五）—室堂（一、〇〇）

六、二　晴

室堂（四、四五）—雷鳥澤（五、一〇）—別山乘越（六、〇五）—尾根（七、〇〇）—鶴ケ御前（八、二〇）—平藏ノ頭（九、一〇）—劍頂上（一〇、〇〇—一〇、一五）—別山乘越（一、五〇）—室堂（三、〇〇）

六、三　晴

室堂（七、三五）—一ノ越（八、一〇）—雄山（八、五〇—九、一七）—一ノ越（九、三七）—雄山澤—南の尾根に移り—平小屋（三、四〇）

六、四　晴

滯在、宮本秀藏氏と終日語りたり。

六、五　晴

平小屋（四、五〇）—對岸（六、一〇）—大南澤（七、一五—七、

二五)—牛小屋跡(八、五三)—針ノ木峠(一一、二〇)—蝲澤(二一、一八)—大出(四、一五)—大町對山館(五、五四)

六、六　晴

大町—松本—東京

△西澤遡行　　中島　燃

五、二九

飯田町(一一、三五)

五、三〇

鹽山—廣瀨

五、三一

廣瀨(八、三〇)—二股(九、三〇)—西澤觀音(二、〇〇)—第五ノ釜(三、〇〇)—大淵(四、一〇)—カヲ澤出合(五、〇五)—蘦澤小屋(五三〇)

六、一

小屋(七、三〇)—京ノ澤小屋(八、〇〇)—第一瀧下(八、四五)—同上(九、一〇)—第一無名澤出合(一〇、四五)—二、三〇〇米突附近(一一、四〇)—晝食)—押出シ下(〇、二〇)—同道ニアフ(一、〇〇)—岩小屋(一、一〇)

六、二

岩小屋(八、一五)—京ノ澤小屋(九、三〇—一〇、四〇)—大淵(〇、一〇)—オックエノ肩(二、三〇)—大岳山社務所(四〇〇)—鹽山

△日光白根へ　　近藤恒雄、高木英二

六、三

上野發(一一、二〇)

六、四

高崎(二、一七—五、二五)—沼田(七、三〇)—血池地獄(一一、〇)—白根溫泉(四、〇〇)

六、五

溫泉(七、〇〇)—不動坂頂上(一〇、三〇)—前白根(四、〇〇)—一五)—奥白根頂上(一、三〇—三、〇〇)—湯本(七、〇〇)

六、六

湯本(九、一五)—光徳沼(一〇、二五)—志津小屋(一、四五)

六、七

小屋(七、〇〇)—大眞名子山(八、一〇—九、一五)—志津小屋(一〇、〇〇—一一、三〇)—男體山(一、二五—一、四五)小屋(二、三〇)

六、八

小屋(七、五〇)—清瀧(一〇、〇〇)—日光發(一、一〇)

●遠鳥居迄は分れ道は必ず右をとる事、即ち不動坂までは道がある。遠鳥居は高さ一間位の半ば壞れたるものにて右方にあ
る。

●遠鳥居より眞一文字に左方に登れば賽の河原、血池地獄より奥白根の麓には雪多し、白根は地圖の如く右に右にと搦んで

登る。

●白根を下る時急雪渓あり、カンジキを用ふ。

●公徳沼の手前の河原に添ひ眞東に行く、積石を頼る事瀧（梵字の瀧）の所で水を用意する事、最後の河原は地圖と合はぬ專ら積石をたよる。

●大眞名子に雪殆ざなし、小眞名子、女峰共雪見えず、男體は頂上に若干殘れるのみ、

●志津小屋水豊富、燃料少し。（近藤）

（注意）光徳沼の手前の河原を歩き若し道にぶつかつたらそれをそのまゝ行つてもいゝ、小屋がある。それは昔のケーブルの停留場の跡、まだ一家族足尾の人がゐる。こゝから道が梵字の瀧へついてゐる。約五分だ。こゝの人は瀧まで水をとりに來るとの事、途中右への道がある。それを行けば近藤氏の通つた所へ合するわけになる。（吉澤）

△天神峠より三國峠まで

五十嵐敷馬、松木謙三、渡邊九郎

六、七　上野發（五、二〇）—沼田（一一、一五）—谷川溫泉（三、四〇）

六、八　溫泉（七、〇〇）—天神峠（一〇、〇〇）—オジガ澤の頭（二、〇〇）—万太郎山（五〇、〇〇）—三國山（四、四五）—三國峠（五、〇五）—法師溫泉（六、四五）

六、一〇　溫泉（八、一〇）—湯宿（一一、四五—二、〇〇）—沼田（三、三五）—上野（八、一六）

△相談會

六、一七　先輩奥村氏部室に來り如水會山岳會と本部との關係につき相談す。

△金峯雁坂縱走

手塚晴雄、中島嘉一郎、宇佐美敏夫、横倉吟三郎

六、二四　飯田町發

六、二五　甲府（前三、四〇）—天神平（六、〇〇—六、四〇）—御岳金櫻神社（八、三五）—上黒平（一〇、五〇）—楢峠路ト傳丈澤トノ分岐點（一二、一〇—一二、三〇）—赤松平（二、二五）—刈合峯—樋水—水晶峠（三、四〇）—御室小室（四、〇〇）一泊

六、二六　小屋發（六、三五）—片手廻—金峰頂上（八、三〇—九、一〇）朝日岳（一〇、一〇—一〇、二〇）—國師三角點（一、一〇—一

二〇)—石塔尾根分點(一、五〇)—東股ノ頭(三、二〇—三、三〇)—富士見支峰ノ西ノ鞍部(四、五〇)幕營

六、二七

幕營地(八、〇〇)— 富士見支峰—ミヅシ(九、〇〇)—鞍部(九、一〇—一二、一〇)朝水ナキ爲辨當ナクパン腹ニテ空腹チ訴ヘミヅシノ小屋跡ニ往復シ食事チナス)—(甲武信一二三六)—木賊三等三角點(一、一五—一、二五)—戸渡山—破風小屋(三、〇五—三、三〇)—西破風(四、〇六—四、一五)—東破風(四、五〇)雁坂嶺(五、四〇)— 雁坂峠(六、〇五)— ナメラ澤合流點附近(七、四五)此ノ日一擧ニ鹽山ニ入ラントセシモ日暮レテ舊道(地圖ニアル道今ハ反對側ニアリ)ニ踏入リ已ムチ得ズ澤中ニテ幕營翌日澤チ一町程下リテ一人家チ見タリ、丁度ナメラ澤ト本流トノ合スルトコロニアリ幕營セシ澤チタヅネタレド不明ナルモ唐松尾澤ラシイトシカシ間違ヒラシト)

六、二八

幕營地(八、四五)—赤石(九、四〇)—廣セ(一〇、一〇—一〇、四〇)—圓川(一一、一〇—一一、五〇)—三ノ橋(一二、三六)—二ノ橋(一二、五三)—藤木(一、四五—二、二〇)—鹽山(三、二〇)歸京

正十五年度夏季登山計劃

△東北朝日岳へ　村尾金二、村瀨和四郎、吉澤一郎

七、三

上野發(九、一〇后)

七、四　晴

赤湯(八、一〇—八、五〇)—時庭(九、一五)—野川(〇、〇〇)—明神平峠(三、一〇—四、一〇)—桂谷(六、〇〇)

七、五　曇

桂谷渡邊清造方(七、三五)—木地山(一〇、一五—一一、四〇—丸森ノ小屋(二、一〇)

七、六　霧雨

小屋(九、一〇)—ホド澤(九、二五)—八兵衛澤—カクナラ澤(九、三七)—ヒコマッ澤ノ小屋(一〇、四五)—赤澤々(一一、二〇)—平澤(一一、三〇)—五貫澤トキリ立澤ノ落合(一二、〇〇)—魚止澤(一二、一八)—キリ立ノ小屋(一二、三〇)

●今日に限り案內者をつけた。平野村平山の庄司佐兵衛

七、七　雨後晴後濃霧ト風

小屋(八、二五—セキノ上(九、〇〇)—支澤右ヨリ(九、三〇)—雪溪—クレバス—晝飯(一一、一五—一二、一〇)—藪ニ入ル—這松地帶(四、三〇)—藪中ニテント(五、一〇)

七、八

幕營地(六、一五)—雪溪—藪—小朝日岳(三、一〇)—大朝日岳(六、一五)—ハマグリ雪野營地(七、〇〇)

七、九

野營地(八、四〇)—中ノ岳ノ急雪溪チ下リキル(九、二七)—西朝日岳(一〇、〇八—一〇、二〇)—野營場(一〇、四八)—

尾根上(一〇、五〇—一二、〇〇)—龍門山(一二、四〇)—百畝畠(一二、五五)—南寒江三角點(二、一七—二、四五)—北寒江山(三、一五)—狐穴野營地(三、四三)

七、一〇

野營地(六、四〇)—岩峯(コ、ヨリ笹原山ヘノ尾根出ズ)(八、二五)—以東岳一等三角点(九、〇〇—九、一〇)—小沼(九、二五)—東ノ澤ニ達ス(一〇、四〇)—大鳥池畔(一一、〇〇—一二、一〇)—中ノ澤(一二、三〇)—西ノ澤(一二、四〇)—道チ見出ス(一、四〇)—小屋跡(二、一八—二、三〇)—七瀧ノ下(三、〇〇)—ゲンダン澤(三、四〇—三、五〇)—冷水澤野營地(、五三〇)

七、一一

野營地(八、三五)—徒渉十二回—西俣澤出合(四、五五)—野營地(五、〇〇)

七、一二

野營地(七、二〇)—サラブチノ小屋(九、五〇—一〇、三〇)破レシ橋(一二、三〇)之ヨリ道—繁岡(三、〇〇—五、三〇)—上田澤(七、四〇)

七、一三

自動車ニテ鶴岡へ—余目—新庄—福島—飯坂温泉

七、一四

歸京

△甲斐駒、仙丈、白峯鳳凰

奥野綱重(先輩)、高木英二、宇佐美敏夫、横倉吟三郎
芋川稔一、大野隆治、中島嘉一郎、
案内者、水石寅夫、小池國武、中込政房

七、一〇　飯田町發

七、一一

日野春(四、四〇)—柳澤(六、〇〇—七、四五)—駒岳神社(八五〇—九、一〇)—笹平(一二、四〇—一二、五〇)—屏風小屋(三、三〇)一泊

七、一二

小屋(六、〇〇)—濁見峠(六、五五)—七丈小屋(七、〇〇—七四五)—大日大聖不動明王ノ鳥居(八、一〇—八、五〇)—岩上ニ劍アル處(九、二〇—九、三〇)—頂上—六方石(一一、四五大暴雨ノ爲記錄不明)—仙水峠(二、〇五—二、一五)—北澤小屋(三、一〇)

七、一三　雨ノ爲滯在

七、一四

小屋(五、三〇)—仙丈ノ屋根ニ出ズ(六、二五—六、三五)—四回休憩—小仙丈(八、三〇)—四回休憩—仙丈二等三角点(九、五〇—一一、〇〇)—伊邦荒倉(一、一五)—兩股ニ下ル鞍部(三、一〇)—兩股小屋(三、五〇)

七、一五

小屋(五、五〇)—前日下リシ尾根(六、五〇—七、〇〇)—三峰(一〇、五五—一一、二〇)—間岳(一二、〇〇—一二、一〇)

—農鳥小屋(一、五五)—農鳥三角点 (二、五五—三、四五)—小屋(四、五〇)

七、一六

小屋(五、五〇)—間岳(七、〇〇)—北岳 (九、三〇—一〇、三五)—大樺ヘ下ルトコロ(一一、一〇—一一、二五)— 大樺池(一二、一〇—一二、五五)—廣河原小屋一泊

七、一七

小屋發(六、三〇)—白鳳峠(九、二五—九、四〇)— 高嶺三等三角点(一〇、四〇—一一、三〇)—賽ノ河原(一二、三〇—一二五)大日岩往復)—北御室小屋(二、一〇)—五色ノ瀧 (二、三〇)—二、四五)—青木湯(五、〇〇)一泊

七、一八

青木湯(七、四〇)—鳥居峠(八、四〇)—折居(一〇、一〇) 此處の處より乘合自動車にて韮崎に出で一二、四〇分の汽車にて歸京

△燕槍岳縱走乘鞍へ

リーダー、近藤恒雄、後藤十郎先生、高橋要二、高瀬進三 外十四名

七、一二

飯田町發、午後一〇

七、一三

松本驛(七、一七)—七、五七)有明(八、三六—九、〇〇) 有明發電所(一一、三〇—一二、〇〇)—中房着(三、〇〇) 就床(一〇、〇〇)

七、一四 起床 四、〇〇

中房發、五、三〇)—富士見松(七、三〇)—合戰澤小屋(八、〇五)—燕小屋(九、三〇—一一、〇〇)—大天井(一、一五) 西岳小屋(四、〇〇—四、三〇)—殺生小屋(七、〇〇)

七、一五 起床 四、〇〇

大槍頂上(五、三〇)—殺生發(八、〇〇)—一ノ俣小屋(一〇、五〇)—奥穗高入口(一一、三〇—一二、〇二)德澤 (一、二〇—一、五〇)—上高地着(三、二〇)

七、一六 起床、五、〇〇

出發(六、三〇)—燒ヶ岳頂上(九、五〇)—同下山(一二、〇〇—一〇〇)中の湯着(四、〇〇)白根ヘ向ふ一隊と平湯へ向ふ一隊とに分る。平湯組は六時頃着。白骨組は途中道を迷ひ再中の湯に引返し一泊す。七時頃

七、一七

白骨着(午前十一時)—乘鞍の一行着は午後五時

七、一八

白骨發(九、〇〇)—島々(三、三〇)— 松本着(五、〇〇)—同發(七、四三)

七、一九 東京着 午前五、二〇

感想—二日目に一氣に殺生迄の行程は少し遠いけれども後の都合は非常に巧く行きます。

中の湯から白骨へ行つた者は途中、崖が崩れてゐた處

で道を取違へて終に引返しました。乗鞍へ行つた連中も元氣旺盛で白骨では丁度村の祭りで思はぬ愉快に打興じました。

△烏帽子、槍、穗高縱走

リーダー　高木英二、中島嘉一郎、外四名

七、二〇　飯田町發

七、二一　松本ヨリ電車ニテ大町着、對山館ニ一泊

七、二二　對山館（八、三〇）—電車ニテ終點迄—葛湯（一一、二〇）一泊

七、二三　葛湯（七、一〇）—濁（八、四〇—九、二〇）—ブナ立三角点（一二、三〇—一、三〇）—烏帽子往復小屋（四、三〇）

七、二四　小屋（六、二五）—野口五郎二等三角点（九、〇〇）—赤岳（一二、〇五—一二、一〇）—赤岳野營地（一二、二〇—一、三〇）—鷲羽（二、三〇—三、〇三）—三叉蓮華小屋（三、四〇）

七、二五　小屋（六、三五）—双六小屋（八、一五—八、五〇）—霞澤岳（九一〇—九、二〇）—槍ノ肩（一二、五五—二、〇〇槍往復）—殺生小屋（二、一五）

七、二六　高木英二、中島嘉一郎、大町ノ案内一人小屋（六、三〇）—北岳（七、二〇）—中岳（七、二〇）—南岳（七五五）—キレット（八、三〇—八、五〇）北穗高（一〇、一五—一一、〇〇）—涸澤岳（一二、二五）—涸澤小屋（一二、四五）

七、二七　小屋（一〇、〇〇）—奥穗高（一〇、二五）—前穗高（一一、五〇）—清水屋（三、〇〇）一泊

七、二八　松本へ

△立山、針木越

リーダー　松木謙三、森鑛次郎、金田一郎、久保田禮治、大岳遵加納太郎、渡邊三郎、外ニ先輩一名

七、一三　晴　上野發金澤行急行

七、一四　晴　富山—千垣—藤橋ホテル

七、一五　晴後曇　藤橋（六、三〇）—追分小屋（一二、〇〇）—室堂（五、〇〇）

●追分の小屋附近に新しい小屋が出來かゝつて居つた。此の邊からそろ〳〵雪原となつてゐて室堂まで雪の上ばかりで途中足跡がわからなくなつて困つた。大雪なのには驚いた。雄山が見えたり、かくれたりしてゐた。丁度室堂に着く頃雷鳥澤なぞジグザグに降つてくる劍岳歸りの二三人を見る。

七、一六　晴

室堂(六、〇〇)—雄山(七、四〇)—ザラ峠(一二、四五)—中食—平ノ小屋(三、〇〇)

●何處も良く見えた。平ノ小屋の親切な待遇に較べて、いつも乍ら室堂は泊つて氣持ちの悪い所である。晩は遲くなるまで日本電力の宮本氏と談じ、三月遊びに來る事を約束した。そして皆でその晩は水電の小屋に泊つた。籠渡しの下手に釣橋が出來たが對岸がガレてゐるので初めての人には通れない。

七、一七　晴

平小屋(六、一五)—籠渡(六、五〇)—針木峠(一一、三〇)—中食—大澤ノ小屋(一、二〇)—大町(五、一〇)—松本解散

針木峠の上で相當の年輩の人にあふ、今年は殊に多い樣だが嬉しい事ではある。針ノ木の雪渓は大澤小屋の下まで續いて居た。大出で丁度水電用の電車に合つたので嫌な道を歩かないで濟んだ。

△北鎌尾根ト穗高方面

七、一六

飯田町(一〇、〇〇)

七、一七　晴

松本(七、五五)—柏矢町(八、四〇—九、一〇)—烏川橋(一一五—一一、一〇)—大助小屋(三、四五)

七、一八　晴

小屋(六、三〇)—烏川(七、四五)—岩小屋(一〇、二〇—一〇、三〇)—常念小屋(二、三五)

吉澤一郎、中島　熙

七、一九　風雨強し滯在

小屋の主人山田氏が先立ちとなり、大いにメートルをあげた。山男の朗たる踊り實に愉快なり。

七、二〇　曇—雨—晴

小屋(七、五〇)—中山乘越(八、五五—九、〇五)—二俣本谷(九、二五)—梓川出合(一〇、三五—一二、一五)—赤澤岩小屋(一、〇五)—槍澤小屋跡(一、一五—一、五〇)—大槍小屋(三、三五)

●定量に小屋は大いににぎやかなりき。

七、二一　晴後曇

大槍小屋(五、三〇)—肩ノ小屋(六、三五)—槍(七、〇五)—祠の西側を降る—北鎌平(八、五五—九、二〇)—第一峰(九、四五)—獨立標高点へ向ひ降りしも霧來る爲中止す(一〇、五〇—一一、二〇)第一峰(一二、〇〇—一二、三五)—北鎌平(一、〇〇)—槍頂上(三、〇〇)—大槍小屋(四、〇〇)

●ベンちやんが夕方一人で槍澤を登つて來た。

七、二二

小屋(七、〇〇)—槍穗高分点(八、〇〇)—大喰に至りたる時濃霧及び强風の爲引返へす—同行者二人は槍平へ、自分等は槍澤を降る—大槍小屋(一一、〇〇)—槍澤小屋(一二、〇〇)—一俣小屋(一、〇〇—一、四五)—奥穗高への橋(二、二五—二、五五)—屏風の岩小屋(三、一五)雨來る

七、二三　曇

岩小屋(一〇、二〇)—デブリを渡り(一一、〇五)—道なくなり雪渓となる(一二、一五)—涸澤の岩小屋(二、二〇)

七、二四　曇

岩小屋(六、〇〇)—雪渓を一週す(六、三〇)—五峰と四峰との鞍部(七、〇五)—第五峰(七、二〇—七、四〇)—第四峰(八、二七—八、三五)—肩をかす所終り(九、五〇)—第三峰(九、四五—一〇、〇〇)—鞍部(一〇、〇五)—チムニイ(一〇、三〇)—第二峰(一一、一〇—一一、一五)—第一峰(一一、二二)—鞍部(一一、三〇)—前穂高(一一、四五)—奥穂高(一、三〇—二、一〇)—涸澤小屋(三、二〇—一五五)—穂高小屋(三、二〇)

七、二五　晴

岩小屋(二、二五)—上高地

●此の日奥と前穂高との鞍部より岳川に降るのを忘れてうつかり横尾谷へ行つてしまつた。

七、二六　雨

霞澤岳へ

七、二七　曇

松本へ

●二十七日は肩の小屋開きで穂刈氏(小屋主人)が遊びに來る様にと云つてたがもうあきたので歸つてしまふ。此の日部長木村惠吉郎教授が大槍小屋に泊つて居られたとの事を聞いて殘念な事をしたと思つた。

×　×　×　×

村尾金二

△常念岳を經て有峰へ

七、一九

飯田町(一〇、〇〇)

七、二〇　晴

豊科驛下車(三、三〇)—離山須砂渡(一〇、三〇)—大瀧澤岩小屋(五、三〇)

七、二一　晴

岩小屋(六、一七)—常念小屋(一〇、三〇—一一、〇〇)—一俣小屋(二、三〇—四、一〇)—大槍小屋(七、三〇)

七、二二　曇後雨

小屋(六、五〇)—双六小屋(一二、二〇—一、二〇)—三又蓮華頂上(三、一七—三、三〇)—蓮華小屋(四、一〇)

七、二三　雨

小屋(四、五〇)—鷲羽池(五、四五—六、〇〇)—小屋(六、三〇)

七、二四　晴後雨

小屋(七、四〇)—蓮華頂上(八、三〇)—黒部五郎小屋(九、三〇—一〇、三〇)—五郎岳(一二、二〇—一、〇〇)—上岳小屋(四、〇〇)

七、二五　晴

小屋(七、五五)—薬師岳(一〇、三〇—一一、三〇)—引返し

て—眞川小屋（二、一〇—三、〇〇）—有峰山越氏方（五、二〇）

七、二六　晴後雨

有峰（七、〇五）—前川に沿ひ道あり—エンネ谷合流点（八、一〇）—東坂森谷を渡る（九、二〇）—大谷（一〇、五〇）—マ谷（地圖の小杉谷、一一、五〇）—龜ノ谷（一、四〇）—千垣發（五、〇〇）

△只見川を遡る

本二　松木謙三、同行　兄喜之七　案内富永重太郎

七、二二　晴、暑さ甚し

長岡（七、四五）—小出驛（九、三五）—大湯東榮館泊（一、四五）途中下折立の重太郎の家に寄る。

七、二三　雨後曇　起床　六、〇〇

出發（七、四五）—坂本（八、四〇—八、五〇）—明神峠（一一、二五—一二、一〇中食を爲す）—石抱橋（一、〇五—一、二〇）—清水泊（二、二〇）

清水のホトラ澤の傳之助事佐藤作太郎の家に宿を借る。神蜂の方まで投網を打ちに下つて夕食には岩魚の鹽燒に舌鼓を打つ。就寢　九、〇〇

七、二四　晴　起床　四、三〇

出發（七、五〇—八、一〇）—中ノ俣口（八、一〇）—須原口（八、一五）—下白澤落合星庄平宅（二、四五—三、二〇）—鷹ノ巢平泊（四、〇〇）

鷹ノ巢平で必ず泊られねばならぬのでゆつくりぶらつく。須原口では後に大鳥澤に下る米を預ける。

七、二五　晴　起床　三、四〇

出發（四、三五）—赤川渡過（五、二〇）—不動瀧（五萬分ノ一に三丈瀧となつて居る所—白突澤只見川出合（八、二五—九、〇〇第一回中食—）只見川を離れて藪登りを始める（一一、三五—藪中にて第二回の中食を爲す（一二、二五—一、〇五）—第一の小澤（二、五五）—第二の小澤（四、〇〇）—平滑瀧（四、二〇）—三丈瀧へ下り平滑瀧に歸る（五、一五）—第三回中食。出發（五、三五）—尾瀬原鮎釣小屋（六、二五）—尾瀬沼尻（八、四五）—長藏小屋（九、三〇）

只見川は水量豊富の爲に遂に澤傳に三丈瀧に出るを得ず途中やむなく藪中に入る、爲に餘り上り過ぎた爲に三丈瀧を越して平滑瀧に出てしまつたのである。第一の小澤に沿つて下りると丁度三丈瀧に出る樣に思れる。平滑瀧は實に立派であつた。十六夜の月に照された尾瀬は何とも言へぬ味があつた。

七、二六　曇　起床　六、〇〇

午前中は小雨の爲小屋の附近をぶらつく。

出發(一、〇〇)—沼尻(一、四五)—燧岳頂上(三、五〇—四、二〇)—沼尻(五、二〇)—長藏小屋(六、〇五)
朝沼に鶴が下りて來て居た。沼尻からよく日光の山が見えた。

七、二七　晴　夕立あり　起床　七、〇〇
出發(八、三五)—沼山峠(九、一〇—九、四〇)—七入平虎藏老人宅中食(一一、四〇—一、一〇)—檜枝岐丸屋泊(二、一〇)就床(八、二〇)
沼山峠の眺望は尾瀬沼を見るには三平峠と同じ樣に良い。
駒ヶ岳もよく見えた。

七、二八　雨　起床　三、五〇
出發(四、五〇)—駒ヶ岳中腹(五、五〇—六、二〇)—丸屋(七一五)
途中まで行くと大變な雨でいくら待つても晴れさうに見えぬので歸る。

七、二九　雨　滯在
七、三〇　雨　五、〇〇
出發(七、〇五)—キリン手(七、四〇)—大津岐峠頂上(一〇、〇五—一〇、二五)—峠下落合中食(一一、三五—一二、二〇)—小出(六、三五)—終列車にて歸岡。

△早月から劔へ　村尾金二　外二名
八、六　晴
銀山平に歸る事としたが大津岐の橋は勿論流失し只見川は一丈餘尺の增水となり橋と云ふ橋は全部落された爲に對岸に立派な道は見えるが渡るを得ず。遂に右岸の藪を分けて進まねばならなかつた。

七、三一　晴　超床　五、四五
出發(七、三五)—白板岩の上手只見川徒渉(八、〇〇)—須原口(八、〇五—八、三五)—仕入澤口(九、二〇)—八崎池(一〇、三〇)—瀧澤出合中食(一二、〇〇—一、一〇)—大鳥澤只見川出合廢坑飯場(三、〇〇)
此の邊の只見川は實に川幅も廣く水量も豊富で壯觀であつた。岩へつりも割に樂であるし前日の降雨增水の爲岸の藪もなぎ倒されてゐた爲に割に早く大鳥澤出合に出る事が出來た。

八、一　雨　起床　五、〇〇
出發(六、三五)—大鳥池(八、三〇)未丈ヶ岳頂上(九、一〇—三ツ又口(一一、一〇)萬吉澤紫巖小屋中食(一一、四〇—二、一〇)—湯之谷乘越(一、〇〇)—大湯(二、三〇—三、四五)—小出(六、三五)—終列車にて歸岡。

△早月から劔へ　村尾金二　外二名
八、六　晴
上市(一一、五六)—蓬澤(六、〇〇)—白萩發電所入口(七、三〇)
八、七　雨後晴
連日の降雨に出水甚しく袖澤の下りは不可能となり大津岐

白萩發電所（八、三五）―伊折（九、三〇）―ゾロメキ發電所（一、〇五）

八、八　晴

發電所（八、五〇）―パンパ島取入口（九、二五―一〇、二〇）

ブナクラ谷（橋流失しキヤンプ一、〇〇）

八、九　雨

豪雨の爲め引返す

小屋（六、〇〇）―パンパ島取入口（八、〇〇）

八、一〇　雨　滯在

八、一一　晴

パンパ島入口（七、三〇）―ブナクラ谷徒渉（八、四〇）―本流を左岸へ徒渉（九、三〇）―右岸へ（一二、〇〇）―雪渓左岸へ（一二、四五）―池ノ谷出合（一、一五）―右岸へ徒渉（一、三五）河原にてキヤンプ（四、〇〇）

●此の日は數日前からの豪雨で、早月川の橋が皆流れてゐて、雪解けの冷い水の徒渉に惱まされました。

八、一二　晴

幕營地（七、四五）―辨天岩（八、三五―八、五〇）―小窓（一二、〇〇―一、〇〇）―岩小屋（二、〇〇）―劒澤にてキヤンプ（三、〇〇）

八、一三　晴

幕營地（八、四〇）―長次郎谷下（一〇、二五―一一、〇〇）―平藏谷下（一一、二五）―平藏ノ頭（一、〇〇）―劒頂上（一、三〇―三、〇〇）―平藏谷下（四、〇〇）―劒小屋（五、一五）

八、一四　晴

小屋（八、〇〇）―別山乘越で三時間下の河原で二時間ばかり遊んで―室堂（二、一〇―三、〇〇）―弘法茶屋（六、〇〇）

八、一五　晴

小屋（六、二〇）―稱名瀧下（七、三〇―七、五五）―藤橋（九、三〇―一〇、〇〇）―芦峅寺（一一、三〇）―金澤へ

△日光の山へ　吉澤一郎　外三名

八、一六　曇

上野發（六、五〇）―日光（一〇、〇〇）―中宮祠―和舟にて對岸へ―千手ヶ原入口キヤンプ

八、一七　雨

―十三町歩き―西湖キヤンプ

一寸いきな湖である。

八、一八　雨

西湖―湯瀧―湯本（板屋）

八、一九　小雨

霧深き爲白根をやめる。

湯本―光德沼―梵字の小屋泊

八、二〇　晴後曇

小屋（七、四〇）―御澤：（七、五五）―太郎へ（八、二〇）―太郎山（一〇、二〇―一〇、四〇）―（一二、〇〇―一二、二五）―志津小屋（一、四〇）

八、二一　雨後曇　雨來る
小屋(一一、三〇)—男體頂上(一、〇〇—一、二〇)—小屋(二、〇五)
八、二二
小屋(六、五〇)—大眞名子(八、〇〇—八、五五)—鞍部(九、二五)—小眞名子(一〇、〇〇—一〇、三〇)—富士見峠(一〇、五五—一一、四〇)—モツコ平—ショーデン岩(一、三〇—二、四〇)—裏見茶屋(二、三〇—二、四〇)—荒澤停留所(三、〇〇)—日光發(三、四〇)
●此の旅行は氣分本位で記錄としては價値なきもの、一つ癪に觸つた事がある。三中出身で本科二年の木村元則とかいふ人がある相だが汽車の中で商大の面目にかゝはる様な事を自分に吐いた。少しつゝしんで貰ひ度いものだ。さかくノートや圖書館にかじりついてる人は世間を知らない様である。
△尾瀬より日先へ　リーダー　手塚晴雄、金田一郎、平井貞一、外四名
八、一六　晴
上野(五、二五)—沼田(一〇、四五)—上久屋(一二、〇〇—一二、四五)—高平(一、四〇)—栗生峠(四、〇〇)—大原新町(四、三〇)
八、一七　雨
大原新町(九、四五)—追貝の外れ(一〇、四五)—千鳥新田(一一、三〇)—晝食—鎌田笠取神社(二、三〇—三、一〇)—中里(四、二〇—四、五〇)—古仲(五、三〇)
注、一、追貝の町へ入る前の橋を渡る所に左に取る道(近道)がある。追貝の外れで本道と合す。
二、千鳥新田からも小川を渡つて左の方へ行く近道がある、兩方とも地圖にあり。
八、一八　雨
古中(九、四五)—アテ坂(一、三〇晝食)—鳩待峠(三、〇〇)—(四、三〇)道を失し、露營する、其の地點は川上川が二つに別れて流れて行く所、兩方の川は中々合し相にも見えない。平常ならば渉る事自由、不安の一夜を明かす。
八、一九　雨止む
水が減つたので捜索に出掛け道が川上川を横ぎる地點一、五一二米突の山の下に小屋があつた。鯑漁りの小屋、火があつたので朝食をこしらへる。此の小屋から十分位の所に二つの小屋があつた。一つは建築中、他は粗末なもので人夫が大工の泊るものらしい。「お助け小屋」とか云ひ縣營である。此處へ終日滯在して悠々散歩し、原の景色を探る。
八、二〇　雨
午前中はお天氣なので出發、忽ち天候激變
小屋(一一、〇〇)—檜枝岐小屋(三、〇〇)—長藏小屋(六、三〇)
此の道は地圖の割に困難、檜枝岐の所の道がわからない北と南に二つ小屋があり、北は燒けた後だけ、道は其の北

の方の後から東へ行く、此の小屋の地點は道が尾瀬を通つて藤原の地圖から燧岳の地圖へ移る境の所昨日から病人が二人出來盛んに下痢しはじめ、進まない。

八、二一　晴後雨

長藏小屋滯在。病人續出五人。

八、二二　曇時々雨

病人も少し良いので出發、

小屋（七、四五）—黑岩山南の鞍部（一二、四五—一、三五）—鬼怒沼山（四、〇〇）—沼（四、五〇）

二組に分れてしまひ、後の三人中に病人が出來、途に前の組と一緒にならなかつた。前の組は無事四時頃八丁湯へついた。後の三人は漸くにして鬼怒川へ出たが既に七時にも八時にもなり。道は暗くなつてわからず天幕も持たないので日光澤の少し上の岩の下で一夜を明かす道が幾度か川を渉つてゐるのでわからないのだ。

八、二三　晴

夜が明けて道を探すと渉るべき所は石が積んである。間も無く八丁湯へついた。先の連中は小屋の中で良い氣持ちで寢てゐた。そして今日一日此の小屋に滯在ときめ病人の靜養につとめた。

八、二四　晴

八丁湯（九、一五）—手白澤（九、二二）—鬼怒川を渡る（一〇、〇〇）—川俣温泉（一一、〇〇—一二、三〇）—西澤金山（三、〇〇）—湯本（五、三〇）

八丁湯から噴泉塔をへて西澤金山へ行く近道がある。二里十二町。

注、僕等が川上川で露營した所から先の道は、河（川上川）を渉らないで河から東の方へ出てゐる河を傳はつて少し行き又それを右にはなれて行けば川上川へ出て鯏釣りの小屋へ出る。

△秋の燕、槍へ

江口定條、奥野綱重、赤沼千尋、吉澤一郎　外三名

九、六

飯田町發（一〇、〇〇）

江口定條氏は新宿より乘車。

九、七　晴後雨

松本にて下車、飯田屋により萬事整へたり。

有明下車—有明温泉—中房温泉—燕小屋

一日で燕までは少し強行だつたが江口さんの達者にはあきれた。夕方の御來迎を見る。自分の影が虹の中に見えるのは面白い。

九、八　晴

一日ゆつくり小屋氣分を味ふ。赤沼氏がよく歡迎して呉れた。北燕へ行つて見る。這松の中での晝寢は暑すぎる夕方小池新二氏と他に友人が登つて來た。小池氏は蔦で五十嵐渡邊兩氏にあつたとの事。

九九、晴後雨　　村尾金二　外一名
　肩の小屋泊、すつかり豪遊だつた。
九、一〇　雨
　滯在
九、一一　曇
　上高地へ―槍澤に雪殆んどなし―清水屋泊。
九、一二　晴
　歸京

△鐘釣から白馬へ

九、一二　晴
　宇奈月(一一、三〇)―新鐘釣(五、三〇)
九、一三　晴
　温泉(八、四〇)―猫の踊場、此處へ黒部保勝會にて今年中に小屋を作る由、地圖黒部圖幅不歸岳南方一九〇〇米突起さの鞍部の邊―雨の爲幕營
九、一四　曇後雨
　祖母谷(六、〇〇)―祖母谷(一、三〇)
　幕營地―清水平(八、五五―一一、三〇)―白馬離山小屋(二、〇〇)
九、一五　曇後雨
九、一六　晴
　小屋(八、一〇)―白馬頂上(八、三五―九、三〇)―再び小屋へ(九、四五―一〇、〇〇)―白馬尻(一一、三〇)―松本へ

九、一七
　部員集會して展覽會につき相談す、
　五十嵐數馬、渡邊九郎、高橋要二、村瀬和四郎、松倉榮司、吉澤一郎、中島嘉一郎、近藤恒雄

九、二三
　創立第五十一周年記念日につき、展覽會開催、於B室
　田中阿歌麿博士（外國の地圖、寫眞其他）
　田中　薫　先生（寫眞、繪、地圖）
　江口　定條氏（寫眞）
　如水會　山岳會（同）
　五十嵐數馬（同）
　渡邊九郎（同）
　吉澤一郎（同）
　松倉榮司（漫畫、スケツチ）
　本學教授其の他學生に對し大いに當部の意氣を示す事を得たるは一へに右記諸氏及び部員諸氏の努力の賜なり。
　吉澤一郎、村尾金二、近藤恒雄

△年中行事秩父參り

一〇、五
　飯田町(一一、三五)
一〇、六　晴後曇小雨
　猿橋(二、四三)―橋(四、一五)―佐野峠(一一、〇〇―二一、〇〇)―池ノ尻(五、四五)

一〇、六　小雨
池ノ尻龜井屋（九、〇〇）—中川金治氏と遇ひ話す—大田和峠（一〇、〇五）—マリコ川（一〇、四五）—餘慶橋（一、〇〇）—ナメドロ入口（一、一五）—岩岳（四、〇五）—大常木谷（五、二〇）—會所トノ分點（五、四〇）—鞍部（六、二〇）—龍喰谷（七、三五）—楯ノ澤小屋（八、〇〇）

一〇、八　雨
小屋（一一、〇〇）—將監峠小屋（一一、五〇）

一〇、九　小雨
小屋（八、〇〇）—高丸戸（八、五〇）—戻る—地圖の將監峠（一〇、二〇）—十文字（一一、五〇）—雁峠小屋（一、三〇）—ツバクロダルミ（二、〇〇）—小屋跡（二、三〇）—製材所の跡（二、五〇）—熊穴澤落合（四、一〇）—豆燒澤（五、五〇）—栃本大村方（八、三五）

一〇、一〇
栃本（八、三五）—中食—突出峠と稱する所（一、二〇）—雁坂峠（二、三〇—四、〇〇）—小屋（四、三〇）

●水は峠澤、利鎌の如き月出でたり。

一〇、一一　曇
小屋（八、三五）—ナメラ澤（九、一〇）—廣瀬（一〇、二〇—一一、〇八）—二俣小屋（一二、三〇）

一〇、一二　曇後晴
小屋（六、二〇）—大窪澤（六、三五）—魚止瀧（六、四五）—石塔尾根道—岩峯（一一、三〇）—三角点（一一、三四）—鞍部（三、〇五）—國境尾根（四、三〇）—國師（五、〇〇）—三繋平（五、三〇）

一〇、一三　晴
平（六、四〇）—東タルの水場（七、二〇—九、二〇）—朝日岳（一〇、一五）—金峯山（一一、一五—一一、五五）—金山（二、三〇）—金泉湯（四、〇〇）

●近藤は泊らずに歸京、彼は親孝行なり。

一〇、一四　晴
湯（九、二〇）—鳥井峠（一〇、一八）—中尾（一一、五五）—韮崎（一、五〇）—白鳳會幹事柳本氏の許により御馳走になる—發（三、一五）

●若槻氏が鹽山から同車したのでうるさくて寢られなかつた△其の他

●五十嵐數馬、渡邊九郎の兩氏は上高地及び白骨へ紅葉見物に行つた。中々風流だ。乘鞍の雪は實に良かつたとの事。

●友田勇氏は友人と八ヶ岳及び淺間へ行つた。中々隅にをけぬ事を淺間附近でやつて來たらしい。

●尚部員三富、小栗、森竹の諸氏は今夏支那見物に行つた。

（一橋山岳部年報終）

●冬季スキー練習會會員募集●

場　所……信州下高井郡野澤温泉商大スキー場

宿　舍……さかや旅館

期　日……自十二月二十五日至十二月三十一日

尙希望者は延期滯在するも差支へなし。

費　用……一日金一圓六十錢

外に參加申込金一圓、雜費二圓

スキー貸料一日二十錢宛

締切日……十二月二十日

申込所……商科大學内一橋山岳部

山●スキーにも●スキーにも適當なスロープが豊富ですから澤山來て下さい。はじめての方も大いに歡迎します。少しの危險もありませんからごんな老人でも大丈夫です。スキーは賣る程ありあまつてゐますから御心配も無用です

如水會山岳會年報

大正十五年六月十八日丸ノ内ホテル内如水會倶樂部にて開催會名其他左の通り決定。

一、會　名　如水會山岳會

一、會の目的　山岳趣味を中心としての如水會員の懇親

一、會員資格　如水會々員にして入會の申込ありたる者

一、會　費　必要に應じ其都度分擔

一、委　員　幹事長　江口定條

幹事　堀内明三郎

篠部富藏

奥野綱重

伊藤多兵衛

長谷川丈助

中川孫一

發起人名

江口定條　堀内明三郎　上田貞次郎　伊藤多兵衛

岩倉具光　是永桃吉　篠部富藏　畠山藏六

高橋政治郎　長谷川丈助　本田松治　會原喜代藏

長岡孝　足立一良　山根春衛　猪谷善一

奥野綱重　守田依隆　森田市松　澤村秀

中川孫一　中村弘

夏の山登り―燕より槍へ

幾班も出來る可能性はあつたが最初の事でもあり所謂「親睦をはかる」目的よりして一班にしたので七回目さいふ江口定條

氏及三回目といふ堀内、伊藤氏を除いては一度行つた會員―殊に若い人達は皆行つてゐるので―は參加しない爲に比較的參加者が少なかつた。明年は尠くとも五班は出したいと思ふ。

參加者　江口定條氏、堀内明三郎氏及令息、力石元次郎氏及令息、伊藤多兵衞氏、山田清太郎氏、長谷川丈助氏、矢田潤二氏、神谷肇氏、奥野綱重氏、森田市松氏、田畑孝三氏、竹内五郎氏及友人一名、澤村秀氏、村山多三郎氏令息、淺原丈平氏（上高地より）

七月二十九日夜　飯田町發

同三十日　曇時々雨　有明（九時半）―中房温泉（後二時）

同三十一日　晴　中房（五時）―燕山荘（八時半着―十時半發）―大天井岳―西岳―殺生小屋（後七時）

初めてにしてはあまりに強行だつた。然しタイムは他の學生の班に些かの遜色ないと思ふ。而も一人の「脱會者」も出さず。

西岳へ着いた頃より風強く雨さへ混ゆ。

大天井より江口、力石、矢田三氏分れて常念へ向ふ。

八月一日　雨　小屋（九時）―鎗澤―上高地（後四時半）

頂上へ行かんと風雨の止むを待ちしが遂に斷念。

常念隊に「鎗に入つて鎗を見ず」と冷かさる。

八月二日　晴　上高地（七時半）―德本（十時半）―島々（三時）―松本

八月三日　朝　歸京

その一行の懇親會

十月六日の夜四谷三河屋にて開く。力石氏徹底的にベデストリアンとなり歸途高輪迄歩いて行く。

（詳細の紀行は如水會々報大正十五年十月第三十五號及十一月第三十六號に掲載）

秋の旅會―三峠山へ―

江口定條氏、堀内明三郎氏、力石元次郎氏及令息、山田清太郎氏、堀内尚中氏、長谷川丈助氏、淺原丈平氏、中野益三郎氏、神谷肇氏、奥野綱重氏、森田市松氏、片岡龍天氏、澤村秀氏、神谷肇氏、室伏三男氏、奥野綱重氏、森田氏、臼杵春水氏、

十月三十日午後十一時半　飯田町發

三十一日午前二時五十二分　大月着

自動車は十六人を鮨詰めにして早川畔を疾走する。小沼から登る豫定だつたが時間がまだ早いので船津まで行つた。

闇の中に白い富士鏡の様な冷え切つた河口湖が浮んで見える空にはオリオンの三星やシリウスが南中してゐた。

五時船津發五萬分の圖幅にある尾根傳ひの小徑を行く。霜が一面に立つて靴の跡のみ闇の中に光る。夜は墨繪の様な山々のマージンより明け初める。

小沼から行く様な道の變化はない代り飽くまで眺望がいい。道は大變樂だ。

八時三峠山着、十時三十分發、河口村よりボートにて船津着後一時。籠坂峠を自動車で下るの趣がある。北海道の狩勝峠を思出させる。御殿場着三時半、七時歸京。

一橋山岳部々員住所錄

（大正十五年十月末日調）

部長　木村惠吉郎教授
顧問　佐藤弘先生
顧問　田中薰先生
顧問　杉浦德次郎先生

本科

松倉　榮司……牛込區矢來町三山里ほノ五號、大石方
五十嵐數馬……市外龜戸町三ノ九五
小栗　吉雄……府下杉並町阿佐ヶ谷六八九
友田　勇……麹町區五番町十八、愛岐館方
渡邊　九郎……府下日暮里町渡邊町筑波臺
吉澤　一郎……芝區櫻田本郷町九
米田　義男……牛込區河田町一九、豊前育英會方
曾田莊太郎……日本橋區上槇町四
中島　燃……府下杉並町馬橋一〇〇、小竹方
村尾　金二……府下大森町澤田五六六
村瀨和四郎……府下西大久保一〇四
矢作　太郎……府下松江町東小松川四二九九
松木　謙三……府下西巢鴨町庚申塚二四四、松井清方
三富福之助……麻布區飯倉片町十六、織田方
森竹　春雄……麹町區三年町二
冠木　啓藏……小石川區大塚窪町三八
高木　英二……小石川區白山前町五、前川方
近藤　恒雄……牛込區原町三ノ四　牛越方

豫科

高橋　要二……淺草區馬道二ノ二
石津　和一……麻布區龍土町五九
中島嘉一郎……石神井寄宿舍第一室
宇佐美敏夫……芝區田町七ノ一
手塚　晴雄……神田區連雀町一八
佐久間幸夫……寄宿舍第十一室
橋倉　實美……同
中森長太郎……同
野村　治信……同
白井　次郎……同
加賀　行三……同
芋川　稔一……府下和田堀町方南三三〇

編輯後記

●遂に年報らしいものになつた。自分等は嬉しい。これから皆でこの愛する「針葉樹」を枯らさない樣にすればいゝのだ。それにしてもいざ編輯に當るとなると豫科の石神井にあるといふのは實に不便を感ずる。豫科の人の記行文其の他がないのは殘念だが之はあながち本科のものゝ横暴ではないのだから承知してもらひ度い。如水會の方の先輩方の玉稿もあまりない。これもそれも皆時期が嫌に迫つてしまつたからなのだ。第三號には今から心して置く積りである。それから原稿を出して下さつた人々特に如水會の人々が忙しい事務の傍ら色々世話して下さつたりしたのは全く感謝に堪えない。學生ならいざ知らず紳士となつてはこんな事は嫌な事だ。そして又苦しい事に異ひない自分も原稿催促なんか嫌だつたがかく出來あがつてしまへば文句はない。

山小屋欄は編輯の都合で順序について非常に亂雜になつてゐる傾向があるが、これは山小屋欄そのものがあまり皆に徹底しなかつた事が主原因なのである。第三號には少し秩序正しくする積りだから皆樣の寬恕をお願ひしたい。(吉澤)

●本號にはごういふものか偶然にも登山に關するメタフイジックが色々な人の手によつてもものされた。登山の動機目的を靜かに考へる事はいゝ事に相違なからう。近頃ある登山家の考へ方に對する反撥思想が登山に對する第二の進展を意味する思索のプロセッスと見るべきか、皆さんの御判斷にまかせ度い。兎に角こういつたテーマを捉へて考へて見るといふ事はうれしい事だ。(松倉)

編輯委員　松倉榮司　吉澤一郎　五十嵐數馬　松木謙三
渡邊九郎

大正十五年十二月十三日納本
大正十五年十二月十六日發行

【定價金壹圓參拾錢】

發行所　東京商科大學內　一橋山岳部
編輯兼發行者　東京市芝區櫻田本鄉町九番地　吉澤一郎
印刷者　東京市神田區三河町一丁目七番地　中村守雄
印刷所　東京市神田區三河町一丁目七番地　東京旭印刷株式會社
發賣所　東京商科大學內　一橋會共益部

地塲
暑避
ーキー
スの
好な
絶快
痛
夏は
冬は

全富
完豐
備量
設湯



内湯

酒屋旅館

信州飯山鐵道上境驛下車
（電話十八番）

Shiseido

香水

谷間の姫百合（リリー オフ ゼ バレー）

森の鈴蘭（ムゲ デ ボア）

この外に白薔薇、〈リオトローフ〉フリージヤ、ローズ、白菫なごがあります。いづれも爽な匂と色とそして優れた形とを有って居ります。（¥1.00）

過酸化水素キユーカンバー（ねはらぬ美白化粧水）（¥50）

東京銀座 資生堂 大阪心斎橋 福岡

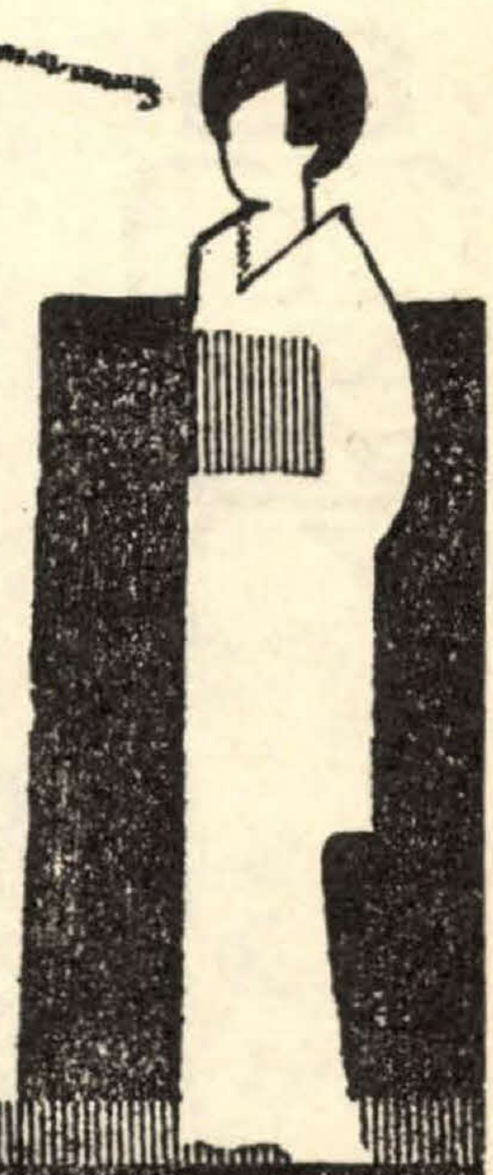
各地チエンストア

清新な声帯充電

は（銀座）（野上）松坂屋

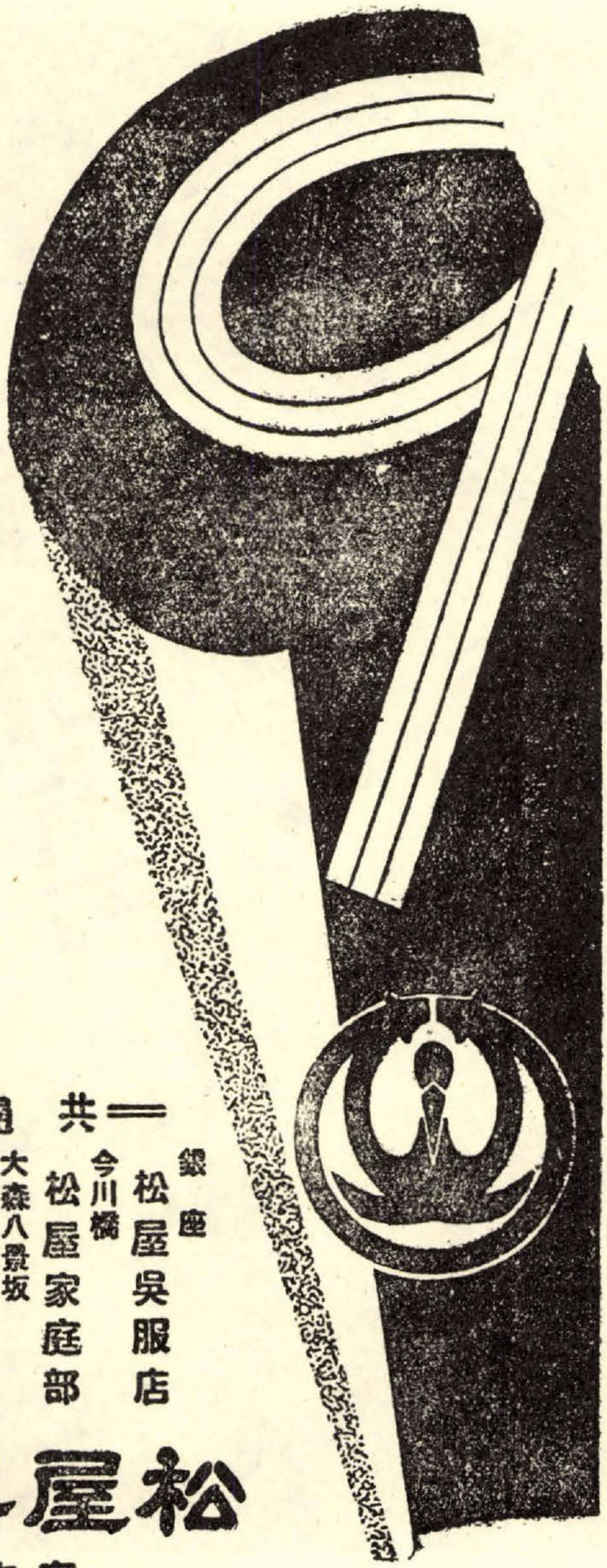
化粧的の

アトストンメトーバテ



御贈答には

松屋の商品券

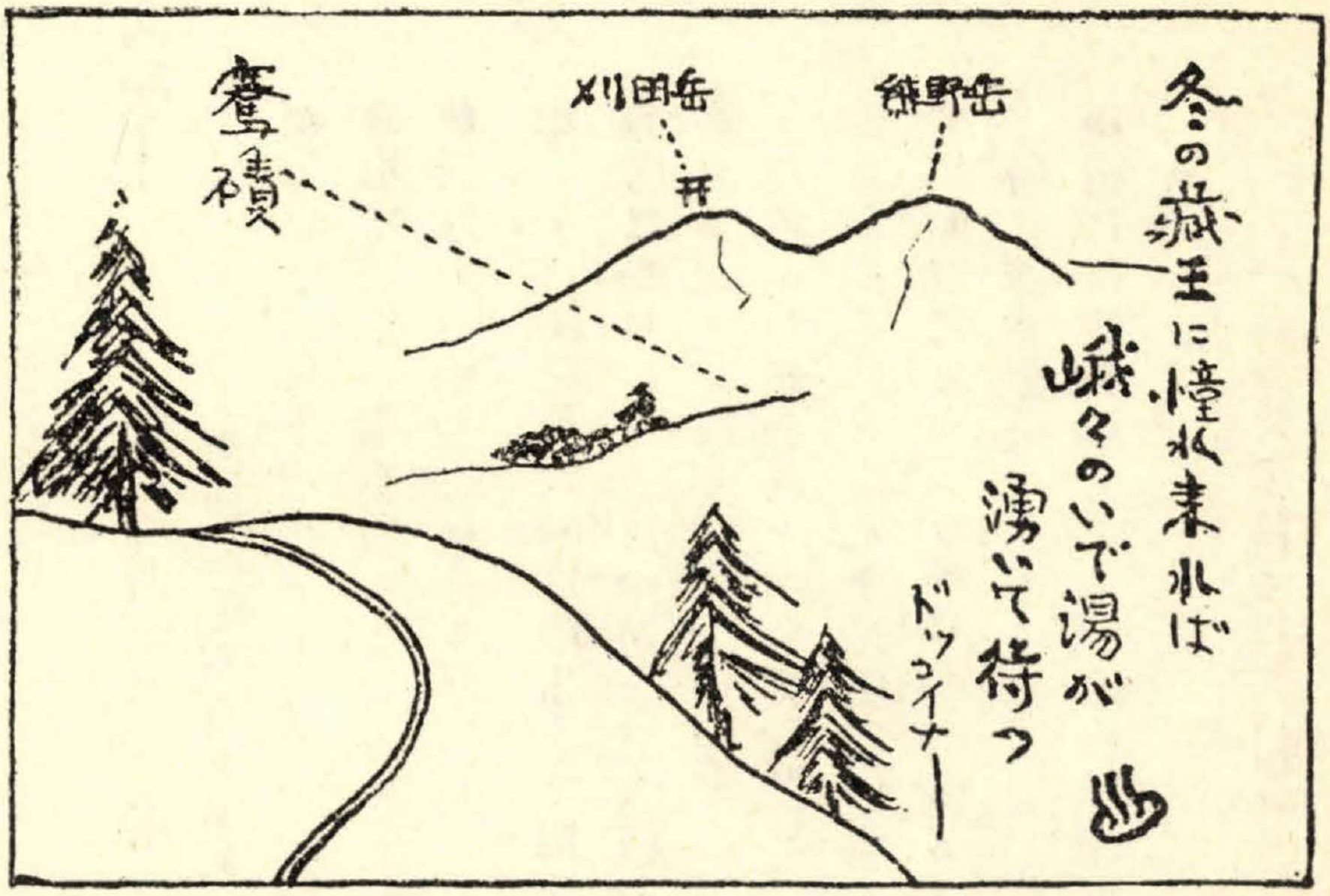


共通

銀座　松屋呉服店
今川橋　松屋家庭部
大森八景坂　松屋大森賣店
横濱吉田橋　鶴屋呉服店

松屋呉服店

東京銀座



藏王山彙への登山根據地

——理想的の粉雪——

●藏王山群も近來漸く**スキーゲピート**とし
て好適な事が知られスキー登山者も次第に增して
來ました。

●藏王山各峯へは適當な一日の**スキー登山**

●藏王スキー場(**賽の磧**)へ十二町

〔此處も清水ケ原にスキーヒュッテあり〕

●**藏王を越えて**山形縣高湯へまた上ノ山へは
いづれも一日行程の美しい立派なスキーツアー

▲上野驛も夜行に乘車し東北線大河原にて輕
便鐵道に乘り換へ、遠刈田に朝八時半着

▲是れより二里餘スキーにて登行三時間

▲上野より遠刈田までの賃金五圓七錢

宮城縣柴田郡

旅館 **峨々溫泉**

主

竹内直也

赤城山の冬

スケートには廣い場所が三つあります。
（海抜四千四百乃至八百尺）

●毎年十二月上旬から一月頃が一番宜く
●氷は油氷の極く質のよいもの
●三月末頃でも辷れます。

スキーは暮から四月中旬まで出來ます。

●雪は一月から三月中旬まで大概紛雪
◉シャンツエは非常に大規模
アプローチ…八十六米突（最急三十度）
ランデイング…八十米突（最急三十三度）
●眞面目にジャンプを練習し様とする人は
特に誠意歡迎いたします。
●宿には終日湯もあり、廣い乾燥室の設備
もあります。

群馬縣（小暮局區內）大沼湖畔

赤城旅館　猪谷六合雄

未だ俗化せぬ山々は？

銀山平——尾瀨沼
駒ケ岳——八海山
大鳥岳
未丈ケ岳——朝日岳

之等への根據地として

最も便利な所は？

新潟縣北魚沼郡湯之谷村
大湯温泉

東榮館

宿料（壹圓六拾錢）
辨當（貳拾錢）
案內料（日當參圓）

現像無料

寫眞機と寫眞材料

澤渡

芝櫻田本郷町角
電話銀座四〇二一

大槍小屋

岳子帽烏
岳師藥
——
槍ケ岳
北鎌尾根
——

走縱高穗——
——大天井岳燕岳

氣分本位の山小屋

穗刈三壽雄

畏賜秩父宮殿下
御用命之榮

天幕
リュックサック
スキー用上衣
スリーピングバッグ
雨衣

東京市
芝區松本町一
（赤羽橋停留場前）

和泉屋本店

雨具
天幕商

水野兼治郎商店

電話高輪三七六一
振替東京八六三四

カメラの

御用命は是非當店へ

目下賣出中**特價表**出來致して
居りますから御申越下さい。

東京市神田區南神保町拾六番地

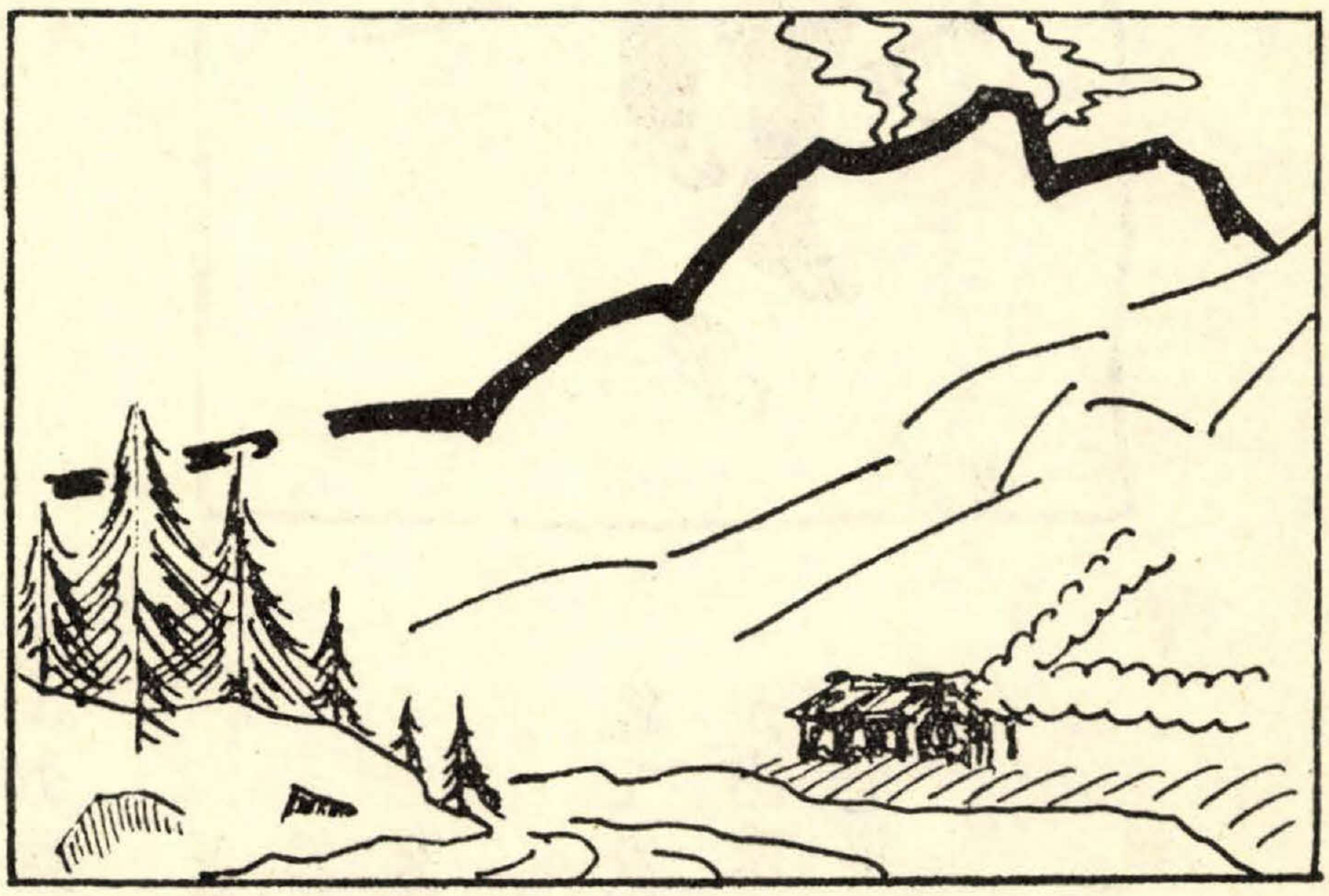
寫眞機械及諸材料
直輸入製造卸小賣

鳩　嶺　堂

電話四谷五八一四番
振替東京一八四三九番

上高地温泉

清水屋



登山の民衆化

と

安慰低廉の温泉宿

前穂高岳一日で往復●霞澤岳焼岳は半日で往復



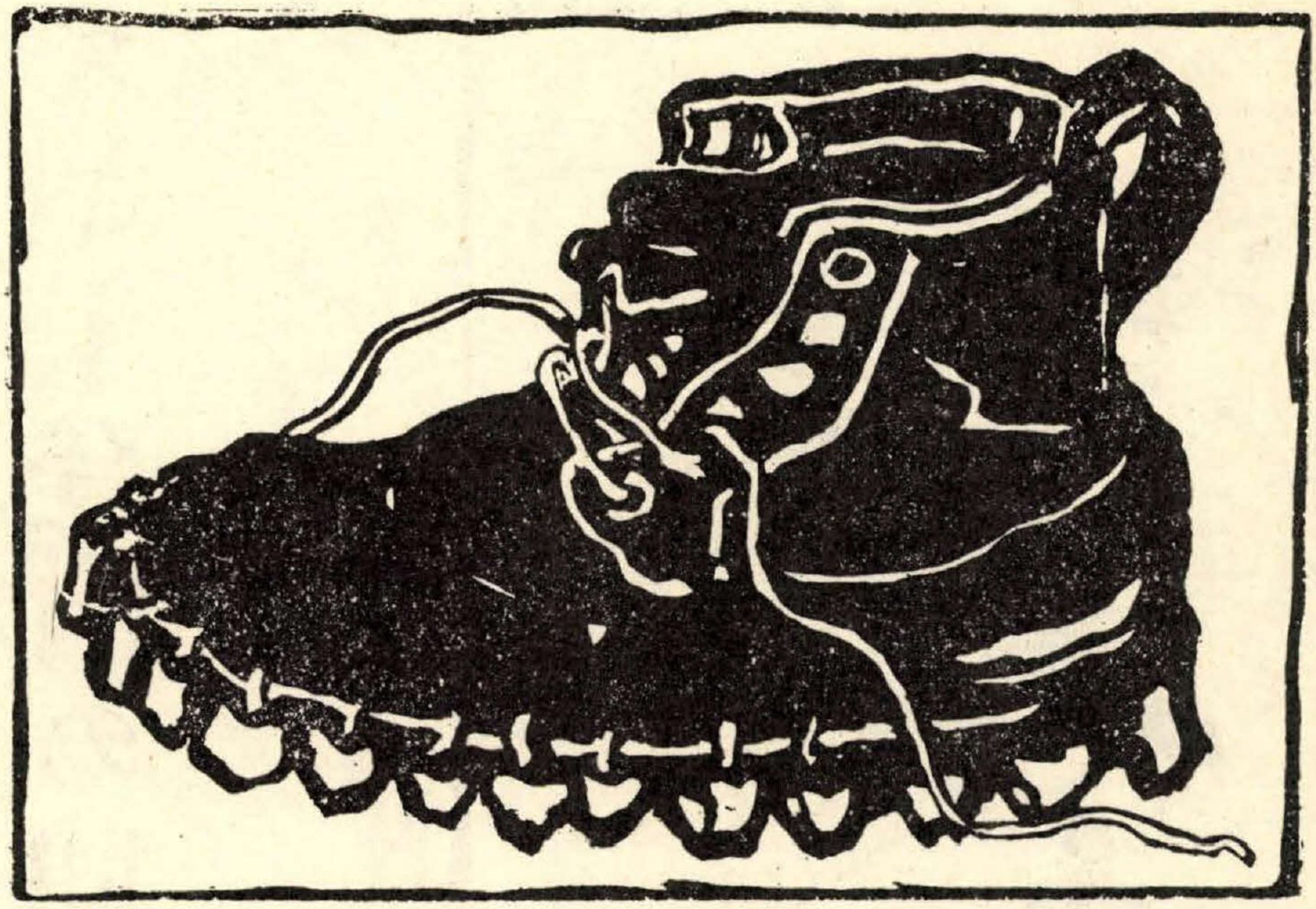
多年の熱心なる研究的製作の結果

輕快な競技用スキー——
健實な登山用スキー——
安價な練習用スキー——

總て外國品に劣らぬ確實なスキーが出來る様になりました。
是非一度は御試し下さい。

越後長岡市觀光院町

小島スキー店



スキー靴と登山靴

比無　牢堅
全完　水防

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二
振替東京六一二七

スキー登山の期來る!!!



經驗を基としての製品

▶テ　ン　ト　各　種
▶リ　ユ　ツ　ク　サ　ツ　ク
▶シ　ユ　ラ　ー　フ　ザ　ツ　ク
▶ア　ザ　ラ　シ　皮
（特價新製品）
▶アルペンストツク
▶其　　他

東京市京橋區
新富町四ノ一

片桐貞盛商店

（カタログ進呈）



Die Hütte

AM

Tsubakurodake

海抜二七五〇米突

燕の小屋

設備完全眺望絶佳

登山

商科大學豫科教授　理學士　田中薰先生著

登山家は是非一讀ありたし

著者は十數年に亘る經驗と氏の豐富なる地理學的知識とをもつて獨特な登山書を公にした。序にのべる如く（一）風景の觀賞に地形學の知識を取入れ（二）日本には日本の實質に應じた登山を盛んにしたき事（三）四季を通じ山岳に親む樣にしたき事等に多くの頁を費してゐる。（四）婦人の登山は服裝問題から解決したき事に對しても細說してある。學的研究は他に類なき特色で冬季の雪中登山は十數年に亘る經驗と氏の豐富なる地理學的知識とをもつて獨特な登山書を公にした。序にのべる如く（一）風景の觀賞に地形學の知識を取入れ（二）日本には日本の實質に應じた登山を盛んにしたき事（三）四季を通じ山岳に親む樣にしたき事等に多くの頁を費してゐる。（四）婦人の登山は服裝問題から解決したき事に對しても細說してある。猶本書の科學的研究は他に類なき特色で冬季の雪中登山

目次

第一編　山に對する態度
第一章　自然の尤たる山（三節略）
第二章　登山の發達に就て（九節略）
第二編　山に對する豫備的知識
第一章　登山スポーツ（以下一〇節略）
第二章　地形の諸相（六節略）
第三章　溪谷（七節略）
第四章　山岳（六節略）
第五章　氷河地形（七節略）
第六章　造山作用（六節略）
第三編　山岳に關する實際的知識
第一章　山岳地の氣象（七節略）
第二章　雪及雪崩（九節略）
第四編　登山に關する知識
第一章　登山の前に起る問題（十七節略）
第二章　發山中に起る問題（十一節略）
第三章　發山後に起る問題（三節略）
第四章　雪中の登山（七節略）
第五章　岩（八節）
第六章　心づきしまゝに（五節略）

笹川速旌先生著　**スキーイング**　（四六判洋製　定價金二圓也　說明圖多數入　郵稅十二錢）

五代正友先生著　**スケーティング**　（四六判洋裝　定價金一圓八十錢　插圖八十餘個　郵稅十二錢）

△四六判全一冊△插繪五十餘個△紙數三〇〇頁△定價金二圓二十錢△郵稅四十二錢

東京傳馬町二ノ五　東京市京橋區　南光堂書店發行　振替第二八〇番　東京九口座

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

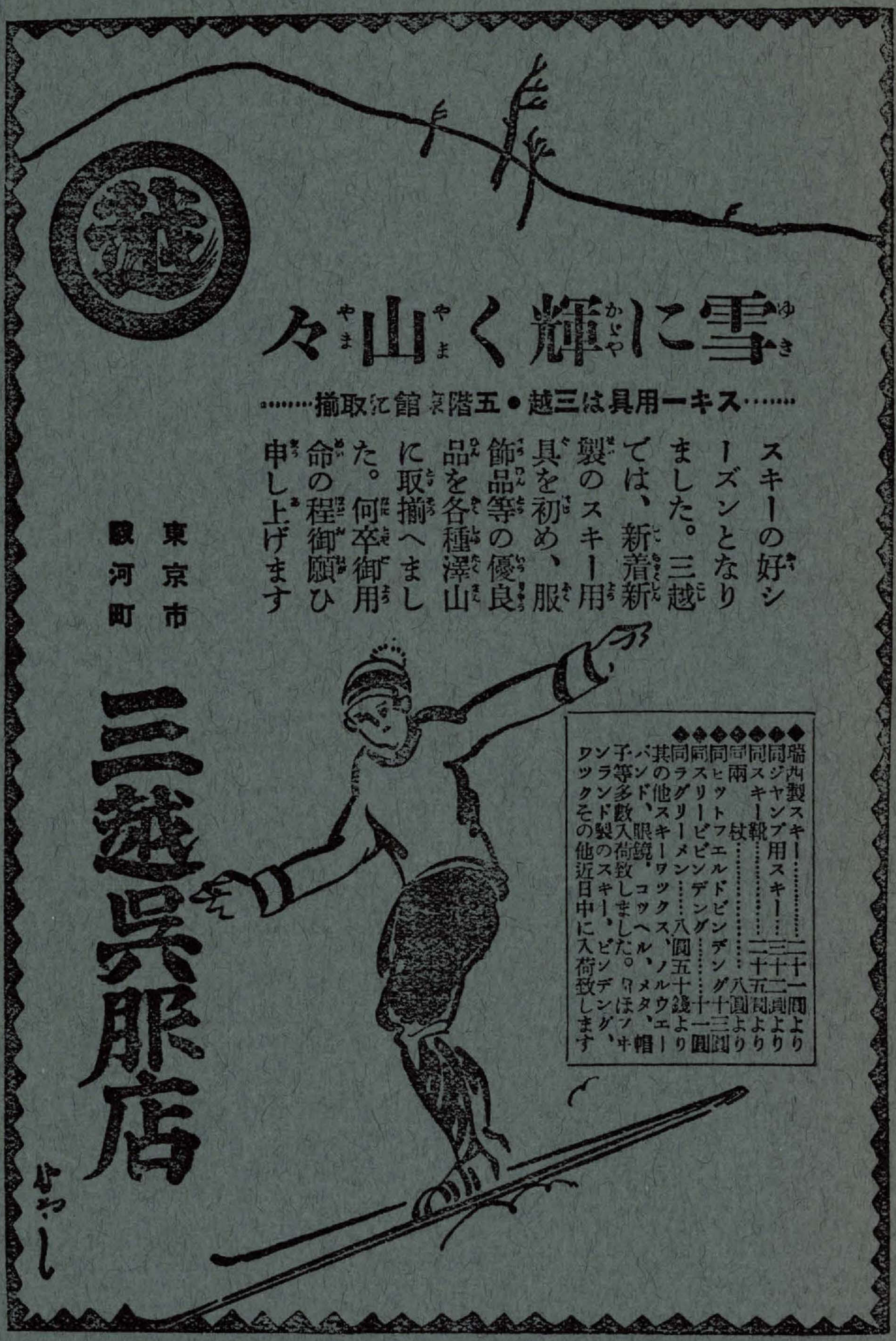
『針　葉　樹』第２号　復刻

昭和60年７月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会

編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　㈱　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７

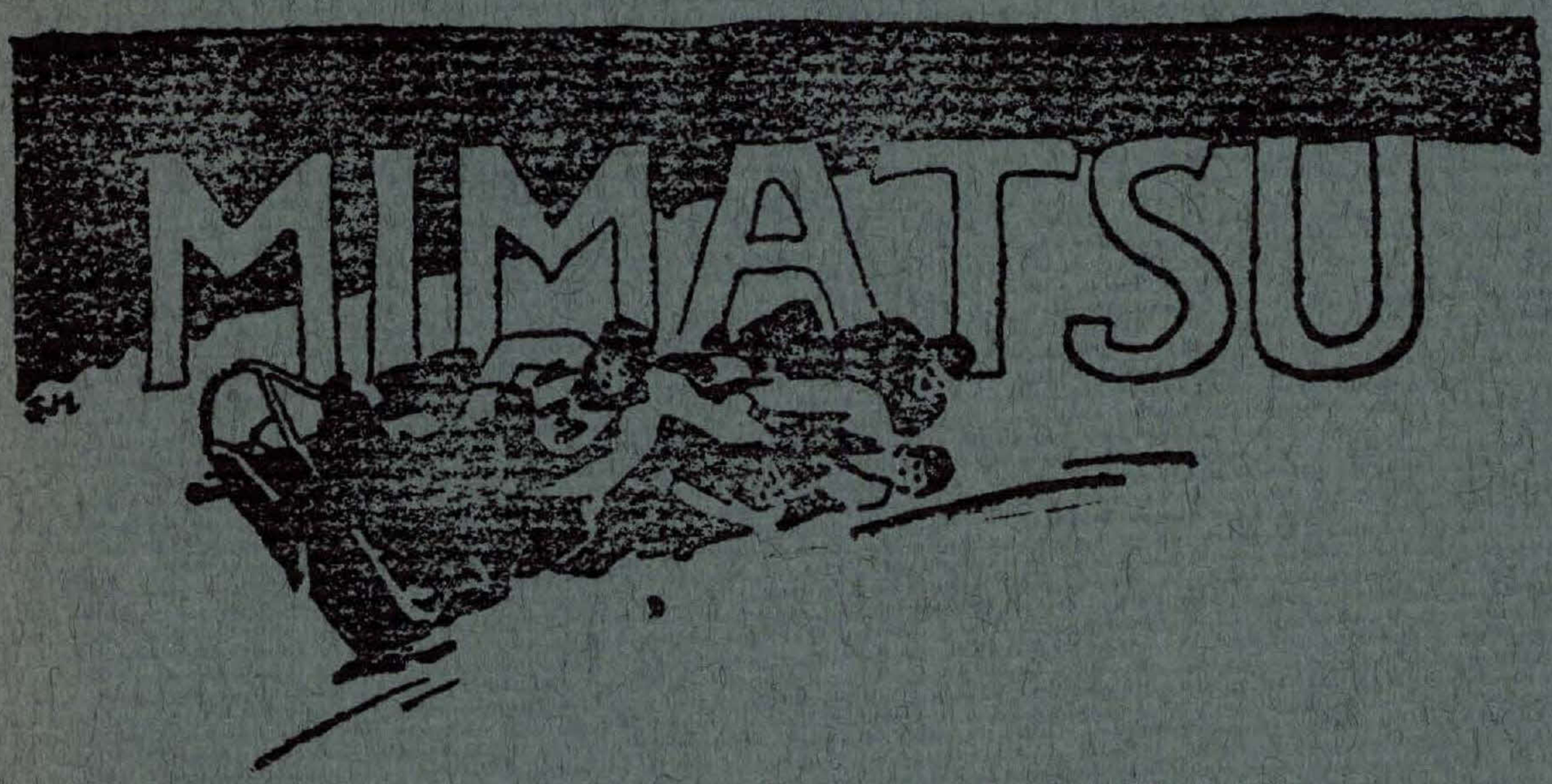


スキーの好シーズンとなりました。三越では、新着新製のスキー用具を初め、服飾品等の優良品を各種澤山に取揃へました。何卒御用命の程御願ひ申し上げます

◆瑞西製スキー……二十一圓より
◆同ジヤンプ用スキー……三十二圓より
◆同スキー靴……二十五圓より
◆同杖……八圓より
◆同ヒツトフエルドビンデング……十三圓
◆同スリービンデング……十一圓
◆同ラグリーメン……八圓五十錢より
其の他スキーワツクス、ノルウエー帽子、バンド、眼鏡、コツヘル、メタ、等多數入荷致しました。ほゝ……ランド製のスキー、ビンデング、ワツクその他近日中に入荷致します

東京市
日本橋區
駿河町

The Leading Winter Sport House.



美滿津特製

慶大山岳部、學習院山岳部、早大スキー部
一高スキー部
帝大山岳、スキー部御用

スキー及びビンディング
ポップスレー
スレッヂとトボーガン
スノーシュウ



冬期登山用具各種
ウィンター・キャンピング用具
フィギュア・ホッキー・スピード
スケート
アイス・ヤット等

合名會社

美滿津商店

東京・本郷・赤門前
電話（小石川）八四五・二〇七一